

国士舘大学審査学位論文

「アッシリア・コロニー時代の錫と銅の交易と青銅製品」

常木 麻衣

<博士論文>

アッシリア・コロニー時代の錫と銅の交易と青銅製品

Bronze Objects and Trade in Tin and Copper  
in the Assyrian Colony Period

常木 麻衣

Mai TSUNEKI

国土舘大学大学院グローバルアジア研究科  
グローバルアジア研究専攻・文化遺産学研究分野

令和 元年 9 月

本 文

## 目次

### 本文挿入図表目録

<b>第 1 章</b>	<b>はじめに</b>	<b>1</b>
1.1	研究背景	1
1.2	研究対象と目的	3
1.3	研究方法	4
1.4	研究対象の時期区分	5
1.4.1.	キュルテペから出土した史料	7
1.4.2.	アッシリア・コロニー時代の年代	10
1.4.3.	アッシリア・コロニー時代の始まり	12
1.4.4.	交易の空白期間	14
1.4.5.	アッシリア・コロニー時代の終わり	14
<b>第 2 章</b>	<b>アッシリア商人</b>	<b>16</b>
2.1	出土した粘土板文書	16
2.1.1.	キュルテペから出土した粘土板文書	17
2.1.2.	粘土板文書が出土したその他のアナトリアの遺跡	18
2.1.3.	粘土板文書が出土したメソポタミアの遺跡	19
2.2	粘土板文書の内容	20
2.3	アッシリア商人の居留地	21
2.4	隊商	24
2.5	アッシリアの交易管理	25
2.5.1.	商館の役割	25
2.5.2.	アッシリア商人の負担	27
2.6	アッシリア商人の交易路	29
<b>第 3 章</b>	<b>主要交易品</b>	<b>33</b>
3.1	交易品	33
3.2	錫の供給源と運搬	36
3.2.1.	錫の供給源	36
3.2.2.	錫の採掘時期	37



3.2.3. 錫の交易路(図 2.2 参照) .....	39
3.3 銅の供給源と運搬 .....	41
3.3.1. 銅の供給源 .....	41
3.3.2. 銅の運搬 .....	42
3.4 古代の度量衡 .....	45
3.5 物の価値と価格 .....	48
3.5.1. 交易品の価格 .....	48
3.5.2. 青銅製品の生産量 .....	49
3.5.3. 青銅製品の価格 .....	50
<b>第 4 章 青銅製品の型式分類 .....</b>	<b>53</b>
4.1 短剣 .....	53
4.1.1. タイプ 1a (図版 2) .....	54
4.1.2. タイプ 1b (図版 3) .....	55
4.1.3. タイプ 1c (図版 4) .....	55
4.1.4. タイプ 2 (図版 4-7) .....	56
4.1.5. タイプ 3 (図版 6) .....	57
4.2 槍先 .....	57
4.2.1. タイプ 1a (図版 7) .....	58
4.2.2. タイプ 1b (図版 7) .....	58
4.2.3. タイプ 2 (図版 8) .....	59
4.2.4. タイプ 3 (図版 8) .....	60
4.3 斧 .....	60
4.3.1. タイプ 1 (図版 9) .....	61
4.3.2. タイプ 2a (図版 10) .....	61
4.3.3. タイプ 2b (図版 11) .....	62
4.3.4. タイプ 3 (図版 11) .....	63
4.4 ハンマー斧 (図版 11) .....	63
4.5 鏃 (図版 12) .....	64
4.6 二又の武器 .....	65
4.6.1. タイプ 1 (図版 12) .....	65

4.6.2. タイプ 2 (図版 13) .....	65
4.7 ナイフ (図版 13).....	65
4.8 鎌 (図版 14) .....	66
4.9 錐 (図版 15) .....	67
4.10 鑿 .....	68
4.11 ピン .....	68
4.11.1. タイプ 1 (図版 16) .....	69
4.11.2. タイプ 2 (図版 16) .....	69
4.11.3. タイプ 3 (図版 16) .....	70
4.11.4. タイプ 4 (図版 16-18).....	70
4.11.5. タイプ 5 (図版 17) .....	71
4.11.6. タイプ 6 (図版 18) .....	72
4.11.7. タイプ 7 (図版 18) .....	72
4.11.8. タイプ 8 (図版 19) .....	73
4.11.9. タイプ 9 (図版 19) .....	73
4.11.10. タイプ 10 (図版 19).....	74
4.12 針 (図版 19).....	74
4.13 リング .....	75
4.13.1. タイプ 1 (図版 20) .....	75
4.13.2. タイプ 2 (図版 20) .....	76
4.14 スタンプ (図版 20).....	76
4.15 ピンセット .....	77
4.16 容器 (図版 21) .....	78
4.17 糸巻き .....	78
4.18 鋳型 (図版 22) .....	79
<b>第 5 章 交易に関連する遺跡とそこから出土した青銅製品 .....</b>	<b>81</b>
5.1 各遺跡のアッシリア・コロニー時代の層 .....	81
5.2 中央アナトリアの遺跡 .....	81
5.2.1. キュルテペ(Kültepe) .....	81
5.2.2. カマン・カレホユック(Kaman-Kalehöyük) .....	86

5.2.3.	ヤッス・ホユック (Yassıhöyük).....	88
5.2.4.	アリシャル・ホユック (Alişar Hüyük).....	89
5.2.5.	ボアズキョイ (Boğazköy) .....	92
5.2.6.	アジェム・ホユック (Acem Höyük).....	95
5.3	南東アナトリアの遺跡 .....	96
5.3.1.	リダル・ホユック (Lidar Höyük) .....	96
5.3.2.	ヒルベメルドゥン・テペ (Hirbemerdon Tepe).....	98
5.3.3.	ウチュテペ・ホユック (Üçtepe Höyük).....	99
5.4	北シリアと北メソポタミアの遺跡 .....	101
5.4.1.	テル・アルビッド (Tell Arbid).....	101
5.4.2.	テル・バリ (Tell Barri) .....	101
5.4.3.	チャガル・バザール (Chagar Bazar).....	102
5.4.4.	アッシュール (Aššur).....	104
<b>第 6 章</b>	<b>考察 .....</b>	<b>105</b>
6.1	カールム・カニシュ第 II 層と同時期の遺物.....	105
6.2	カールム・カニシュ第 IB 層と同時期の遺物 .....	106
6.3	文献史料と考古資料からの考察 .....	119
6.4	おわりに .....	120
<b>図版・表</b> .....	<b>123</b>	
<b>参考文献</b> .....	<b>124</b>	
<b>謝辞</b> .....	<b>134</b>	

## 本文挿入図表目録

表 1.1	カールム・カニシュ第 Ib 層と第 II 層に相当する時期	8
図 2.1	カールム・ワバルトゥムの推定位置関係	23
図 2.2	交易路と錫交易	32
図 3.1	銅交易	45
表 3.1	アナトリアでの物品の価格表	52
表 5.1	各遺跡の年代相対表	81
表 5.2	キュルテペから出土した青銅製品	83
図 5.1	出土した斧、ナイフ、槍先、二又の武器	84
図 5.2	出土した日用品、装飾品	85
図 5.3	出土した鋳型	85
図 5.4	出土した短剣、槍先、鎌刃	87
図 5.5	出土したピン、スタンプ等	87
図 5.6	出土したリング	88
表 5.3	アリシャル・ホユックから出土した青銅製品	90
図 5.7	出土した短剣、槍先等	91
図 5.8	出土した錐	91
図 5.9	出土した針、ピン、リング、ブレスレット	92
図 5.10	出土した短剣、槍先、ナイフ、鎌刃等	94
図 5.11	出土した錐、リング等	94
図 5.12	出土したピン、針	95
図 5.13	出土した鋳型、リング等	97
図 5.14	出土したピン、針等	97
図 5.15	出土した鋳型	99
表 5.4	チャガル・バザール Area BD, Area G and Area A の相対表	103
図 5.16	出土した槍先、ピン、リング等	104
表 6.1	カールム・カニシュ第 II 層と同時期にあたる層から出土した遺物	106
表 6.2	カールム・カニシュ第 Ib 層と同時期にあたる遺丘・建物跡から	

出土した遺物.....	108
表 6.3 カールム・カニシュ第 Ib 層と同時期にあたる遺丘の破壊層から 出土した遺物.....	110
表 6.4 カールム・カニシュ第 Ib 層と同時期にあたる遺丘の宮殿趾から 出土した遺物.....	112
表 6.5 カールム・カニシュ第 Ib 層と同時期にあたる遺丘の墓から出土 した遺物.....	114
表 6.6 カールム・カニシュ第 Ib 層と同時期にあたるカールム/ワバル トゥムの建物跡と工房跡から出土した遺物.....	116
表 6.7 カールム・カニシュ第 Ib 層と同時期にあたるカールム/ワバル トゥムの墓から出土した遺物.....	118

## 第1章 はじめに

アッシリア・コロニー時代(前 1930 年頃～前 1700 年頃)の中央アナトリアでは、キュルテペ(Kultepe)(古代名カニシュ)(Kaneš)を拠点とし、北メソポタミアの都市国家アッシュール(Aššur)との交易が盛んに行われていた。その交易では、アッシュールから青銅の原料となる錫や織物などを輸入し、金あるいは銀で支払いを行うものであった。金、銀などの金属鉱物資源を豊富に有するアナトリア<sup>1</sup>で、当時、それらの採掘が行われていたことは確かな事実である(Yener, Geçkinli and Özbal 1996: 375)。また、当時のアナトリアには銅を豊富に産出する鉱山が存在したことも確認されており(Dercksen 1996: 27-28)、アナトリア原産の銅に錫を加え鑄造した青銅製品が使用されていたことも、発掘調査において確認されている。しかし、錫の原産地については、確かなことがわかっていない。

2000 年以降の調査で、タウルス山脈(Yalçın 2003)や南コーカサス地域(Parzinger 2002)で錫鉱脈が発見されており、アナトリアでも錫の採掘や加工が行われていたという見解が近年主流になりつつある。しかし、アッシリア・コロニー時代に錫の採掘が行われていたかどうかは不明であり、またキュルテペ出土の粘土板文書からも、対アッシュール交易の主要品目が錫であったことは疑う余地のない事実である。従って、青銅をつくるために必要な錫の供給については、アナトリアの多くの都市や町がこの対アッシュール交易に依存していたと考えるのが現時点では妥当である(Postgate 1992: 212)。他方、青銅製品という観点からみると、それらが果たしてどのような場面で使用されていたのか、これらの点が未だ判然としていないのも課題である。

### 1.1 研究背景

銅と錫の合金である「青銅」<sup>2</sup>が登場するまでには、鑄造技術の発展に伴う

---

<sup>1</sup> 銅、錫、金などの鉱物資源が採掘されたアナトリアは、古代より鉱物資源が豊富にとれる豊かな土地であった(Muhly 2011: 858; Yener et al. 1996: 375)。そして、アッシリア・コロニー時代においても、銅、銀、金などの鉱物資源の採掘が行われていた(Wilkinson 2014: 158-166)。

<sup>2</sup> また青銅製品に付着している「緑青」は錆(腐食)であるが、一旦物を被覆してしまうと、それ以上腐食(酸化現象)が進まない。従って耐蝕性があるとされるが、「緑青」

長い金属使用の歴史がある。西アジアでは、前 7200 年頃のチャユヌ(Çayönü)から自然銅の利用が確認され、その後、精錬遺構や関連遺物が見つかるのは前 5 千年以降である(佐々木 2002:3-4)。更に硬度を増すためヒ素が混入されるようになったが、このヒ素銅<sup>3</sup>よりも硬度が強く、耐蝕性があるものが錫を混入した「青銅」である。ヒ素銅使用から青銅使用への移行は「前期青銅器時代」に成し遂げられたと考えられており(Wilkinson 2014: 153)、青銅が一般的に使用されていた時代が「中期青銅器時代」とされる。錫を入れた青銅が盛行した理由は次の 2 点に絞られると考えられる。

#### (1) 銅に錫を混ぜると融解温度が低くなる

銅の融点は約 1,085 度であり、ヒ素の融点は約 820 度である。また、錫の融点は約 230 度であることから、ヒ素銅よりも錫を混入した銅のほうが、鑄造に必要な火力が低かったと考えられる。そして、銅に錫を混ぜた場合、融点は約 700 度まで下がる。従って、青銅は火力を上げる工夫をしなくても容易に溶融することができる。適度な火力と、あとは坩堝、鑄型さえあれば、どこでも青銅製品の生産が可能となる。これが、錫が求められた主な理由であると考えられる。

#### (2) 銅に錫を混ぜると展延性と流動性が増す

融解した銅はかなりの粘着性があり、鑄型に流す工程での作業が困難を極めるが、錫を混ぜると銅の粘着性が和らぎ、鑄型の隅々までその融解物がゆきわたり、鑄造が容易になる。

このように、鑄造の利点からも銅からヒ素銅へ、そして青銅へと利器が移行していったことがわかる。

---

は基本的には銅に生じるもので、もちろん銅を主成分とする青銅にも生じる。耐蝕性は、青銅だけではなく、銅の特徴であるとも考えられる。

<sup>3</sup> ヒ素銅は、鑄造時に有毒ガスが発生するなどの問題点を抱えていた。

## 1.2 研究対象と目的

まず本稿で取り上げる青銅の範囲を述べる。青銅として最適な配分率は、銅 90%に対し、錫 10%であるとされているが、今まで行われたアナトリア出土の青銅製品の化学分析では、錫の割合が 10%に達するような資料は現在のところほとんど確認できない。その為、当時のアナトリアやメソポタミアに住む人々が、高度な鑄造技術の知識をもち得ていたかどうかは定かでない。しかし、本稿では錫の含有が明らかでなくても、青銅と報告されているものは青銅製品として扱う。

また本稿でとりあげる「青銅」とは、発掘調査の際に出土した資料に、緑青を帯びている銅合金のことを言う。実際「青銅」の外見をしているとはいえ、銅の鑄物や、錫以外のものが含まれた合金である可能性も大いにあるため注意する必要がある。

次に本稿の目的である。本稿では、青銅製品の使用が一般化した、所謂アッシリア・コロニー時代において、アッシュールが行った対アナトリア交易の様子の詳細を、キュルテペ文書の研究者の論考を基盤として、検討をおこなった上で、アッシュールからアナトリア地方に至る当時の交易路上の都市や町で使われていた青銅製品を型式分類、比較を行うことで、各都市や町の関連性を明らかにすることを目的としている。また、独自の視点として、銅や錫の産地の同定を試み、それらの交易や、キュルテペ文書中の記述から、青銅製品の価格についての推定を行う。

本稿は、6つの章に分けて構成されている。第1章では、研究背景、研究目的、該当する年代の決定について論じる。第2章では、アッシリア・コロニー時代の交易路の検証とそれに関わる事項を小項目ごとにまとめ、楔形文字文書資料を利用して、交易の全体のようなすをまとめる。第3章では、交易品、交易に掛かる経費や青銅鑄造に欠かせない銅と錫の供給源と当時の交易に関する概説を行う。第4章では、青銅製品の比較分類を行い、第5章では、関連遺跡の該当する時期の層とそこからの青銅製品について論述する。第6章では、それらの資料を用いて層序ごとに考察を行う。



### 1.3 研究方法

本稿では、アッシリア・コロニー時代に、中央アナトリアのキュルテペと北メソポタミアの都市アッシュールの間で活発に行われていた交易路上に位置する遺跡から出土した青銅製品を、型式分類に基づき比較検討を行う。青銅製品の分類に基づく形状から、共通性の有無を比較検討し、その結果に基づき考察を行う。仮に多くの共通性がある場合には、交易を通じて人々の交流が青銅製品の流通にも及んでいた可能性が見いだせるかもしれない。しかし、実際には、それらの地域で使われていた土器等の日用品には地域差がある。青銅製品における多くの共通性が見いだせるような場合には、その共通性をどのように解釈すべきかが重要な課題となる。他方、異なる場合には、土器と同じように、青銅製品においても、地域的な文化の差異に交易というものがほとんど影響を及ぼすことがなかったことを示している。これらは、考古学という観点から、本稿で最初に明らかにされなければならない点である<sup>4</sup>。また、青銅製品を取り扱う場合には、青銅製品に加え、出土した鋳型も考慮すべきものである。鋳型をみれば、製品自体がなくても青銅製品の形状が明らかになるからである。従って、本稿では鋳型も研究対象に含まれる。しかし、土器よりも地域差は少なく、また、形式も長時間である点に注意する必要がある。

加えて本稿では、アッシリア・コロニー時代のアナトリアと北メソポタミア間の広範囲における経済的な動きを見るために、錫や銅の需要と供給について、先行文献研究者の研究結果をもとに明らかにしていく。まず、歴史学上の名称である「アッシリア・コロニー時代」の時期区分の詳細を示すことで、交易の年代が明確になる。年代が明確になることで、当時のメソポタミアの王名表と照らし合わせることができ、当時の情勢が明らかになる。交易は、情勢から大きな影響を受けた為、情勢が安定しない場合は、交易路の変更を余儀なくされ、交易自体が滞ることにもなる。また、文献学的な時期区

---

<sup>4</sup> 発掘調査から出土した資料で、主な青銅製品の種類は、短剣、槍先、斧、鏃などの武器類などであるが、そのほかに、ナイフ、鎌、錐、鑿などの道具類、ピン、リング、ブレスレット／アンクレットなどの装飾品類もある。しかし、青銅製品の資料は、土器などに比べて圧倒的に出土例が少ないといった問題もある。その理由は、青銅製品は再鋳造が可能であるからである。更に出土した青銅製品そのものが年代推定できるタイプである必要がある点にも注意する必要がある。

分である「アッシリア・コロニー時代」が、考古遺物に反映できるのかどうか、ということを後の章で考察するためにも、「アッシリア・コロニー時代」の時期設定は重要であると考ええる。

更に、当時の交易路の在り方についての推定を行う。当時の交易の主要交易路は、カニシュ(キュルテペ)からユーフラテス川に至り、その川沿いに南下して北シリアのバリーフ川に達した後、東に向かいハブール盆地を経て、テル・ブラク付近からシンジャール山地を横断、テル・アッファル平原を南下してアッシュールに至るものであったと考えられている。とはいえ、アッシュールからティグリス川を北上してニネヴェ付近より西進、ハブール盆地に至るルートや、そのままティグリス川沿いに進み、トルコのウルス・ダム水没地域を西進、カニシュに至るルートも使われていた可能性も否めない。従って、主要と考えられているルート沿いの遺跡からの青銅製品のみならず、他の2つのルート沿いにある遺跡から出土した遺物も、本稿では調査対象とする。

#### 1.4 研究対象の時期区分

本稿の対象時期は、アナトリアの歴史学上、「アッシリア・コロニー時代(Assyrian Colony Period)」<sup>5</sup>と呼ばれる。この年代は、前1930年頃～前1750年頃であると考えられている。アッシリア・コロニー時代は、別の時期区分で言えば、中期青銅器時代のほぼ前半部にあたる。アナトリアの中期青銅器時代は、およそ前2000年頃から前1500年頃までと考えられており、ヒッタイト古王国時代(前1700年頃～前1500年頃)も含まれる。ただし、このような歴史的時代区分を年代上から厳密にみると、前2000年～前1930年と、

---

<sup>5</sup> 「アッシリア・コロニー時代」とは、アナトリアでの時期区分であるが、このように呼称されるようになったのは、北メソポタミアのアッシュール(Aššur)の商人がアナトリアに赴き、交易を行っていたことに起因する。アッシリア商人はアナトリアの都市に居留区を設け、そこで交易に従事しながら、現地の風習に従って暮らしていた。それら居留区は、アナトリアの諸都市にあり、その規模によってカールム(karum)やワバルトゥム(wabrtum)と呼ばれており、アナトリアの都市国家に附属する所謂「外国人街」であった。家族単位で商売を営むアッシュールの商人が家族の一員を派遣してそこに住まわせ錫や織物の売買に従事させていたのである。都市国家アッシュールの商人たちは Bit Alim と呼ばれる政府直属の集会に管理されていたが、アナトリアの都市国家では、アッシリア人からの納税という点で、お互いの利害関係が一致していた。

前 1750 年～前 1700 年という 2 つの歴史学上の空白期間が存在する。前者の空白期間は、前期青銅器時代あるいは前期青銅器時代から中期青銅器時代への過渡期とするのが妥当であると現在考えられつつある時期である。後者の空白期間はヒッタイト王国が形成されるまでの、いわゆる「揺籃期」にあたり、歴史学上ほとんど何もわかっていない時期である。

中期青銅器時代という時期区分の中で、そのような年代に位置づけられるアッシリア・コロニー時代では、北メソポタミアの都市アッシュール(Aššur)に住む人々がアナトリアの地に赴き、交易を行っていた時代でもある。アッカド語の当時のアッシリア方言である古アッシリア語を話す人々<sup>6</sup>は、アナトリアの諸都市に居住区を設け、そこに住み、アナトリアの生活様式に従って生活を送ると共にそこでの交易に従事していたのである。言い換えれば、「アッシリア<sup>7</sup>商人<sup>8</sup>」がアナトリアに住み商業活動を行っていた時代ともいえる。しかし、それらの居住地は都市国家アッシュールの特殊統治を受けることはなく、その意味においては「植民地」とはいえない場所であった。むしろそれは、「居留地」というのが妥当である<sup>9</sup>。

<sup>6</sup> 本稿では、アッカド語の古アッシリア方言を話す人々を、アッシリア人と記述することもある。

<sup>7</sup> 対アナトリア交易を始めた当時のアッシュールは、北メソポタミアに乱立する大小の都市国家の 1 つにすぎず、大きな「領域国家」を形成するような国ではなかった。「アッシリア」と呼ぶにふさわしい「領域国家」を形成するのは後世のことである。そのため、ドイツの発掘調査隊がアッシュールを発掘したときに行った「古アッシリア時代」という時期設定は北メソポタミア全域に適用できないものであることを念頭に置いておく必要がある。アッシュールの対アナトリア交易がまだ継続していた時代、アッシリアの王名表に載るシャムシ・アダド 1 世(Šamši-Adad I) が北メソポタミアに、短命ではあるが、「領域国家」をつくった。しかし、この王は明らかにアッシュールの王位の篡奪者であり、「アッシリア」という「領域国家」を形成したというよりも、シュバト・エンリル(Šubat-Enlil (現在のテル・レイラン Tell Leilan)) を首都として、独自の国「シャムシ・アダド王国」をつくり上げた人物だといった方が適切である(小口 2000: 188ff.)。また、「シャムシ・アダド王国」崩壊の後には、再び北メソポタミアは大小の都市国家に分裂する時代を迎える。後にそれを統一したのがミタンニ王国である。

<sup>8</sup> アッカド語には、旅商いを生業としたり商業関係の仕事を専業にしたりする、いわゆる「商人」に相当する言葉として、タムカールム(tamkarum) という言葉がある。アナトリア出土の古アッシリア語で書かれた文書中にも、稀にはあるが同じ言葉がみられ、主に、タムカールムと呼ばれるそのような人々は、交易を営むアッシリア人に雇われ、隊商による交易の運営を促進させる役割を演じていたという(Orlin 1970: 51-55)。しかし、交易を営むアッシリア人がタムカールムと呼ばれていたかどうかははっきりしていない(Orlin 1970: 50-51)。本来ならば、この意味での「商人(タムカールム)」と分けて、ここでの用語を使うべきであるが、便宜上、本稿では、そこで交易を営む人々を「商人」と総称している。

<sup>9</sup> “Assyrian Colony Period”は、邦訳にすると諸説があるが、英和辞典によると、“colony”には、「植民地」もしくは「居留地」という意味が見出される。しかし、邦語では「植

当時のアッシュールの対アナトリア交易の様子は、アッシュール出土の史料というよりも、アッシュールから遠く離れたアナトリアのキュルテペ出土の史料からより知られている<sup>10</sup>。なぜなら、アッシュールの古アッシリアの資料は後世の時代の遺跡によって破壊されているため、その詳細はほとんど知られていない。それに比べ、キュルテペからは、豊富な史料が出土している。

#### 1.4.1. キュルテペから出土した史料

前述した通り、キュルテペは当時カニシュ(Kaniš) と呼ばれる都市であった。キュルテペの発掘調査においては、王宮や行政府のあった主丘の東側のテラス状部でアッシリア人の居留区域カールムが発見されており、その区域には 5 つの建築層があることも確認されている。それらの建築層の第 II 層と第 Ib 層からは、今までに合わせて 2 万枚を超える楔形文字粘土板文書が出土しており、当時の交易の様子を我々にまざまざと伝えている。出土した粘土板文書は、古アッシリア語で書かれており、出土量は第 II 層(下層)のものが第 Ib 層(上層)のものより圧倒的に多い。文書の主体は、カールム在住のアッシリア人とアッシュールに居をおくアッシリア人同士の商いに関する手紙や記録からなる商業文書である。その内容からは、交易の物品やその配送などに関することはさることながら、商業上のきまりや一般の法律、アッシュールの商業面での実態、時としては政治面での状況などもわかっている(Orlin 1970: 191; Özgüç, T. 2003: 55)。つまり、アッシリア・コロニー時代とは、言い換えれば、カールム・カニシュの第 II 層と第 Ib 層の時期ということができる。従って、第 II 層の始まりの年代が必然的にアッシリア・コロニ

---

民地」と「居留地」との語彙の間に差異を感じる。アナトリア出土の古アッシリア文書の研究と発掘資料に基づく考古学的研究によると、アッシリア人はアナトリアを植民地化したというよりも、アナトリアの支配者に対し税金を払い、また現地の人々とも共存して生活していたことが明らかとなっている。

<sup>10</sup> アッシュールでは、下層に広がる古アッシリア時代の遺構の発掘面積が狭く、当時の文書はまだ僅かしか検出されていない。従って、当時の歴史は、アナトリアのキュルテペ出土の文書から復元されるといっても過言ではない。加えるに、古アッシリア語で書かれた文書は、北メソポタミアのアッシュールと、キュルテペなどのアナトリアの遺跡で見出されるだけで、むしろ北メソポタミアの他の遺跡からは、アッカド語の当時のバビロニア方言である古バビロニア語で書かれた文書が多く見出される(Postgate 1992: 49, n.63 on 307 and n.550 on 330)。これは、北メソポタミア全域に「古アッシリア時代」という時代名を適用できない理由の 1 つとなっている。

一時代の開始年代となり、第 Ib 層の終わりの年代がその時代の終了年代となる(表 1)。

表 1.1 カールム・カニシュ第 Ib 層と第 II 層に相当する時期

年代	キュルテペ(カニシュ/ネシヤ)		カニシュ/ネシヤの支配者	アッシリアの王名表に載る王 (最初の簞用数字は王名表に載る期 間を示す)	バビロン第1王朝の王 (最初の簞用数字は何代目かを示す)
	主丘	カールム区域			
1750 B.C.	6層	Ia層			7. Samsuiluma [35] (1749-1712 B.C.)
	7層	Ib層	Anitta Pithana※		
			Warsama Inar	39. Šamsi-Adad I* [33] (1813-1781 B.C.)	6. Hammurabi [55] (1792-1750 B.C.)
		Ic層 (無居住期間)		38. Erišum II 37. Naram-Sin*	
1930 B.C.	8層	II層		36. Puzur-Aššur II 35. Sargon I 34. Ikunum 33. Erišum I [40]	
	9層	III層	[ ] は治世年数 ( ) は「中年代説」による治世年 * はアッシュールの王位の継承者 ※ はカニシュの王位の継承者 — は大火災による破壊を示す		
		IV層			
	10層	(処女層)			

(Orlin 1970: Fig. 3 on p. 215 and Fig. 5 on p. 222; Walker 1995: p. 231 and p. 235 を参考にして作成)

また、カールム・カニシュ第 Ib 層の時期になると、アナトリアの王たちに関係する史料も確認できる。そのような史料と後世に伝えられた史料から、当時の情勢の一部をかいまみることができる。よく知られるものとして、次の 2 つの史料が挙げられる。

- (1) キュルテペ出土の、ママ(Mama) 国の支配者アヌム・ヒルビ(Anum hirbi) からカニシュ国の王ワルシャマ(Waršama) 宛の書簡<sup>11</sup>(Balkan 1957; Orlin 1970: 100)
- (2) ボアズキョイ出土の、所謂「アニタ碑文(Anitta Inscription)」(紺谷 1999: 133(110)-130(113) (邦訳))

<sup>11</sup> この書簡はキュルテペの主丘の、カールム区域第 Ib 層と同時期の建物から出土している(Balkan 1957: 8; Orlin 1970: 99)。

1 つ目に挙げたキュルテペ出土の書簡は、ママという国の支配者がカニシュの王に送った、いわゆる外交文書である。当時両国とも、幾つかの臣従国を支配する領域国家であったが、カニシュの臣従国の 1 つが勝手にママの領域を侵す動きをしていた為、その苦情をママの支配者がカニシュ王に申し立てたものであった(Orlin 1970: 100)。また書簡は、両国の間に条約があることにもふれ、両国間の外交関係の断絶をほのめかしていた(同上)。

この書簡からは、この時期、カニシュ自体の政治力が弱体化していたことや、カニシュと同等の力をもつような国が存在していたことが理解できる(Orlin 1970: 245)。更に重要なのは、この書簡から、カニシュの当時の支配者の名を知ることができる点である。その支配者の名は、ワルシャマと、前任者であり父であるイナル(Inar)である。

2 つ目の「アニタ碑文」は、ヒッタイトの伝承として残っていたもので、クシャラ(Kuššara)国の支配者ピトハナ(Pithana)が、ネシャ(Neša)を攻略したこと、そしてその子のアニタ(Anitta)がネシャに城壁を築き、そこを拠点として各地に遠征し、中央アナトリアに広大な領域国家を建設したという内容を伝えるものであった(Orlin 1970: 237-239 and 242-245)。その時攻略された国は、ハトウシュ(Hattuš)、ザルパ(北に位置する)、ハルキウナ(Harkiuana)、シャラトゥワル(Šalatuwar)、ウラマ(Ulama)、ブルシュハトゥム(Burušhattum)などで<sup>12</sup>、ほとんどはアッシリア人の居留区をもつ都市や町であった(Orlin 1970: 156)。

ここで注目すべきは、「アニタ碑文」にみられるネシャがカニシュであったとする説である(Orlin 1970: 244)<sup>13</sup>。もしその仮説が正しいとすれば、カニシュは、ピトハナに攻略され、更にアニタによって防御壁が築かれて、アニタがつくった広大な領域国家の首都となったということになる。キュルテペ

---

<sup>12</sup> ここに記載した都市や町の名は、キュルテペ出土の古アッシリア文書に出てくるものに合わせているため、「アニタ碑文」に実際に出てくるものとは綴りが多少異なる。「アニタ碑文」では、ハトウシュはハッティ(Hatti)、ザルパはザルプワ(Zalpuwa)、シャラトゥワルはシャラティワラ(Šalatiwara)、ウラマはウルランマ(Ullamma)、ブルシュハトゥムはブルシュハンダ(Buršhanda)として記載されている。

<sup>13</sup> 「ネシャ」と「(カ)ニシュ」という音の類似からも同一の遺跡であると考えられている(小口 2001: 44)。

の主丘からはアニタの銘をもつ、いわゆる「アニタの短剣」<sup>14</sup>が出土しており、ある程度その仮説を裏付ける証拠とみなすことができる。ただ問題なのは、ピトハナとアニタの年代的位置づけである。これには諸説あるが、筆者はオーリンの説に従い、カールム・カニシュ第 Ib 層の時期の後半部にもっていくことにする(Orlin 1970: 245)<sup>15</sup>。

以上を総括すると、第 Ib 層の時期の前半にカニシュにはイナルとワルシャマという支配者がいたが、カニシュ自体の政治力が弱体化していたことにより、後半には、クシャラのピトハナが攻略したこと。そしてピトハナとアニタがカニシュを支配してネシャと呼んでいたことなどが、これらの史料から知ることができる。

#### 1.4.2. アッシリア・コロニー時代の年代

年代を決定する上では、カールム・カニシュ出土の粘土板文書を基盤にしてアッシリア側から考えるのが妥当である。なぜなら、アッシリア側には、連綿と続く統治者たる王の名前（一部は欠損する）と、それぞれの王の治世年数が記述された「王名表」が現存しており(cf. Walker 1995: 231-233)、また、年ごとに選ばれた高官(リンム limmu)の名をもって年号を示すという年代表記法があることで、年代推定がしやすいからである<sup>16</sup>。

アッシリア商人居留地時代の第 1 期(すなわちカールム・カニシュ第 II 層)は、アッシリアの王名表の 33 番目に載るエリシュム 1 世(Erišum I)に始まると考えられている。キュルテペからは、その王の名を直接記す文書や、その王のアッシュール神殿の造営に関する建築碑文の写本が出土しており、これらの資料から、第 II 層がこの王の時に始まるという根拠になっている(Orlin 1970: 191-192; Larsen 1976: 81)。

アッシリアの王名表はエリシュム 1 世に次いで、イクヌム(Ikunum)、サルゴン 1 世(Sargon I)<sup>17</sup>、プズル・アッシュール 2 世(Puzr-Aššur II)と王の名前

<sup>14</sup> 実際には精巧な槍先の刃である(Kulakoğlu:1018)。

<sup>15</sup> この説は、ピトハナのカニシュ攻略は町自体にそれほど甚大なる被害をもたらさなかったという前提にたつものである(Orlin 1970: 245)。

<sup>16</sup> アナトリア側には、年代推定を可能にするような史料がないということも理由の 1 つである。

<sup>17</sup> サルゴンは聖書にみられる名であり、本当の名は「正統な王」という意味をもつシ

を列挙している(Walker 1995: 231)。しかし、カールム・カニシュ第 II 層出土の文書の中には、サルゴン 1 世とプズル・アッシュール 2 世の名を直接記したものがあり、第 II 層出土文書の多くは、これらの二人の王の治世年間に属するものであることがわかっている(Larsen 1976: 81)。このことから、カールム・カニシュ第 II 層は、エリシュム 1 世の治世下に始まり、プズル・アッシュール 2 世の治世まで続いたとされている。

大規模な焼土層の存在といった考古学的証拠が示すように、この第 II 層は大火災により終焉を迎える<sup>18</sup>。その後、第 Ib 層で再建が行われ居住が再開されるまで居住がなく、この期間は第 Ic 層と呼ばれる。第 Ic 層の時期には、アッシュールでも政変が起きたようである。なぜなら、アッシリアの王名表ではプズル・アッシュール 2 世の次の王としてナラム・シン(Naram-Sin)、次いでエリシュム 2 世(Erišum II)が記載されている。しかし、ナラム・シンはアッシュールの王位の篡奪者であったようだ。その証拠として、同時期、ティグリス川の支流ディヤラ川沿いにあったエシュヌナ(Ešnunna)王国にナラム・シンと名のる、アッシリアの王名表と同名の王がおり、その王の「年名」の 1 つに「アシュナクム(Ašnakkum)を征服した年」と記録されたもの<sup>19</sup>があるからである。アシュナクムは、シリア東北部のハブール盆地の中にあった町であると考えられており、この遠征時にアッシュールをも征服したと考えられている(Larsen 1976: 42, citing Landsberger 1954: 35)。しかし、アッシリアの王名表に見られる次の王エリシュム 2 世は、王名表の中では、ナラ

---

ヤルルキン(Šarruken)という。

<sup>18</sup> キュルテペすなわちカニシュにおける、この大火災による破壊は、アナトリアの内部抗争によるもので、カニシュだけで起ったものであり、他のアッシリア人の居住地がある都市にまで及ぶものではなかったと考えられている(Veenhof 1985: 193)。もちろん、本文で後述するアッシュール自体での政変とは無関係であるということだ(同上)。カニシュにおける大火災は、カニシュの北方にある国ザルパ(Zalpa)によるものではないかと考えられている(Balkan 1957: 59; cf. Orlin 1970: 242-245)。ボアズキョイ出土の所謂「アニタ碑文」が、アニタ(Annita)以前の出来事として、ザルパの王ウフナ(Uhna)がネシャ国の神像を持ち去ったということを伝えており、オーリンが指摘するように(Orlin 1970: 244)、カニシュ=ネシャ(Kaniš=Neša)という仮説が正しいとすれば、破壊者がザルパであった十分な可能性が出てくる。

<sup>19</sup> Goetze 1953: 59 を参照。その「年名」をもつ文書は、ティグリス川の支流ディヤラ川沿いの遺跡テル・アスマル(Tell Asmar、古代都市名エシュヌナ Ešnunna)から出土したものである。また、「年名」(year-name あるいは date-formula)とは、前年に起きた出来事をその年の名前とする、年号を表す方法である(フィネガン 1983: 40)。これは、主に、南メソポタミアすなわちバビロニアで用いられた年代表記定式である。アッシリアのリンム名による年代表記法とは異なるものである。



ム・シンの子として記載されているが、ナラム・シンの実の子であったのか、アッシュールの正統な王位継承者が王位を奪回したのか、定かではない。いずれにせよ、すぐに、アッシュールの王位はシャムシ・アダド 1 世によって篡奪されたことになる(同上)。

カールム・カニシュの居住は、このシャムシ・アダド 1 世の治世中(1813-1781 B.C.)に再開された。このことは、カールム区域第 Ib 層出土の文書にみられるリンムの年号から明らかである(Balkan 1955: 42-44)。

#### 1.4.3. アッシリア・コロニー時代の始まり

アッシリア・コロニー時代が、前 1930 年頃に始まるという点について簡単にふれる。アッシリアの王名表には、エリシュム 1 世の治世年数(40 年)とシャムシ・アダド 1 世の治世年数(33 年)だけしか記載がなく、その間の王たちの治世年数が不明である(cf. Walker 1995: 231)。

アッシリアの王名表で 106 番目にあたる王アッシュール・ダン 3 世(Aššur-dan III、772-755 B.C.)のときに、別の史料から日食があったこと(治世第 10 年(763 B.C.))が知られている(フィネガン 1983: 113; Walker 1995: 233)。これを基準にして王名表にみられる各王の治世年数を遡って計算していくと、67 番目の王(前 1430 年～前 1425 年)までの年代が算定可能となる。しかし、40 番目から 66 番目の王たちの中には治世年数が欠損するものがある。ところが、39 番目の王として記載されるシャムシ・アダド 1 世だけは、マリ(Mari)文書からバビロンのハンムラビ(Hammurabi、前 1792 年～前 1750 年)と同時代の王であることが知られ<sup>20</sup>、それと共にシャムシ・アダド 1 世の

<sup>20</sup> シャムシ・アダド 1 世とバビロン第 1 王朝の 6 代目の王ハンムラビが同時代の人物だということは、年代を考える上で、問題を生じさせている。南メソポタミアすなわちバビロニアでは、歴史上のダーク・エイジに入る前において、天文学的な記録が残っており、それを基にして、年代の算定が行われるが、それは、3 つの年代の設定を可能ならしめている(フィネガン 1983: 註 93 (註の頁 38))。従って、アッシリアの方でも、年代を算定する上で、その影響を受けて、3 つの年代の設定が可能となる。バビロン第 1 王朝の 10 代目の王アンミサドゥカ(Ammisaduqa)の治世に書かれた所謂「金星文書」が、その天文学的記録を掲載するものであり、そこでは金星の消滅と再出現の観測が記録されている(フィネガン 1983: 81)。金星のこのような現象は、64 年の周期をもって起こることなので、そのことを考慮すると、年代上 3 つの説が出てくるのである(フィネガン 1983: 註 93 (註の頁 38))。従って、そこから遡って各王の治世年数を計算していくと、ハンムラビの治世第 1 年は前 1848 年、前 1792 年、前 1728 年という 3 つの年代設定が可能となる(同上)。これらは、現在、そ

死を記録するエシュヌナの「年名」<sup>21</sup>などとの関係及びアッシリアの王名表にみられる治世年数(33年)から、前1813年～前1781年とする治世年の年代の割り出しが可能となる。残る問題は、シャムシ・アダド1世と王名表の33番目に記載されるエリシュム1世との間をどのように見積もるかである。これには、後世のアッシリアの王たちの、前任の王たちの事業にも言及している建築碑文の記載が利用される(Oates 1968: n.3 on 27-28)。中でも特に利用できるのがシャルマネセル1世(Shalmaneser I、前1273年～前1244年)とエサルハドン(Esarhaddon、前680年～前669年)のものである。シャルマネセル1世の建築碑文では、エリシュム1世からシャムシ・アダド1世との間の時間の経過を159年とし(Luckenbill 1989a: 41)、他方エサルハドンのはそれを126年としている(Luckenbill 1989b: 272)。159年からシャムシ・アダド1世の治世年数33年を差し引くと126年となり、そのことから両王の書記は同じ史料を基にして年数を割り出していることが窺われ、数字の違いはどこを基点として数字を割り出すかの違いだけであることがわかる(Oates 1968: n.3 on 27-28)。こうして、126年という数字が最も信憑性がある数字となってくる。例えば、シャムシ・アダド1世の即位年からエリシュム1世の即位年までの間を126年とすれば、エリシュム1世は前1940年に即位し、その治世第1年は前1939年ということになり、40年間統治しているので、エリシュム1世の治世は前1939年～前1900年ということになるわけだ(Larsen 1976: 41)。カールム・カニシュ第II層すなわちアッシリア商人居留地時代の始まりが前1930年に置かれる根拠は、このような年代の算定によるものである。

---

れぞれ「高年代説 (the high chronology)」、「中年代説 (the middle chronology)」、「低年代説 (the low chronology)」と呼ばれている (同上)。こうして、シャムシ・アダド1世の治世第1年も、前1869年、前1813年、前1877年という3つの年代設定が可能となってくるのである。いずれにせよ、本稿では、「中年代説」に従った年代を採用している。

<sup>21</sup> シャムシ・アダド1世の死については、エシュヌナ王国の支配下にあった町シャドゥプム(Šaduum)の遺跡であるテル・ハルマル(Tell Harmal)出土の文書中の「年名」に言及されている(Baqir 1949: 64)。それは、エシュヌナ王国の王イバル・ピ・エル2世(Ibal-pi-El II)の治世第5年のできごとであった(Baqir 1949: 37)。

#### 1.4.4. 交易の空白期間

戦争や紛争などが起きたときは、当然交易活動は中断され、隊商の行き来はなくなった(cf. Barjamovic 2011: 30-36)。実際に、カールム・カニシュ第 II 層と第 Ib 層の時期の間には、交易活動の中断があった。その時カニシュ側では、カニシュ自体が何かしらの争いに巻き込まれ<sup>22</sup>、都市自体が破壊を被り大火災にみまわれた。都市が再建され居住が再開される第 Ib 層の始まりと第 II 層の大火災による終焉との間の、居住が行われなかった時期がカールム・カニシュ第 Ic 層である。アッシュールの人々の交易活動が再開されるのは、シャムシ・アダド 1 世の王国が築かれ始める前 1813 年以降のことである<sup>23</sup>。

#### 1.4.5. アッシリア・コロニー時代の終わり

アッシリア・コロニー時代第 2 期(カールム・カニシュ第 Ib 層の時期)の終了年代すなわちアッシリア商人居留地時代の年代上の下限について考える。

<sup>22</sup> 証拠となる史料は、カールム区域第 Ib 層と同時期の主丘の建物から出土したもので「ママ国の支配者アヌム・ヒルビからカニシュ国の王ワルシャマ宛ての書簡」(Balkan 1957)として知られている。更に、カールム・カニシュ第 II 層の時期のカニシュの支配者の名は未だ知られていないが、カールム・カニシュ第 Ib 層の時期のカニシュの支配者の名は、従来知られていた③イナル(Inar)、④ワルシャマ(Waršam)、⑤ピトハナ(Pithana)、⑥アニタ(Anitta)に加え、①フルメリ(Hurmeli)、②バハヌ(Bahanu)、⑦ズズ(Zuzu)などが知られるようになってきている(Barjamovic, Hertel and Larsen 2012: 40; Larsen 2015:32-34)。統治の順序は以上、番号で示してある。

<sup>23</sup> まだ仮設の域をでていないが、アッシリア王プズル・アッシュール II 世の死後、都市国家アッシュールの王位が篡奪され、その都市国家は、南東方向のディヤラ川流域にあった都市国家エシュヌンナの支配下に一時、陥ったようなのである(D. Oates 1968: 25)。王位の篡奪者は、エシュヌンナの王ナラム・シンであったと考えられている。その都市遺跡テル・アスマル出土の粘土板文書の「年名」がその王のアシュナクムの征服を記録しているが、アシュナクム(Ašnakkum = ?チャガル・バザール Chagar Bazar)は、シリア東北部のハブール盆地の中にあつた町であり、アッシュールは、エシュヌンナからハブール盆地に向かう最初の通過点にあたるので、その仮設は当を得ているように思われる(Larsen 1976: 42)。ナラム・シンという名そのものは、アッシリアの王名表にも、アッシリアの一王として、またプズル・アッシュール II 世の息子として、みられるものであるが、その王自身は実際にはエシュヌンナの王であった可能性が高い。アッシリアの王名表はナラム・シンの次の王として、エリシュム II 世を挙げる。この王は、次の王位の篡奪者シャムシ・アダド I 世によって、王位を追われた。また、シャムシ・アダド I 世は、西セム語のアムル語を話すアムル人であった。このことは、それまでのアッシュールの諸王が東セム語のアッカド語の一方言を話す人々(アッカド人)であったことと対比される。加えて、シャムシ・アダド I 世の王国の中では、文書を書くとき、古バビロニア語が使われた。それは、王名表の特別記事にみられるような、シャムシ・アダド I 世の経歴に起因するものであるのかもしれない。

シャムシ・アダド 1 世のときに、カールム・カニシュの居住が再開されたことは既に言及した。アッシリア側では、シャムシ・アダド 1 世の死後(前 1781 年の後)、混沌とした状態が続くが、アッシュールの対アナトリア交易は、それでもなお続いていたようだ。北メソポタミアの遺跡からも、それを裏付けることができるような史料が発見されている(小口 2001: 43)。とはいえ、その終了年代については、従来、カールム・カニシュ第 1b 層出土の円筒印章に刻まれた図柄の様式の研究から居住がどのくらい続いたかを見積もることによって、推定が行われている。主にバビロニアの円筒印章の図柄の様式との比較において、年代算定を行う試みである。様式上の発展という観点からなされた研究は、キュルテペの円筒印章がバビロン第 1 王朝のハンムラビの治世の終わり頃か、あるいは、どんなに遅くとも同王朝の次の王サムスイルナ(Samsuiluna、1749–1712 B.C.)の治世の最初の 10 年ぐらいまで続く様式であることを示唆している(Özgüç, N. 1968b: 319; cf. Buchanan 1969: 759)。そして、カールム・カニシュ第 1b 層の時期にはカニシュ国の政治力も弱体化していたようである<sup>24</sup>。あらゆる状況証拠から、カールム・カニシュ第 1b 層の居住が前 1750 年頃まで続いたことを示しており、言うまでもなく、これがアッシリア・コロニー時代の終了年代である。

これらのことから、カールム・カニシュ第 II 層は、前 1930 年頃～前 1824 年頃、第 1b 層を前 1813 年頃～前 1750 年頃と年代づけた。

---

<sup>24</sup> 「ママ国の支配者アヌム・ヒルビからカニシュ国の王ワルシャマ宛ての書簡」は、いわゆる外交文書であり、カニシュの臣従国の 1 つが勝手にママ国の領域を侵す動きをしていたので、その苦情をカニシュ王に申し立てるものであった。また、書簡は、両国の間に条約があることにふれ、両国間の外交関係の断絶をほのめかしていた。第 II 層の時期から第 1b 層の時期にかけて、カニシュにはカールムが、ママにはワバルトゥムが存在していたが、その文書は、ママ国自体がカニシュと同等の力をもつに至ったこと、また、カニシュが臣従国を統御できなくなっていたことを示している(Orlin 1970: 100, 245)。

また、デルクセンは、カニシュ国の政治的弱体化に伴って、カニシュのカールムの力が、他の都市や町のカールムやワバルトゥムに及ばなくなっていく過程を想定している(Dercksen 2004: 116)。

## 第2章 アッシリア商人

この章では、アッシリア・コロニー時代の交易に関わる事項を小項目ごとにまとめ、楔形文字文書の解読資料を利用して、交易の全体のようなすをできるかぎり詳細にまとめる。交易の全体像を理解することは、歴史時代の考古学的な研究にとっても、まず必要とされることであり、交易路上に分布する青銅製品の比較検討を行う上でも、知っておかねばならないことである。

また、この章の中でしばしば引き合いに出される、交易の主要品目である錫と、青銅をつくる際に主原料となる銅については、更に深く言及しなければならない。錫の産地問題は、銅の産地と併せて、次章で論ずる。

### 2.1 出土した粘土板文書

アッシュールの人々が使用していた言語は古アッシリア語で、東セム語に分類されるアッカド語<sup>25</sup>の北メソポタミアの一方言である。当時、南メソポタミアではアッカド語のもう 1 つの方言である古バビロニア語が使用されていた<sup>26</sup>。古アッシリア語で書かれた文書の存在が確認できる場所は、現在、北メソポタミアのアッシュールとアナトリアのキュルテペ、そして以下本文の中で詳述するアナトリアの他の 2、3 の遺跡しか確認されていない<sup>27</sup>。

<sup>25</sup> 前 3 千年紀、南メソポタミアでは、膠着語であるシュメール語を話す人々が文明を築き上げ、初期王朝時代と称する時代を画するに至ったが、屈折語であるアッカド語を話す人々が次いでその地を支配することになった。そして、シュメール人の再興とその王朝の没落を経て、前 2000 年ごろから、西セム語に分類されるアムル語を話す人々が台頭する中、文書を書くときにはアッカド語が採用されそれが楔形文字で記された。アッカド語は、その後、地域及び時代ごとに変化し、前 1 千年紀の中頃まで、たとえ支配層が言語を異にする他の民族になろうとも、メソポタミアで連綿と文書を書くときに使われ続けた。アッカド語は、地域ごとの差異によって、例えば古アッシリア語と古バビロニア語に分けられ、それらは中期アッシリア語や中期バビロニア語へと移り変わる。そのような意味で、アッカド語はメソポタミアの「公用語」だといわれることもある。アナトリアでは、文字の導入は前 2000 年を過ぎてからのことであり、おそらく、その点で重要な役割を果たしたのがアッシュールの人々であったと考えられる。そこでは、アッシュールから来た人々だけでなく現地の支配層の人たちも、古アッシリア語を使って楔形文字を粘土板に刻み記すようになっていく。こうしてアナトリアは、メソポタミアからかなり遅れて、先史時代から歴史時代へと移行することになる。

<sup>26</sup> 前 2000 年以降この古バビロニア語は南メソポタミアにとどまらず、北メソポタミアの特に支配者のあいだでも言葉を記すときに盛んに使われるようになっていった。このような古バビロニア語の使用における急速な広がりについては、文献学上の 1 つの未決問題となっている (Postgate 1992: 69-70)。

<sup>27</sup> 唯一の例外として、古アッシリア語で書かれた粘土板文書が、南メソポタミアの北

### 2.1.1. キュルテペから出土した粘土板文書

アッシュール<sup>28</sup>から出土した古アッシリア語の史料数は、当該時期に相当する層の発掘がそれほど広範囲にわたって行われていないため極僅かである<sup>29</sup>。キュルテペは、アッシュールから北西に 1,000km を超える位置にあり、アッシュールからはかなり遠隔地にある。また、アナトリアのキュルテペから、古アッシリア語で書かれた膨大な楔形文字文書が出土しており、その史料から当時の交易の様子を窺い知ることができる。

これまでに入手されたキュルテペの粘土板文書(総計約 23,000 枚)のうち、約 4,000 枚は、19 世紀後半から 20 世紀初頭にかけて、遺跡近くの農地の中から見つかった。それらは、考古学的な側面からすれば資料価値は低いが、文献学上では寄与するところが大きい。その後、1925 年にホロズニーが指揮するチェコスロバキアの調査隊が 1,000 枚の粘土板文書を発掘している。そして、1948 年から 2000 年のトルコ調査隊の発掘調査では、17,549 枚の文書が発見され、その中の約 50 枚は主丘から出土した(Barjamovic 2011: 55-56; Veenhof and Eidem 2008: 41)<sup>30</sup>。しかし、それらの内解読されたものはまだ少

---

部、バグダード近郊の一遺跡で見つкаっている。それについては、以下、本文の中で改めて言及する。

<sup>28</sup> アッシュールは、前 3 千年紀中頃、南メソポタミアから北メソポタミアに至るルートの要衝となる地、ティグリス川中流域に出現した都市国家である。それは、古くより南メソポタミアと西方とを結ぶ交易都市として栄えていた、ユーフラテス川中流域の都市国家マリに対峙する位置にあった。都市国家アッシュールは、本稿で対象とする時期更にはミタンニ王国による支配の時代を経て、前 2 千年紀の後半に領域国家へと成長する。また一時期の衰退期を経た後、前 1 千年紀前半には、ギリシア人が「アッシリア」と称する、更に大きな領域国家に成長したことは周知のことからである。なお、歴史学観点からみて、本稿で対象とする時期は、アッシリア側においては大きく、(1)アッシュールが交易都市として栄えた時期、(2)シャムシ・アダド I 世の領域国家の一都市であった時期、(3)シャムシ・アダド I 世の王国の衰退期とその後の混乱期において一都市であった時期の 3 時期に分けられるが、アッシュールの人々のアナトリアに対する交易活動は、短期の中断を挟み、この 3 時期にわたって継続したのである。

<sup>29</sup> これまでのアッシュールの発掘で見つかった、古アッシリア語の粘土板文書は、ほとんどが中期アッシリア時代(中期アッシリア語が使われた時代)の層の中で見つかったもので、下層からの遊離遺物か、さもなければ、その時代まで保管されていたものである。他にアッシュールで発見された、古アッシリア語で書かれた史料は、建築碑文や奉納碑文などであった。

<sup>30</sup> 宮殿や行政関係の建物があつた主丘から出土した、それら 50 枚ほどの粘土板文書は、そこの第 7 層および第 8 層からのもので、カールム区域の第 II 層と第 Ib 層と同時期のものであつた(Veenhof and Eidem 2008: 41-42)。主丘では、第 1 層～第 6 層は前期青銅器時代の時期で、第 9 層は前期青銅器時代から中期青銅器時代の過渡期の時期にあたる。

数であり、約 13,000 枚が未解読のまま、アンカラのアナトリア文明博物館に保管されている。未解読のものがすべて解読されたとき、もっと豊富で適確な当時についての情報が得られるであろう。

#### 2.1.2. 粘土板文書が出土したその他のアナトリアの遺跡

その他の遺跡から出土した粘土板文書史料として、シバス近郊のカヤルプナル(Kayalıpınar)、クルシェヒル近郊のカマン・カレホユック、アリシャル・ホユック(古代名アムクワ?)、ボアズキョイ(古代名ハトゥシュ)からの出土が確認されている。

まずカヤルプナルでは、数点の古アッシリア語の文書が見つかっており、次にカマン・カレホユックで 2 枚の古アッシリア語の粘土板文書の破片が出土している(see also Barjamovic 2011: 56)。その内 1 枚は<sup>31</sup>、保存状況がよくなかったため内容の判読が困難なものであったが、カールム・カニシュ第 Ib 層と同時期のものであるとみなされている(大村 1994: 119)。もう 1 枚は<sup>32</sup>、穀物に関する請求書であり、それには、ヒッタイト起源の人名もみられるが、明らかに古アッシリア語で書かれたものであった(Omura 2002: 5)。ただそれは、この遺跡のヒッタイト帝国時代の第 IIIa 層から出土したものであったが、もとは、下層からの遊離遺物であって、アッシリア・コロニー時代に属するものと考えられている<sup>33</sup>(Yoshida 2002: 133-137)<sup>34</sup>。

更に、アリシャル・ホユックでも出土している粘土板文書は、アッシリアの年代方式であるリンム年から、カールム・カニシュ第 Ib 層と同時期のものであるとみなされている(Veenhof 1985: 199)。また、それと同時期の古アッシリア語の粘土板文書がボアズキョイの低部市街区からも出土している(Güterbock 1997: 334)。文献学上、ハトゥシュ(現ボアズキョイ)はカールム・

<sup>31</sup> 1990 年の発掘調査時に、北区、IV 区、Room No.41 の石組みの基礎部分から出土(大村 1994: 119)。

<sup>32</sup> 2001 年の発掘調査時に、北区、25 区、Room No.317 から出土(Omura 2002: 5)。

<sup>33</sup> ヒッタイト起源の人名が粘土板文書内にみられたとしても、そこで忘れてはならないことは、ネシャ語を話す所謂ヒッタイト人は、アッシリア・コロニー時代にも存在していた。このことから、ヒッタイト王国の起源に関する、カニシュ/カニシュ=ネシャ(Kaniš/Kaneš=Neša)であったのか、という問題へもつながる。

<sup>34</sup> アッシリア・コロニー時代の層をもつ遺跡がこの他にも多数あると想定されている(Barjamovic 2011: 58)。

カニシュ第 II 層の時期から第 Ib 層の時期にかけて、アッシュールの人々の居留区カールムがあった都市として、アリシャル・ホユックは、カールム・カニシュ第 Ib 層の時期に、アッシュールの人々の小規模な居留区ワバルトゥムがあった町として知られる。後者はカールム・カニシュ第 Ib 層の時期に、新しく出現した居留区であった。2011 年までに両遺跡で合計 150 枚の粘土板文書の出土があったが、そのうち 135 枚のものがカールム・カニシュ第 Ib 層と同時期のものであると確定されている。残りの 15 枚は時期不明である。

### 2.1.3. 粘土板文書が出土したメソポタミアの遺跡

量的に非常に僅かではあるが、近年北メソポタミア(当時の隊商が通過した地域)の幾つかの遺跡でも古アッシリア語で書かれた文書が見つまっている(Barjamovic 2011: 56 with n.168)<sup>35</sup>。例えば、最近の発見では北東シリアのハブール盆地の中にある遺跡テル・アルビド(Tell Arbid)で、古アッシリア文書の 1 破片が見つまっている(Barjamovic 2011: n.168 on 56)。それら出土した粘土板文書は、さまざまな理由でカールム・カニシュ第 Ib 層と同時期のものであると推測される<sup>36</sup>。

他方<sup>37</sup>、古アッシリア語で書かれた粘土板文書が、バグダード近郊の古代都市シッパル(現アブ・ハッバ遺跡)の郊外にある遺跡テル・エ・デールで発見されている(Walker 1980: 15)。また、アブ・ハッバ及びテル・エ・デールの両遺跡から出土した古バビロニア語で書かれた粘土板文書<sup>38</sup>には、複数の

<sup>35</sup> それらの遺跡については、Barjamovic 2011: n.168 on 56 で紹介されている Michel 2003 を参照。

<sup>36</sup> 北メソポタミアでは、環境の変化による無居住の時期の存在という問題と相俟って、編年上の問題があり、実際に、カールム・カニシュ第 II 層の時期と同時期の層(前 2000 年頃に始まるシャムシ・アダド 1 世の治世以前の時期)を特定するのが困難のため推定の域をでない。

<sup>37</sup> 更には、アッシュールの東方にある遺跡ヨルガン・テペ(Yorgan Tepe)でも、わずかではあるが、発掘を通して古アッシリア語で書かれた文書が見つまっているといわれていた(Veenhof 1972:190)。その遺跡がガスル(Gasur)と呼ばれていた時期の一時期のものである。ガスルは後にヌジ(Nuzi)と改名されて、ミタンニ王国時代にはその王国の重要な一都市となった。しかし、オーリンは、それは明らかにカールム・カニシュ II 層出土の文書よりも古いものであると指摘していた(Orlin 1970:177)。オーリンの見解は正しく、それらは実際には、前 3 千年紀後半のアッカド王朝時代の文書であった。

<sup>38</sup> 文書の年代は、カールム・カニシュ第 Ib 層に併行する時期のものであった(Walker



アッシリア人の名前がみられた(Walker 1980: 16)。アッシリア商人が少数そこに住んでいたことは確かだが、そこにアナトリアのものに匹敵する居留地があったかどうかは定かでない(cf. Walker 1980: 17)。とはいえ、アッシュールの人々がアナトリアへ輸出するために、バビロニアから織物を入手していたことは事実であるため、そこにアッシュール出身の人々がいたとしてもおかしくはない。

## 2.2 粘土板文書の内容

キュルテペ出土の文書史料の研究は<sup>39</sup>、新しくはデルクセン(Dercksen 1996, 2004)、古くはオーリン(Orlin 1970)やラルセン(Larsen 1976)、フェーンホフ(Veenhof 1985)などがあるが、これらの研究はアッシリア・コロニー時代の交易のようすを可能なかぎり復元し考古学では得られない情報を提供している。

キュルテペのカーラム出土の文書は、その交易が家族経営の商いであったことを明らかにしている。そして、その文書の内容は主にアッシュールから派遣されてカニシュのカーラムに住み、現地で商いを営む家族の一員と、その交易をとりしきるアッシュール在住の家長とのやりとりを記したものであった。そのやりとりからは、アッシュールの家長に対して錫や織物を早急に発送するよう催促するようすが頻繁に窺われる。出土した文書の多くは商業取引関係の文書であり、交易の物品やその量、その発送や配送にかかわること以外に、輸送にかかわる事柄も垣間見ることができる(Orlin 1970: 191)。中には、商い上の決まりごとや、債務記録家族法を含む一般の法律などに言及するもの、養子縁組、婚姻、離婚、相続などにかかわる事柄の記載もみられた(Orlin 1970: 191; Özgüç, T. 2003: 55)。稀に、ある女性に贈り物として金・銀を送った私的な手紙もあった(Veenhof and Eidem 2008: 50-54)。これらの粘土板文書のオリジナルは、カニシュのカーラム区域のアッシリア商人の家で

---

1980: 16)。

<sup>39</sup> 最新のものとしては、これまでの見解を適切にまとめたラルセンの著書(Larsen 2015)やフェーンホフとエイデムの共著(Veenhof and Eidem 2008)があり、またバイラモビッチの論考(Barjamovic 2011)、バイラモビッチ、ハーテル、ラルセンの共同論考(Barjamovic, Hertel and Larsen 2012)など、近年、キュルテペ文書に関する研究が急増、盛んになってきている。

保管され、そのコピーがアッシリア商人の手によってアッシュールまで運ばれた(Dercksen 1996: 91)。またその中には、アッシュールから送られてきた文書も確認されている。

## 2.3 アッシリア商人の居留地

アッシリア商人のアナトリアでの居留地はカールム(karum)<sup>40</sup>と呼ばれ、その小規模なものはワバルトゥム(wabartum)と呼ばれていた。そして、ワバルトゥムは近くのカールムに従属するものであった。このカールムとワバルトゥムは、中央アナトリアの都市や町に設けられ、それぞれ綿密なネットワークで結ばれており、その中心的な役割を果たしたのが、カニシュにあったカールムである。そこには、「ベート・カールム(Bit karim (カールムの家))」と呼ばれるアッシリアの出先商業管理機関のようなものがあつた(Barjamovic 2011: 56)。カールムやワバルトゥムがあつた都市や町の名については、古くはオーリンのキュルテペ出土文書の研究から知られている(Orlin 1970: 34-35)。しかしオーリンは、その研究で居留区のあつた都市や町を、カールム・カニシュ区域第 II 層と第 Ib 層のそれぞれの時期ごとに識別することができなかった。その識別は、後にラルセンによって次の通り行われた(Larsen 1976: 236-240)。尚、下線で示したのは、カールム・カニシュ第 II 層から第 Ib 層にかけて継続していたとされる地名である。

### (1) カールム・カニシュ第 II 層の時期

#### [カールム所在地 (10)]

カニシュ(=キュルテペ)、ドゥルフミト、ハトゥシュ(=ボアズキョイ)、ワフシュシャナ、ブルシュハトゥム(=? アジェムホユク)、フラマ、ハフム、ニフリヤ、ウルシュ、南のザルパ(=? テル・ハンマーム・エツ・トルクマン)

#### [ワバルトゥム所在地 (10)]

---

<sup>40</sup> カールムとは、元来アッカド語で「港」を意味し、そのことば自体はシュメール語の KAR に由来するものである(Orlin 1970: 25, n. 12 on 26-27)。

ハナクナク、ママ、バドナ、ワシュハニア、ウラマ<sup>41</sup>、シャラトゥワル、カラフナ、シャムハ、トゥフピア、北のザルパ

(2) カールム・カニシュ第 Ib 層の時期

[カールム所在地 (5)]<sup>42</sup>

カニシュ(=キュルテペ)、シャムハ、タウィニア、ティメルキア、ワシュハニア

[ワバルトゥム所在地 (2)]

アムクワ (= ? アリシャル・ホユク)、ママ

カールム・カニシュ区域出土文書のラルセンの研究では、上記のように第 II 層の時期で、少なくとも 20 の都市や町にカールムやワバルトゥムがあり、その中の 4 つが第 Ib 層の時期にも継続してカールムやワバルトゥムが置かれた都市や町であることが示されている (Larsen 1976: 236-240)。また、シャムハやワシュハニアのように、第 II 層の時期にワバルトゥムであったものが第 Ib 層の時期にカールムへ昇格している場合もあれば、タウィニアやティメルキア、アムクワのように第 Ib 層の時期に新しくカールムやワバルトゥムが設けられた場合もある。そして、ハトゥシュに比定される遺跡ボアズキョイからは、カールム・カニシュ第 Ib 層と同時期の粘土板文書が出土しており、第 Ib 層の時期にカールムが存続した都市として加えられるだろう。ただし以上の 4 つにハトゥシュを含めた 5 つ以外は、カールムとワバルトゥムが第 Ib 層の時期にも存続したのかどうかは不明である。しかし、現在の遺跡に比定できる都市や町は僅かであり、現段階ではそれらを基準として、カールムとワバルトゥムのある他の都市や町の相対的な位置関係が推測されるにとどまる (図 2.1)。

<sup>41</sup> バイラモビッチによれば、ウラマはアジェム・ホユックであるとの見解を示している (Barjamovic 2011: Fig. 39 on 411)。

<sup>42</sup> ここにハトゥシュが加えられるべきだが、その理由については本文中に詳細を記載する。



## 2.4 隊商

隊商(*elatum / harranum*)は通常複数のグループで構成されており、1つのグループに 2～3 頭ないし 5～6 頭のロバが荷物を輸送するために行動を共にしていた(Veenhof 1972: 2; Larsen 1976: 102)。隊商を率いるリーダー(*kassarum*)は一人の場合もあったが、多くの場合には 1つの隊商に数人のリーダーがおり、そのリーダーはそれぞれの商人の家族の若手から選出された(Barjamovic 2011:15)。

このような隊商は、同じ隊商に属するグループの目的地が全て同じだったわけではなく、それぞれのグループはカニシュまで大きな隊商に属し、その後カニシュより先の目的地まで旅を続けるグループもあった(川崎 1998: 2-3)<sup>43</sup>。また輸送に使われたロバは、1日最大 8 時間活動することができ、1頭が約 70～75kg の荷物を運ぶことができた(Barjamovic 2011: 16 and 34)<sup>44</sup>。ロバは、カニシュに着いた際にほとんどが売り払われた(Veenhof 1972: 2; Larsen 1976: 10; Barjamovic 2011: 16)<sup>45</sup>。また、アッシュールへの帰還時でもロバが使用された(Veenhof and Eidem 2008: 87)。

一例によれば、6 人のリーダーと複数のグループからなる隊商は約 34 頭のロバを帯同し、それらのロバの背中には計約 684 枚の織物と 20 タレント<sup>46</sup>(約 600kg)の錫が積まれていた(Barjamovic 2011: 12-13)。この場合には、貴

---

<sup>43</sup> このような隊商の移動により年間のべ何百人という人々がロバを連れだって、アッシュールからカニシュへと向かった。交易路上にある都市や町は、所謂「宿場町」として栄えた(Barjamovic 2011: table 4 on 35, and 37)。そこには、ベート・ワブルム(*bet wabrim* 「外国人の家」)と呼ばれる隊商専用の宿があった<sup>43</sup>(Barjamovic 2011: 34 with n.148)。またそこでは、道先案内をするガイドや事務手続を代行するエージェントを雇うこともできたという。運搬物品を一時的に預けることもできたようである。

<sup>44</sup> 一説によると、ロバ 1 頭には錫 72～73kg、あるいは織物 25～35 枚(= 72～73kg)積んでいたという(Larsen 2015:171)。そして、複数のロバで運ぶ 1 回分の積荷の錫を売って、少なくとも銀 20kg を得ることができたであろうと考えられている(Barjamovic 2011:12)。銀 20kg はカニシュのカーラムに住む数家族の 1 年間の生活費に相当するとみなされている(Barjamovic 2011:12 with n.57)。

<sup>45</sup> このとき、ロバ 1 頭は銀 20～30 シェケルで売れたという(Dercksen 2004:153)。ロバもまた価値があるものであったので、高額で売れたのである(Barjamovic 2011:16)。

<sup>46</sup> 「タレント(*talent*)」とは、当時の重量単位で、それと合わせて、「ミナ (*mina*)」「シェケル (*shekel* [*šekel*])」という単位も用いられた。1 *talent*=60 *mina*(s)、1 *mina*=60 *shekel*(s)であった。

石やオイル、スパイス、香料、くぎ、ピンなども積まれ、アッシュールからカニシュへと運ばれた(Barjamovic 2011: 12-13)。しかし、交易の主要品は織物や錫であって、それら以外のものが常にカニシュへ運ばれていたわけではない。

隊商の移動時は常に危険にさらされていたと思われがちだが、実際は旅の安全は確保されていた<sup>47</sup>。交易路上の安全を確保するため、隊商は各地域の支配者に通行税(ロバ1頭あたりにつきいくらか決まっていた)を支払い、その見返りとして、旅の安全が保証されていた。更に、損害を被った場合にはそれが賠償されることもあった(Barjamovic 2011: 26)。

アッシュールからカニシュへ物を運搬する隊商は、積み荷をロバに頼っていたが、キュルテペ文書によれば、アナトリア内部ではアナトリアの現地の人々のみならず、アッシリアの隊商も物の運搬にロバで牽く荷車(ereqqum/eriqqatum)を使うこともあった(Dercksen 1996: 64; Barjamovic 2011: 19-23)。この荷車は一度に約 300～600kg の荷物を運ぶことができ、銅や、木材、石材、藁などの重いあるいは嵩張る荷物が、それで運ばれた<sup>48</sup>。キュルテペ文書の中にみられる一例では、ワシュシャナ(Wahšušana)からプルシャドウム(Purušhaddum)へ銅を運ぶのに荷車が使われたという。

## 2.5 アッシリアの交易管理

### 2.5.1. 商館の役割

アッシュールには、「ベート・アールム(bet alim [市の家])」と呼ばれる商館(商業管理機関)があり、1年ごとに交代する最高官吏(リンム)がその長であった(Orlin 1970: 59; Larsen 1976: 156, 193)。そこには、単にアールム

---

<sup>47</sup> 現代でもそうであるように、旅のすべてが完全に安全だったわけではない。旅の危険について言及する文書もわずかであるが残っている(Barjamovic 2011: 26ff.)。山賊や殺人などの危険についての言及は、特にアナトリア内部でのことであったが、一般的に危険についての言及が少ないことからみて、主要交易路は比較的安全だったようである(Barjamovic 2011: 26)。

<sup>48</sup> しかし、アナトリア内部における、織物や錫以外の物品の交易に、アッシュールの人々がどの程度、関与していたかはわかっていない。ただし、後述するように、銅だけは例外であったようだ。

(alum<sup>49</sup>)と呼ばれる市の集会<sup>50</sup>が開かれる場所でもあり、その集会が輸出入の調整を行い、商業収支全般を管理していた。また、収支記録もそこに保管され、倉庫も完備されていた(Orlin 1970: 59-60)。一方、カニシュのカーラムには、「ベート・カーラム(bet karim [カーラムの家])」と呼ばれる商館(商業管理機関)があり、そこでも、交易品がアッシュールから届いたとき、また、交易品がそこを通過し他の地に運ばれるとき、種々の税金が支払われた(Orlin 1970: 59-60)。カニシュのベート・カーラムは、税を課する以外に、会計事務所のような役割も果たし、収入の預かりや資金の貸し付けも行った(Orlin 1970: 59-60)<sup>51</sup>。更には、カニシュの支配者のもとにある宮殿の行政当局へアッシリア商人が税金(輸入税とでもいうべきもの)を払うための仲介的な役割も果たしている。こうして、隊商がカニシュに着いたとき、宮殿へと導かれ、カニシュの支配者に対する税金を支払ったのである<sup>52</sup>。カニシュの支配者は、交易品の一部を買い上げる権利と贅沢品<sup>53</sup>を独占する権利をもっていた(Larsen 1976: 194, 245)。キュルテペ文書からは証左できないとはいえ、カニシュの商業管理機関と同じようなものが他の居留地カーラムにもあったのではないかと考えられている(Larsen 1976: 194)<sup>54</sup>。

アッシュールの集会アールムは、アナトリアの居留地の活動を査察するため、時折カニシュのカーラムへ使節を派遣した(Orlin 1970: 63ff.)。他のカーラムへは、カニシュ・カーラムの集会から使者が送られ、公的な業務に関する

<sup>49</sup> アールム(alum)は、アッカド語で元来「都市」を意味する言葉であるが、アッシュールでは市の集会を指す言葉としても用いられた。

<sup>50</sup> 市の集会アールムは、王のもと、アナトリアの居留地を運営するための行政や司法に係わる役割も果たした(Orlin 1970: 61ff.)。

<sup>51</sup> アッシュールの集会アールムと同じように、カーラムにも行政や司法に係わる集会があった(Orlin 1970: 61ff.)。

<sup>52</sup> 宮殿には織物の5%、錫の3%相当の税金を納めたという。

<sup>53</sup> 贅沢品とは、隕鉄(amutum/ašium)やフサルム(husarum)と呼ばれる貴石などであった(Larsen 1976:198ff.)。フサルム(husarum)はラピス・ラズリではないかと思われていたが、アッカド語ではラピス・ラズリのことを uqnum といい、husarum とは異なる。それゆえ、husarum は実際どのような貴石なのか、わかっていなかった。しかし、近年 husarum はラピス・ラズリの、アッカド語の古アッシリア語表現と断定されるようになってきている(Dercksen 2004:18 with n.42; Veenhof and Eidem 2008:84)。近東におけるラピス・ラズリの産地は唯一アフガニスタンであるので、そのことはアフガニスタンとの関係を考えることを可能にする。なお、カニシュの支配者以外のものがそのような贅沢品を取り扱う場合には、特別税(šaddu'atum)が課せられた。

<sup>54</sup> 他のカーラムに商業管理機関があったとすれば、行政や司法にかかわる集会もあったはずだ。

る指図がなされた。また必要に応じて、その集会からアッシュールへ使者が送られることもあった(Orlin 1970: 63ff.)。

また、カールムとワバルトゥムとの間では、アッシリア商人から徴収される税金に差異があったようである。カールムでは「高い」税金が課せられ、近隣のカールムに附属するワバルトゥムのほうは「低い」税金であったようだ。このように税額からしても、カールムとワバルトゥムの違いが理解できる。ワバルトゥムが近隣のカールムに附属していたことは、ワバルトゥムが、住民税の半分をカールムに納めていたという事実からも知ることができる(Dercksen 2004: 111-112)。アッシュールからきてアナトリアのカールムやワバルトゥムに住む人々は住民税を納めなければならなかったことがそこからも窺われる。

以上の交易管理システムは、家族経営の商いを基盤とするにもかかわらず、実際にはアッシュールの政府から統制を受けていたことは明らかで、その交易管理システムを維持するためにアッシュール商人は公的な場所に税を納めていた。また一方では、居留地での生活と隊商の安全を保障してもらうため、カニシュをはじめとするアナトリアの諸都市の支配者にも税を納めていた。各都市の支配者にとっては、アッシリア商人から得られる税は重要な収入源であったと考えられ、アッシリア商人のアナトリアでの商業活動は歓迎されていたと思われる。

#### 2.5.2. アッシリア商人の負担

アッシリア商人にとっての交易上の問題点の 1 つに、前節に見てきた通り、交易システムに対して、大きな課税の負担がかかったという点が挙げられた。以下、アッシュールを中心としたアッシリアの交易システムの中で、アッシリア商人に課せられた負担についてここで言及しておく。

家族単位で商いを営むアッシュール商人は、まずアッシュールから交易品を持ち出すときに、輸出税のようなものを含む種々の税金をアッシュールの商館(ベート・アールム)に払わなければならなかった<sup>55</sup>。一方、カニシュの

---

<sup>55</sup> ある例では、アッシュールを出発する際に支払われた輸出税は交易品の価格の 1/120 に相当したという。



カールムには、先にふれたように、ベート・カールムと呼ばれる商館(商業管理機関)があり、税金を納めていた(Orlin 1970: 59-60)。しかし、アッシリア商人の負担は輸出税だけでなく、前にも言及したように、旅の安全を確保するために、隊商が移動する場所ごとに通行税も支払ってきた<sup>56</sup>。

またキュルテペ文書では、交易の利益を削減する通行税の支払いや、ときには関税の支払いを逃れるため、密輸(pazzurum/ pazzurtum)が行われていた事実を明らかにしている(Veenhof 1972: 305-306; Larsen 1976: 156)。カールム・カニシュ第 Ib 層の時期であるが、ハフム(Hahhum)からカニシュまでの道には、ティメルキア(Timelkiya)を通る北ルートと、ママ(Mama)を通る南ルートがあり、この北ルートのハフム、ティメルキア間で盛んに密貿易が行われていた(川崎 1998: 6-10)。

物の運搬には通行税以外にも、食費や宿泊費を含む旅費、そして人件費などの費用がかかった<sup>57</sup>。それらの費用は、後述するように、アッシュールから発送された錫<sup>58</sup>で賄われた。通行税や関税の支払いにも錫が使われた。このように、アナトリアの都市や町だけでなく、アッシュールからカニシュに至る交易路上の都市や町でも錫は価値あるものであった。それは当然、青銅製品を作るために使われることになるものであった<sup>59</sup>。更に見逃すことができないのは、カールムやワバルトゥムに住む家族の食費を含む生活費である。少なくとも、10 人世帯の家族で年間銀 1.5kg(2 ミナ)の支出が見込まれる

<sup>56</sup> アッシュールからカニシュに至るまでに、アナトリアの内部でも通行税を支払う必要があった。例えば、川を渡るときに渡し舟の番人に、通行税を支払った。また、中央アナトリアでは、川幅の狭いところに橋が架けられることがあった。キュルテペの北東約 60km のところにあるクズルウルマク川には(現在のカラオズ Karaözü やカパルカヤ Kapalıcaya 付近)には、橋がかけられており、橋の番人に通行税を払ったという(Barjamovic 2011:23-24)。

<sup>57</sup> キュルテペ文書からは、関税の支払いにどのくらいの錫が必要とされたかといった情報は得られるが、アッシュールからカニシュまでの旅程でかかる費用についての情報はほとんどわかっていない(川崎 1998:4-5)。

<sup>58</sup> 当時の錫の標準価値は、織物 1 枚に対して錫 2 ミナであった(Dercksen 2004:151-152)。アッシュールでは、織物 1 枚 = 錫 2 ミナは銀 8 シェケル(錫 15 シェケル[1/4 ミナ] = 銀 1 シェケル)が相場であったが、カニシュでは、アッシリア商人が時折用いた銅と錫と銀の標準価値比率、銅 60 : 錫 6 : 銀 1 を基準にすると、織物 1 枚 = 錫 2 ミナ(120 シェケル)は銀 20 シェケル(錫 6 シェケル[1/10 ミナ] = 銀 1 シェケル)となり、それがアナトリアでの平均相場であったと考えられる(Dercksen 2004:152-153)。これは、あくまでも平均相場なので、実際にはアナトリアにおける錫の値はもっと高かったであろう。

<sup>59</sup> アナトリアで使われた青銅製品とカニシュからアッシュールに至る交易路上にある都市や町で使われた青銅製品との比較検討は別の章を参照。

(Barjamovic 2011: n.57 on 12)。

また、カールム・カニシュ区域の発掘<sup>60</sup>を通して明らかにされた幾つかのアッシリア商人の墓からは、アッシリア商人の富裕さを物語る、金、銀、エレクトラム(金と銀の合金)製の金属製品(带状頭飾り、頭に付ける飾り、頭輪、箔片、服の留め針、耳輪、腕輪、指輪など)が副葬品として出土している(Özgüç 1986: 24)<sup>61</sup>。このことから、長年交易が続行されたという事実は、その負担よりも交易から得られる利益のほうがかなり大きかったことを物語っている。

## 2.6 アッシリア商人の交易路

交易路の研究は、ゲッツ(Goetze 1953: 64ff.)がキュルテペ文書を元に降雨量に沿った交易路について考察した。それに対し、オーツ(Oates 1968b: 36 with n.1 and 37)は、隊商たちは、その他の抜け道となる路も知っていた可能性を指摘しているが、その記述は信頼に十分堪えうるものではない。

しかし、当時の交易路を証左する上で重要な、俗に「Old Babylonian itinerary (古バビロニア旅行記)」と呼ばれている粘土板文書がある。これは、ラルサの王リム・シンの時(カールム・カニシュ第 Ib 層の時期)に書かれたもので、南メソポタミアのラルサからユーフラテス川中流域のエマルまでの往復旅程を記録したものである。そこに記録された地名(都市や町の名)は、遺跡の比定資料として使われることもある。そこに記された交易路は、当時の主要ルートの 1 つであり、そして十中八九、カールム・カニシュ第 II 層の

---

<sup>60</sup> カールム・カニシュ区域の発掘はまた、カールムに住むアッシリア人がアナトリア様式の土器を使い、アナトリア様式の建物に住んで、実生活においては、アナトリアの生活様式に従っていたことを明らかにしている。しかし、キュルテペ文書からは、言語、年号、宗教、法律などにおいては、彼らがアッシリアの習慣を維持していたことは明らかである(Orlin 1970:28)。文書を書くときに使う楔形文字も、アッシリア人固有のものであった。また、現地人と結婚するアッシリア人も多かったという(Orlin 1970:175; Özgüç 2003:65; Barjamovic 2011:9)。アッシリア商人は、ビジネス以外に、婚姻によってもアナトリア現地のの人々との関係を深めていったのである(Veenhof and Eidem 2008:56)。当時のアナトリア現地の人々は、ヒッタイト語(ネシャ語)を話す人々や、ハッティ語を話す人々などから構成されていた。本稿では、それらの人々を総称して「アナトリア人」という。カニシュに住むアナトリア人の多くは、ヒッタイト語(ネシャ語)語を話す人々であった。

<sup>61</sup> アッシリア商人の富裕さという点では、ラルセンも墓の副葬品に着目している(Larsen 2015: 85-86)。

時期においても、主要ルートの 1 つであったと考えられている (Oguchi 1999: 98-101)。これはアッシュールからティグリス川沿いに北上して、ニネヴェ付近で西進、ハブール盆地を横断しバリーフ川上流域に達する、天水農耕地帯を通るルートでもある(同上)。

また、カールム・カニシュ第 II 層の時期から第 Ib 層の時期を通じて使われたと思われる主要な交易路の 1 つとして、アッシュールからテル・アップアル平原を通過、シンジャール山地に至り、その山地の最も低い部分を横断して、ハブール盆地の開口部にあたるテル・ブラクを通過するルートである。その後、ハブール盆地の中を通り、バリーフ川中流域か上流域に達する上記のルートと重なる。テル・ブラクはハブール盆地の中でも特異な遺跡で、古来より南メソポタミアとの関係を示す遺物が出土する遺跡である。この点からも、当時の主要な交易路の 1 つであったことは疑いない (Oguchi 1999: 100)。

もう 1 つの交易路として、ティグリス川に沿って更に北上(イラクとトルコの間の現在の幹線道路の国境付近を通過)、そしてティグリス川沿いに西へ向かい(トルコの現在のダム水没地域を通過)、現在のディヤルバクル付近を通過、ユーフラテス川最上流域を川沿いに進みカニシュに至るというルートの存在である。興味深いことに、このルートは銅の産地エルガニ・マデン地区の近くを通過する。このルートは当時も使われていたルートの 1 つであることは疑いない。ただし、当時のアッシリアの交易の主要ルートの 1 つであったかどうかを裏付ける証拠は今までなかった。しかし、トルコのティグリス川上流のダム水没地域(フルリ人が多く居住していた場所で、後にミタンニ王国の北方領域地帯となる)の調査を通じて、その地域でも「ハブール土器」や「偽ハブール土器」が出土することがわかった。このことは、少なくともカールム・カニシュ第 Ib 層の時期に、そのルートがアッシリアの交易路として利用された可能性が高いことを示す (Oguchi 1999: 100-101)。またエルガニ・マデン地区から北メソポタミアへの銅の輸送という点からも、考慮に価する証拠である。その他にも、マリ文書からユーフラテス川が物を運ぶのに使われたことが知られることなども交易路を考える上で役立つ。また、ティグリス川はユーフラテス川より傾斜がきつく流れが速いので、川を利用して物を運ぶのに適さないと一般的にいわれているが、その川の流れを利用

した輸送とも含めて交易路と考えることはある程度考慮してみる価値があるかもしれない(同上)<sup>62</sup>。

いずれにせよ、アッシュールからキュルテペまでは約 1,000km の距離があり (Klengel 1979: 143; Barjamovic 2011: 15)、当時の主要交易路は、キュルテペからユーフラテス川に至り、その川沿いに南下して北シリアのバリーフ川に達した後、東に向かいハブール盆地を経て、テル・ブラク付近からシンジャー山を横断、テル・アッファル平原を南下してアッシュールに至るものであったと考えられている。とはいえ、アッシュールからティグリス川を北上してニネヴェ付近より西進、ハブール盆地の至るルートや、そのままティグリス川沿いに進み、トルコのウルス・ダム水没地域を西進、カネシュに至るルートも使われていた可能性も否めない。当時、カネシュまでの旅程は約 5～6 週間を要した (Barjamovic 2011: 15 and 112-113)。従って、主要と考えられているルート沿いの遺跡からの青銅製品のみならず、他の 2 つのルート沿いにある遺跡から出土した遺物も、本稿では調査対象とすることで、交易路が機能していたのか、その交易路上で青銅製品が実際に普及していたのかを明らかにする 1 つの証明となるだろう。

---

<sup>62</sup> 交易路を考える上で参考になるのは、Tony Wilkinson(1990: 51)の地理形態学的な研究である。そのような研究は、現在では一般的なものになっているが、Wilkinson がそれをうちだした当時は画期的なものであった。それは、航空写真あるいは衛星画像を通じて、植生の違いから昔使われたルートを推定しようというものである。これによればハブール川上流域の平原に交易路が位置するとされている(同上)。

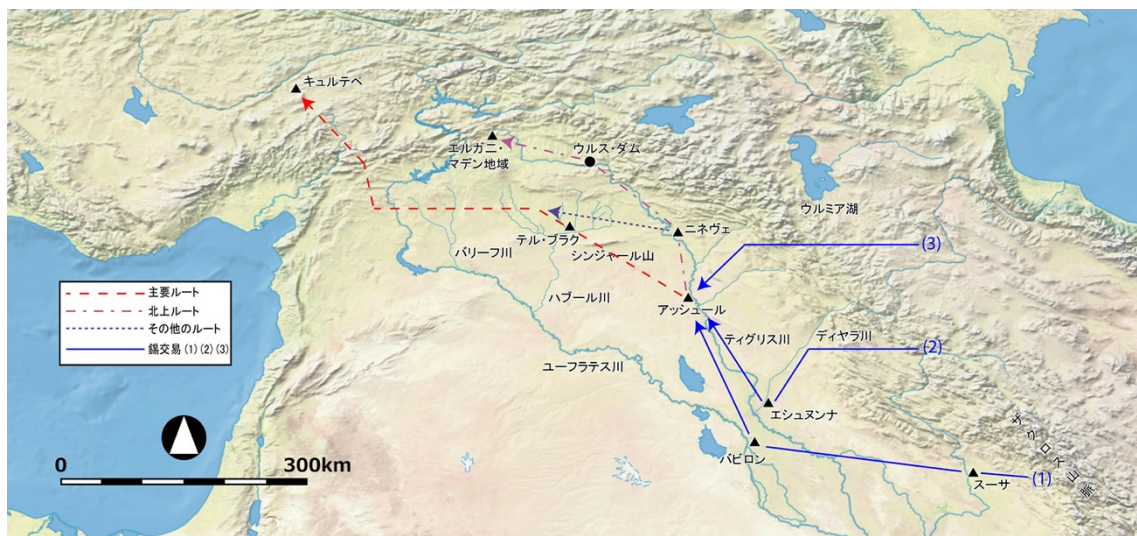


図 2.2 交易路と錫交易

### 第3章 主要交易品

この章では、交易の全体像を把握するため、主要な交易品について詳述する。特にアッシリア・コロニー時代、青銅を鑄造するための主体をなす銅と錫はどこから供給されたのか、また、青銅製品はどこで製造されたのかといった点について、問題点を指摘するとともに考察を試みる。また、青銅製品の生産量を計算する為に、古代の度量衡について新たな試みを行う。

#### 3.1 交易品<sup>63</sup>

交易品の説明に入る前に明らかにしておかなければならないことがある。それは、アッシリアの商人が以下に示す物品を売って何を手に入れたかということである。キュルテペ文書によれば、アッシリア商人は、アナトリアで貨幣の役割を果たした銀(*kaspu*)もしくは金(*hurasu*)を入手したとされる<sup>64</sup>。このことは、アッシリア商人の支払いの多くが錫であったことと比べるとお互いに必要とするものを入手できたことになる<sup>65</sup>。アナトリアは銀や金を産出する地方でもあり<sup>66</sup>、交易によって儲けた銀や金をアッシュールへ送っていた<sup>67</sup>。

ではここで、アッシリア商人の交易品の説明に入る。この交易の主要品目

---

<sup>63</sup> アッシリア商人にとって、錫を売った儲けは実際には少なかったが、アナトリアの支配層への商売戦略として錫を取り扱ったのであって、その目的は実際には織物を売ることにあった(*Barjamovic 2011: 12*)。つまり、錫よりも織物の儲けの方がかなり大きかったことが指摘されている。そうであるならば、当時の交易に関する映像は大きく変わってくる。この意見が正しいかどうかは、現時点では判断が困難であるので、本稿では、いずれにせよ、錫の儲けが大きかったとする従来の説を踏襲する。

<sup>64</sup> 当時は、銀が貨幣の役割を果たしていたので、すべての物の価値は銀の重さに換算された(*see also Orlin 1970: 57*)。

<sup>65</sup> 錫以外の銅なども、貨幣の代用として、支払いの手段として利用された。後世のような貨幣はまだなかったので、当時の交易は、物の価値が銀の重さに換算されていたとしても、まだ「物々交換」が基本だったのである。

<sup>66</sup> アナトリアは、鉱物資源が豊富に存在する場所であり、古来よりメソポタミアとの関係を有していた。特にウルク期(前 4000 年頃～前 3100 年頃)におけるウルク文化のアナトリアへのめざましい進出(前 4 千年紀後半)や、アッカド王朝時代のサルゴンとナラム・シンのアナトリア方面への遠征(前 3 千年紀後半の中頃)などは、アナトリアの鉱物資源を求めてのことであった(*Wilkinson 2014: 153*)。

<sup>67</sup> アッシリア商人が入手した金は銀よりも圧倒的に少ない。そのことは、カニシュからアッシュールへ送られたアッシリア商人の一文書によって証左できる。その文書によれば、アッシュールへは儲けとしての銀と金が銀 17 : 金 2 の割合で送られたという(*Veenhof and Eidem 2008: 88*)。これは、あくまでも一例であり、常に金が送られていたわけではない。

は錫(annakum)<sup>68</sup>と織物(kutanum, subatum など様々な種類の毛織物<sup>69</sup>)であった。錫と織物は、前述したように、アッシュールからカニシュまで隊商を組んでロバ(emarum)で輸送された<sup>70</sup>。アッシュールから発送されるとき、織物は袋に入れて封印され、錫は織物に包みロープをかけて、「封印した錫(annak kunukkim)」と「封印していない錫(annak qatim)」に分けられ、ロバに乗せられた(Veenhof 1972: 30)。annak qatim というアッカド語は「手元にある錫」という意味だが、つまり自由に使える錫のことであり、前章でも述べた隊商の旅費や、道程における通行税、関税などの支払いなどに使われた(Veenhof 1972: 257ff.)<sup>71</sup>。封印<sup>72</sup>は、それぞれロープの結び目を粘土で封じ、その粘土の上に施された。そのときの押捺<sup>73</sup>は、送り手(おそらく家長)の印か、あるいはアッシュールの集会アールムの印であった(Orlin 1970:56, 59; cf. Dercksen 2004: 90-93)。

錫のみならず、さまざまな種類の毛織物<sup>74</sup>もこの交易における重要な輸出品であったが、輸出された毛織物にはバビロニア産のものとアッシュールで生産されたものがあった。アッシュールでは、女性がバビロニア方面あるいは周辺地域から輸入した羊毛で糸を紡ぎその糸から織物を織っており、その製品は輸出品となった(Veenhof 1972: 98ff.)。一方、バビロニアからも毛織物が輸入され、カニシュに向けて再輸出された。キュルテペ文書の中では、このバビロニア産の織物は「アッカドの織物」<sup>75</sup>として頻繁に言及されている

<sup>68</sup> 交易品としての錫の取り扱い、原石ではなく、板状の鋳塊(インゴット)であった(Veenhof and Eidem 2008: 82)。

<sup>69</sup> キュルテペ文書には、亜麻製の織物の記載は皆無である(see Veenhof 1972: 151-152)。

<sup>70</sup> 前述したように、ロバは物の運搬に使われたもので交易品ではなかったが、ほとんどがアナトリアで売り払われた。

<sup>71</sup> アッシリア商人の儲けは、当時の貨幣の役割を果たした銀ではなく、錫での支払いを行ったというところにあるのではないと思われる。錫を安く多量に手に入れさえすれば、すべてがそれで賄われ、儲けも大きいということになる。更にその儲けには、織物を売った儲けと運搬に使ったロバを売った儲けが加えられる。

<sup>72</sup> 発掘調査では、表に押印、裏にはロープの圧痕が残る「封泥」として発見されることが多い。多くの封泥がカールム・カニシュ区域の発掘でも出土している(Veenhof and Eidem 2008: 55)。

<sup>73</sup> 押捺は円筒印章によって行われた。

<sup>74</sup> 毛織物の種類については、Veenhof 1972:145ff.を参照。

<sup>75</sup> キュルテペ文書中には、「アッカドの織物」としてでてくる「アッカド」とは、前3千年紀後半に南メソポタミアの覇権を握った「アッカド王朝」のことではない。当時は、南メソポタミアの北部をアッカドといい、南部をシュメールと呼んだが、当然その地理的概念とそれらの名称は前2000年を過ぎても受け継がれていた。従って「アッカドの織物」とは、南メソポタミア産の織物のことである。メソポタミアの

(Veenhof 1972: 98)<sup>76</sup>。中でも有名な、アッシュールの家長からカニシュの在住の一員に宛てた文書(VAT 9294)には、アッシュールにおける「アッカドの織物」の在庫の欠損について書かれていた(Leemans 1960: 98-99; or see Larsen 2015: 109)。とはいえ、アッシュールで生産した織物の方が、バビロニア産の織物よりも輸出量はかなり多かったようである(Larsen 1976: 89)。バビロニア産の織物は、アッシュールのものに比べて、高品質であったとみられている(Dercksen 2004:14)。

その他には、アッシュールからカニシュへ錫や織物と共に時折運ばれたものとして、カーネリアン(紅玉随)などの貴石や、オイル、スパイス、香料、くぎ、ピンなどがあつた。キュルテペ文書には、非常に高価な贅沢品として、ラピス・ラズリ(husarum)や隕鉄(amutum/ ašium)のことが記載されているが<sup>77</sup>、両方とも、宮殿の管理下にある独占品であり、アッシュールでは商館を通し、カニシュでは宮殿を通して申告することで購入できる非常に高価な交易品でもあつた(Larsen 1976: 198; Dercksen 2004: 18-23; Veenhof and Eidem 2008: 84-85)。錫とともにアッシュールに輸入されたラピス・ラズリは、おそらく錫と織物とともにカニシュへ運ばれたであろうと想像できるが、実際にどのようにカニシュに運ばれたのかはわかっていない。また、隕鉄はアッシュールとカニシュの宮殿の両方が求めていたものであつたが、キュルテペ文書の中には、隕鉄がアッシュールからカニシュへ送られたという記載と隕鉄をアナトリアで購入したという記載の両方がみられるだけで(Larsen 1976: 200)、これらの交易の実態はまだ不明瞭である。

---

歴史や考古学では、前 1 千年紀にギリシア人が使った言葉を用いて、地名等を表現する習わしがあり、また「アッカド王朝」と区別するために、「バビロニア」(前 1 千年紀にギリシア人がその地方の首都バビロンに注目したことからはじまる地名)という言葉を使用し、「バビロニア」の織物というのである。因みに、「バビロニア」とはシュメールの地とアッカドの地を合わせた南メソポタミアを指すギリシア語である。「メソポタミア」、「アッシリア」、「アナトリア」もギリシア語の地名である。

<sup>76</sup> キュルテペ文書には、アッシュールの東方にあるガスル(Gasur)からも織物が輸入されたという記述もある(Veenhof 1972:189-190)。ガスルは、後にヌジ(Nizi)と呼ばれる都市である。

<sup>77</sup> ラピス・ラズリの価格はアッシュールでは銀の価値の半分以上であつたが、カニシュではおそらく宮殿の高官が欲した物品であり、銀の価値の 2・3 倍はしたという(Veenhof and Eidem 2008:84)。また、隕鉄は、カニシュでの購入例では、隕鉄 1 シェケルに対して、質の良くないものでも銀 40 シェケル、質がよいものでは 95 シェケルした(Veenhof and Eidem 2008:84)。因みに、鉄は後世、アッカド語で Parzillu(m)と呼ばれることになる。



では、青銅製品はどうであったかという、青銅製品が交易品の1つであったという記録はない(Veenhof and Eidem 2008: 86)。アナトリアの内部においても、アッシリア商人は青銅製品の取引には関与していなかった(Veenhof and Eidem 2008: 86)。しかし、カールム・カニシュ地区において、裕福な商人の家では青銅の容器<sup>78</sup>が家庭用品として使われていたという記録が残っている(Derksen 1996: 76ff.)。また、この地区での発掘調査においても同様に確認されている(Özgüç 1986: Pls. 126-127 and pp. 73-74)。つまり青銅製品は、アッシュールの商人にとっては交易品ではなく日用的に使用されていたのである。

### 3.2 錫の供給源と運搬

#### 3.2.1. 錫の供給源

前述した通り、青銅製品が交易品の主要品目に含まれないことがわかったが、青銅製品を鑄造するための、銅と錫はどこから入手できたのだろうか。

アナトリアで錫の産出地が発見される以前は、アッシュールの商人がどこからか錫をもってきてアナトリアで売っていたことは、周知の事実であった。唯一の問題は、そこで売買されていた錫がどこからもたらされたものであったのかという点である。なぜなら、錫の産地を特定するさまざまな憶測が飛び交う中で、西アジアで錫の鉱床の存在を裏付けるような証拠を示す場所が皆無であった。この問題の解決の糸口となったのは、ソビエトの地質学者の調査を基盤にした、ステッチとピゴットによるアフガニスタンにおける錫の鉱床の存在の報告である(Stech and Pigott 1986)。その報告によれば、アフガニスタンには、酸化スズの鉱物である「錫石(cassiterite)」の鉱床があり、更に錫の「漂砂鉱床」も広範囲にわたって存在することが明らかとなった(Stech and Pigott 1986: 44-45)<sup>79</sup>。この研究結果から、多くの研究者は、アッ

---

<sup>78</sup> 通常の生活では「土器」が使われる。

<sup>79</sup> 現在のタジキスタンやウズベキスタンでも、錫の鉱山が見つかっており、そこでの採掘は前2千年紀前半に年代づけられることが可能であるという(Derksen 2004: 17 with n.37, citing Weisgerber and Cierny 2002: 179-186)。この点に着目するデルクセンとパイラモビッチは、採掘年代が特定できないアフガニスタンの錫の鉱床の存在を無視して、タジキスタンやウズベキスタンの錫がアッシュールにもたらされたものであると推定する(Derksen 2004: 17 and 26; Barjamovic 2011: 9)。タジキスタン、ウ

シュールではアフガニスタンからもたらされた錫(鉱石ではなく、おそらく鑄塊)をアナトリアへ再輸出したのであると考えられるようになった。しかしその後の調査で、アナトリアで錫の鉱床や鉱山が発見され(Kontani *et al.* 2014: 95-106)、アッシリア・コロニー時代の錫の供給源はどこであったのか、という問題が再燃している。

アナトリアで発見された錫の鉱床や鉱山は、関連施設も含め、発見された年代順に並べると次のようなものが挙げられる。

- (1) キリキア地方北西部のタウルス山脈中の山ボルカルダーでの錫の鉱床が発見された(Yener and Özbal 1987; Yener 2000)。実際には、黄錫鉱(stannite)の発見(Yener 2000: 71)であったが、重要なことは、ボルカルダーの北 40km のニーデ地区で酸化スズ(cassiterite)からなる漂砂鉱床の存在が確認(Yener 2000: 71)されたことである。
- (2) 同じくタウルス山脈中のカステルでの錫の採掘場(鉱山)と、その近くのギョルテペでの錫溶融作業場が発見された(Yener 2000)。カステルの鉱床は、酸化スズである錫石(cassiterite)からなるものであった(Yenel 2000: 88)。
- (3) カイセリ平野、エルジエス火山の麓のキュルテペ近くのヒサルジュク(Hisarcık)での錫を含む鉱床が発見された(Yenel *et al.* 2015)。

### 3.2.2. 錫の採掘時期

上述の通りアナトリアでの錫の鉱床や鉱山の発見から、錫の供給源があるにもかかわらず、なぜアナトリアの人々はアッシュール商人より錫を購入したのでだろうか、という疑問が生まれる。この問題を解き明かすためには、その前提として、錫の採掘時期を知る必要がある。しかし、既知の鉱山での銅の採掘時期がわからないように、それらの場所での錫の採掘時期もほとんど特定することができない。例えば、上記ケステルの錫の採掘場の年代も、不

---

ズベキスタンとも、アフガニスタンの北東に隣接する国であるゆえに、錫の鉱床があったとしても不思議ではない。また最近の研究では、イラン北西部のデイ・ホセ(Deh Hosein)の近郊の墓地から青銅が見つかった(Wilkinson 2014: 164)。これは、鉛同位体分析や微量元素分析の結果からも青銅であると確認されている。ただし分析結果によると前 3 千年紀のものであるとされており、そこから確実に前 2 千年紀まで採掘がおこなわれていたという確証はない。

十分な考古学的証拠から前 3 千年紀であるという意見や(Willies 1993: 263)、前 2 千年紀であるという意見があり(Muhly 1993: 239ff.)、未だ不明確である。現時点では、錫の採掘年代というよりも、アナトリアにも錫の鉱床や鉱山があるという事実を踏まえるしかない。

この問題に対して、ポストゲート(Postgate 1992: 214)は、タウルス山脈の当該場所で当時、錫の採掘が行われていたとしても、アッシリア人が知っていた錫の供給源の方が安価な錫のより安定した産出をなす場所であったのだろうと考えるしかないと指摘する。この意見は、アナトリアの錫の産地が銅の産地に比べ限定されていることから妥当であると考えられる。ここで考慮すべきことは、アフガニスタンの鉱床は平均 5~6%の錫を含む(Stech and Pigott 1986: 44)一方で、タウルス山脈のケステルの鉱床は、1.5%の錫しか含まれていない点である(Yener 2000: 88)。また、アフガニスタンでは錫の漂砂鉱床が広範囲に広がっており、錫を採集しやすいということである(同上)<sup>80</sup>。

これらのことから、アッシリア商人が取り扱った錫の供給源をアフガニスタンに求めるのが、現時点では、一番可能性が高い<sup>81</sup>。また、アッシリア商人がアッシュールから錫を運んできたということは、キュルテペ文書によって証左されている。つまりアナトリアの人々にとって、現地の錫鉱床を採掘

---

<sup>80</sup> 問題なのは、アフガニスタンから錫が運びこまれたと想定した場合、どの交易路でアッシュールへ錫が持ち込まれたかである。文献学から考えると、川崎(2000: 23)によると、エシュムナに錫の集積地があり、アッシュールの人々はそこから錫を入手したと考えている。そこで問題になるのが、伝統的な交易都市マリの存在である。そこでも交易品として錫を取り扱っていた。いうまでもなく、アッシュールはマリに対抗する交易都市である。一方で、小口(Oguchi 1999: n.84 on 101)は、「ハブール土器」と呼ばれる彩文土器の主要分布圏外での出土に着目し、ウルミア湖も南岸地域を通過する「錫の道」があったと考えている。「ハブール土器」の出土は、アッシュールの人々が東方からの錫の入手にも関与していたことを裏付ける証拠にもなる。また、シャムシ・アダド I 世の王国時代、大ザブ川の上流域(ドカーン・ダム地域)にある町 Šušarra(遺跡名 Tell Shemshara)<sup>80</sup>には、錫の倉庫があったことが出土した文書(古バビロニア語で書かれたもの)によって明らかになっている。ただ、問題なのは、「ハブール土器」にせよ、シャムシャラ文書にせよ、シャムシ・アダド I 世の時代に年代づけられるものであることから、カールム・カニシュ第 Ib 層の時期の証拠とはなるが、カールム・カニシュ第 II 層の時期の証拠にはならない(Oguchi 1999: 101)。因みに、カールム・カニシュ第 Ib 層の墓から「ハブール」土器が出土しているが、第 II 層からの出土はない。このことから、カールム・カニシュ第 II 層の時期(北メソポタミアで「ハブール土器」が出現し流行し始める時期)の交易路を論じるには証拠的に不十分であるとされる(同上)。

<sup>81</sup> アフガニスタン北東部のバダフシャーンが、西アジアで唯一のラピス・ラズリの産地である(see Herrmann 1968)。贅沢品としてのラピス・ラズリも、アッシュールの対アナトリア交易の交易品の 1 つである。

し錫を入手するよりも、アッシリア商人から錫を購入する方が理に適っていたようである。例え、錫鉱床が採掘されていたとしても、銅と違って、需要を満たすだけの供給量の産出ができなかった可能性が大きく、その場合アナトリアで産出された錫は、アッシリア商人がもたらす錫よりも高価なものになったに違いない。

### 3.2.3. 錫の交易路(図 2.2 参照)

錫の供給源の問題に関連して、錫がどの経路でアッシュールにもたらされたのかについて論じる<sup>82</sup>。まずは、アッシュールの東方から錫がもたらされたという前提から、以下の3つの説がある。

- (1) ザグロス山脈のスーサ経由でバビロニア(南メソポタミア)に入った錫がアッシュールにもたらされたという見解(e.g. Barjamovic 2011: 9 ; Dercksen 2004: 27-30)。これは、キュルテペ文書の中の一文書に、「下の国」の隊商から錫と織物を購入する、という記述があるからである(その文書については、川崎 2000: 22 を参照; see also Dercksen 2004: 29)。「下の国」は一般的にバビロニアであると考えられている。また、こう考える研究者の多くは、他の国の商人がアッシュールへ錫を運んできたとみなしている。
- (2) バグダードの東北、ディヤラ川流域にあったエシュヌンナ王国に、スーサ経由で、あるいは後世の所謂「ホーラーサン街道」のザグロス山脈を越えて、錫がもたらされたという見解(川崎 2000: 23-25; cf. Dercksen 2004: 27-30, *inter alia* 27)。これは、エシュヌンナ王国は錫の「市場」であり、バビロニアやマリのみならずアッシュールでさえも、そこで錫を購入していたとみる説である(川崎 2000: 25)。この説では、地理的にアッシュールより下に位置したエシュヌンナを「下の国」とみなしている(川崎 2000: 23; cf. Dercksen 2004: 29)。
- (3) ウルミア湖南西のガダル川流域のウシュヌ・ソルドゥズ地方経由で、アフ

---

<sup>82</sup> 大方の楔形文書の研究者(e.g. Veenhof 1995: 863; Barjamovic 2011: 9)は、錫をアッシュールへもってきたのは、アッシリア商人ではなく、他の国の商人であったという見方をしている。

ガニスタンからアッシュールへ錫がもたらされたという見解(Oguchi 1998: 122; Oguchi 2000: 91, 93-94)。これは、ウシュヌ・ソルドゥズ地方のディンカ・テペやハサナルなどの遺跡から、当時アッシュールから以北の北イラクから北東シリアのハブール盆地にかけての地域(主要分布地域)で盛行した彩文土器、所謂「ハブール土器」が、主要分布地域とは異なる土器のアセンブリッジの中で比較的多く出土しており<sup>83</sup>、それはウシュヌ・ソルドゥズ地方がアッシュールを含むその土器の主要分布地域と強い関係で結ばれていたことを示すものであるという考古学的な証拠から考えた見解である。つまり、カールムやワバルトゥムがあったかはわからないが、アッシュールあるいはその主要分布地域から来た人々がウシュヌ・ソルドゥズ地方に住んで錫交易に関与していた可能性があるということである。ウシュヌ・ソルドゥズ地方から東方に向かっては、現在のテヘラン経由でアフガニスタンに至るルートをとることができ、ウシュヌ・ソルドゥズ地方からアッシュールへ向かうザグロス山脈中のルートは複数ある。因みに、現在のイラク・クルディスタンの大ザブ川の最上流域にあるドカーン・ダム建設による水没地域の中、古代のシュシャラーとして知られる町の遺跡テル・シェムシャラから出土した楔形文書は、シュシャラーがシャムシ・アダド I 世の王国へ錫を供給する場所であったことを示している(e.g. see Laessle 1959)。その地は、ザグロス山脈中のルートによってウシュヌ・ソルドゥズ地方と結ばれ、ザグロス山脈の北メソポタミアへの開口部にあたる。これらの事実は、錫の搬入経路を裏付ける証拠とみなすことができるかもしれない。しかし以上の証拠はカールム・カニシュ第 II 層の時期ではなく、カールム・カニシュ第 Ib 層の時期に相当し、その時期のシャムシ・アダド I 世はエシュヌンナと敵対しており、カールム・カニシュ第 Ib 層の時期に錫の東方からの搬入路が変わった可能性も否めない。

---

<sup>83</sup> 比較的大量出土するということは、ウシュヌ・ソルドゥズ地方で出土したハブール土器は、単なる搬入品ではなく、そこで製作された物であることを示しているが、そのような見方がこの説の根底にはある。

以上の三説から、東方からアッシュールに至る「錫の道」は、1つの構図を描くことができる。カールム・カニシュ第II層の時期には、アッシュールは錫をエシュヌナ方面から入手していたが、シャムシ・アダドI世がアッシュールの王位を篡奪する前のエカラトゥムにいた頃から、あるいは、シャムシ・アダドI世がアッシュールを支配下に治めた頃から(つまりカールム・カニシュ第Ib層の時期、もしくはその直前頃)、ウルミア湖の南東を經由する独自の錫の搬入ルートが開拓されたというものである。もしもこのルートがカールム・カニシュ第II層の時期に、錫をアッシュールに持ち込むために既に使われていたとするならば、当時のアッシュールの錫交易による利益は更に増大したことであろう。

### 3.3 銅の供給源と運搬

#### 3.3.1. 銅の供給源

次に、青銅(siparrum)をつくるための主体をなす銅(werium/ urudum)についてふれる。キュルテペ文書では、銅についての記載は豊富であり、質によって、さまざまな言葉で銅が表現された(see Dercksen 1996: 33ff.)。しかし、キュルテペ文書には、アッシュールとアナトリアとの間の銅の交易についての記載は全くないが、アナトリアの商人がアナトリア内部での交易<sup>84</sup>に係わる物品であったことは明らかである(Larsen 1976: 91; Barjamovic 2011: 14)。それはアッシリア商人も積極的に関与していた。アッシリア商人が銅をアッシュールへ運ばず、アナトリア内部だけで銅の取引に従事した理由は、価格と運送にかかる費用の問題があったと考えられる(Veenhof and Eidem 2008: 86)<sup>85</sup>。

では、アナトリアでの銅の供給源はどこであったのだろうか。アナトリア

---

<sup>84</sup> アナトリア内部の交易でアッシリア商人が関与したものは、銅以外に羊毛であった(Dercksen 2004:183ff.; Veenhof and Eidem 2008: 87; Larsen 2015:195)。それ以外にも、穀物、油、蘘、皮革、蜂蜜などがあったが(Orlin 1970: 58)、大麦や小麦などの穀物は、儲けだけを目的にする品というよりも、基本的には生活必需品であり(cf. Veenhof and Eidem 2008: 87-88)、他のものも生活に関係するものである。

<sup>85</sup> 青銅をつくるには、錫よりも多量の銅を必要とするため、多量に銅を運搬しなければならない。多量に銅を運搬するには、ロバではなく荷車が必要であるが、それでは長距離の輸送は困難である(Veenhof and Eidem 2008:86)。

は西アジアの中でも銅を豊富に産出する地域であるが、現在までに知られる主な銅の鉱床や鉱山は以下の通りである (Wilkinson 2014: Table D.3. on 401)。

(1) 北アナトリア (黒海南岸・東岸、ポントス山脈)

- ① 黒海南岸のキュレ (Küre) 地域
- ② 黒海南岸のヤプラクル (Yapraklı) 地域
- ③ 黒海東岸のギレスン・トラブゾン (Giresun-Trabzon) 地域
- ④ 黒海東岸のムルグル・クバルサン (Murgul-Kuvarshan) 地域
- ⑤ ポントス山脈地域

(2) 東アナトリア (マラティヤ・ディヤルバクル地域)

- ⑥ ティグリス川の源流付近にあるエルガニ・マデン地区の埋蔵量が豊かな鉱床を有する銅鉱山。

(3) 西アナトリア (西アナトリア高原)

- ⑦ ブルサ地域。

以上の銅の鉱床、あるいは鉱山で、アッシリア・コロニー時代に銅の採掘が行われていたかどうかは、採掘時期の年代を推定することが困難なため<sup>86</sup> 不明であるが、その数の多さは西アジアの他の地域に銅を供給する地域であったという裏付けになる。

### 3.3.2. 銅の運搬

銅の供給源ということに関連して生じるのが、アッシュールの人々がアナトリア内部での銅の取引に関与していたにもかかわらず、その取引でも銀や金を手に入れるだけで、入手した銅をアッシュールへ運ぼうとしなかったのかという問題である。なぜならキュルテペ文書には、アッシュールへの銅の発

---

<sup>86</sup> デルクセンが指摘するように、実際には銅の鉱山では銅鉱石が取り尽くされないかぎり、後世も引き続き採掘が行われた。しかし、採掘時期の年代推定を可能にするような考古学的証拠があったとしても、新しい採掘が行われるたびにそれらが消されてしまい、古い時代の採掘時期がいつなのか全くわからないというのが現状である (Dercksen 1996: 5-6)。従って、アッシリア・コロニー時代に採掘されていた銅鉱山を特定するのは、現実的に不可能といわざるを得ない (Dercksen 1996: 6)。

送についての記述が全くみられない。しかし当然、青銅はアッシュールでも必要とされたはずであり、銅も同様だろう。この問題に対して、ラルセン (Larsen 1976: 92)は、アナトリア有数の銅鉱山があるエルガニ・マデン地区から、アッシュールの人々が直接、銅を入手したのであると考えた。一方、キュルテペ文書の中でも銅に関する記載を研究したデルクセン (Dercksen 1996: 182)は、エルガニ・マデン地区からの銅の直接入手を否定しないまでも、アッシュールでは、アナトリア以外のどこか他の場所から銅を輸入していたと考えている。更にデルクセンやフェンホフ (Dercksen 1996: 181; Veenhof and Eidem 2008: 8)は、銅の運送費用がかかりすぎて、アッシュールへ銅を運んでも採算がとれない為、アッシリア商人は銅をアッシュールへ持ち帰らなかったと指摘している。ここで、銅の運搬に関する要点をまとめておく。

- (1) 少量でも高く売ることができる錫とは異なり、銅は青銅の主体をなす物質であるので、錫よりも多量に運ぶことが求められる。多量に運ぶためには、荷車を必要とする。荷車を使うと、カニシュとアッシュール間の長距離の輸送は困難になる。
- (2) 銅の運搬には錫の運搬よりも日数がかかり、運搬費用も錫の運搬に比べかなりかかることになる。
- (3) 錫よりも銅はかなり安く、そのような運搬費用を考えただけでも、アッシュールへ運ぶのには採算がとれない。とすれば、アッシリア商人にとっては、アナトリアの中だけで銅の取引を行い、銀や金を手に入れたほうがよいことになる。従って、銅は安いものであったので、アッシリア商人は儲けた銀や金を使い、銅を購入していたと考える方が適当である。
- (4) 距離的にみて、アッシリアに搬入される銅は、アナトリアのエルガニ・マデン地区から持ち込まれたと考えるのが妥当かもしれない<sup>87</sup>。

---

<sup>87</sup> ただしここで、1つ問題が生じる。デルクセン (Dercksen 1996: 16)がそれまでに解読した文書の中には、アナトリア内部での銅の取引の証拠として、エルガニ方面の銅に関する都市や町の記述が皆無であった。更にデルクセンは、アナトリア内部の銅の取引に関するものとして文書の中で頻繁に言及される都市や町はカニシュの西方地域に限られ、エルガニを含むカニシュの東方地域に関係するような記載が全くな



(5)エルガニ・マデン地区の銅鉱山はティグリス川の源流付近にあるので、その運搬にはティグリス川沿いのルートをとったであろうと考えられるが、ユーフラテス川<sup>88</sup>に比べ急流であるため川の流れを利用した物の運搬には適さないことも考慮する必要がある。

以上をまとめると、キュルテペ文書からもポントス山脈の南裾にある銅山の採掘とそこから採掘した銅のアナトリア内部の交易のことが読み取れる。そして、Larsen (1976: 92)が、キュルテペ文書にはアッシュールが銅の交易を行っていたという記述はないが、エルガニ・マデン地区から直接アッシュールへ銅をもってきていた可能性があるのではないか、ということを示唆している。このことから、キュルテペ文書にみられるアナトリア内部の銅の交易は、専らカニシュに関係するものであり、キュルテペ文書に言及されていないエルガニ・マデン地区は、カニシュに関係しないものであった可能性が指摘できる。つまり、銅交易について言えば、ポントス山脈とカニシュ間、エルガニ・マデンとアッシュール間での交易が主流であったと考えられる。

---

いと報告している(Dercksen 1996: 16)。しかしデルクセン自身も、そのようなことはあり得ないとしており、当時盛んであったカニシュの西方地域の銅の交易には、運搬費用などの点から、エルガニ・マデン地区の銅鉱山が係わりをもたなかったであろうと推定している(Dercksen 1996: 16)。

<sup>88</sup> ユーフラテス川が物の運搬に利用されたことはマリ文書からよく知られる事実である。



図 3.1 銅 交 易

以上のように要点を列記する中で、アッシリアの商人が銅をアッシュールへもたらさなかった理由として、アッシリアへもたらされた銅は、アナトリア内で使用される銅と供給源が異なるため、アッシリア商人が直接関与しなかったのではないかと推察した。新たな証拠が待たれるところである。

### 3.4 古代の度量衡

当時の売買においては物の重さということが欠かせない要素であり、当時のものの価値は銀の重さに換算されることが多かった。従って、ここで当時の度量衡の中でも、特に「重さ」の問題について言及しておきたい。

当時の度量衡の重さの単位は、大きな単位からタレント(talent(biltu))、ミナ(mina(minu))、シェケル(shekel(šiqu))があり、また極小単位としてシェ(she(še/uttatu))があった。1 talent = 60 mina、1 mina = 60 shekel、1 shekel = 180 she で、六十進法<sup>89</sup>が用いられている。1 シェは大麦一粒をさし、1 シェケルは 180 粒の大麦の重さに相当した。

また当時は重さを量るとき、基本的には天秤を用いていたが、分銅として使われた重りがメソポタミアや、その周辺地域の遺跡から出土している。重

<sup>89</sup> 60 進法といっても、実際には 10 進法を組み込んだ 60 進法であった。

りには、時にはバサルト(玄武岩)や他の種類の石で、例えばアヒルの形状に作られた 60kg(2 タレント)ほどの重さのものもあった。実用的な重りは小さく、黒色で光沢を帯びたヘマタイト(赤鉄鉱)製のものが多かった。ヘマタイト製の重りの形状は大抵、細長い樽形を呈し、一般的な大きさは小指大くらいか、それよりやや小さいぐらいで、大きさのわりにはかなり重い。特に小さなものには、アヒルやカエルの形状のものもある。

カールム・カニシュ区域からも、ヘマタイト製の重りが出土しており(Özgüç 1986: 79)、デルクセン(Dercksen 1996: 251-252)がそこから出土した重りを表にまとめている。それには計 87 点の重りのデータが記載されており、カールム区域の第 Ib 層や第 II 層出土のもの以外に、第 Ia 層出土のもの 8 点、表面採集遺物のもの 2 点、キュルテペからの購入品 1 点も含まれている。第 Ib 層出土の重りは 31 点あり、その中でヘマタイト製は 30 点、第 II 層出土のものは 25 点あり、22 点がヘマタイト製(2 点がアヒル形)であった。残りは出土場所が不明である。

重さの単位の研究では、パウエル(Powell 1971)が重りに関する度量衡の研究(metrology)を行っており、1 シェケルは約 8.33g であったと考えられている。一番小さい単位である 1 シェは、大麦 1 粒に換算され、その重さは、1 シェ分=0.04627777777778g という数値であった(Monroe 2007: 175)。そして次に重い単位である 1 シェケルは、約 8.3 g ( $\approx 8.257368g$ )で、その上が、1 ミナ=499.8g、1 タレント=29980 g と続く(Dercksen 1996: 251; Kool 2012: 43)。1 タレントは約 30kg(1 シェケル 8.33g で計算すると 29.980kg)となり、1 人の人間が運ぶことのできる量だと考えられていた(Monroe 2007: 175)。以下、本稿では、デルクセンと同じように(Dercksen 1996: 81, 251)、1 シェケルを約 8.3 g として関連諸項目の説明を行う。

上述した通り、パウエルによると、1 シェケル=8.33g と考えられているものの、ヘマタイト製の重りは、実際のグラム重での数値はさまざまで、8.33 という数値にぴたりと一致するものは少ない。キュルテペの場合、デルクセンは、1 シェケル=約 8.3g を基準にして、7.8g~9g のなかのいずれかの数値を示すもの 19 点を 1 シェケルの重りであるとみなしている(Dercksen 1996: 251-252)。その中で 8.3 g に近いもの(8.1g~8.5 g)は 10 点あった。この時代の

北メソポタミアの資料を考察したザッカニーニも、1 シェケルに対応する重りの実グラム数は最も低い値で約 8.1g、最も高い値で約 8.48g であると指摘している(Zaccagnini 2001: 1203-1209)。このような重りの実グラム数のバラツキは、当時、正確な重りをつくることができなかったことを意味している。

しかし一方で、実際に出土した重りのグラム重のバラツキを重視する研究者もいる(e.g. Kool 2012)。実グラム数のバラツキは、当時、正確な重りを作ることができなかったわけではなく、かなりの精度をもって重りを作ることができたと考え、バラツキには何かしらの意味があるとみている(Kool 2012: 44)。クール(Kool 2012: e.g. see Fig.18)は、カールム・カニシュ区域出土の重りの実グラム数のバラツキは、異なった地域の重りの基準が採用された結果であると考え、主に青銅器時代のアナトリアや北シリア、北イラク、南イラク、東イランなどの遺跡出土の重りの実グラム数を調査して、同じグラム数を示す重りがあった場合には、それらの遺跡間での交易上の関係を示すものとみている。その時、約 8.4 g のヘマタイト製の重りを、アッシュール(アッシリア)の度量衡に則った 1 シェケルの重りであるとみなしている(Kool 2012: No.13 on 43, cf. 33-34 and Fig.9 on 87)。更に、調査対象としたカールム・カニシュ区域出土の 75 点中の約 43%がアッシリアの基準に則った重りで、その他は、アッシリア以外の地域の基準のもので、カールム・カニシュとそれらの地域との間に交易があったことを裏付ける証拠であるとする(Kool 2012: 55-56, 67)。クールの見解は興味深いが、1 シェケル=約 8.3/8.33g(近似値約 8.4g)というメソポタミアの度量衡の数値をアッシリアの基準とし、バビロニアのものと区別するなど、方法論的な面での妥当性の問題が残る。

またメソポタミア以外の地域、例えば、エブラを中心とする地域、アララフを中心とする地域、ウガリトを中心とする地域、更には、ヒッタイト帝国の領域では、メソポタミアとは異なった度量衡法が使われていたことが明らかになってきている(Bienkowski and Millard (eds.) 2000: 318)。因みに、古代度量衡の研究では、ヒッタイト帝国時代の 1 シェケルに相当する重りは 11.4g あり(Ascalone and Peyronel 2006: 50-56)、時には 11.75g もあったという(Zaccagnini 2001: 1203-1209)。そして 1 ミナの単位も変化しており、ヒッ

タイト古王国時代には 1 ミナ=50 シェケル、ヒッタイト帝国時代には 1 ミナ=40 シェケルという度量衡法が用いられていた(Monroe 2007: 175)。つまり、度量衡法は、西アジアの中の地域によって異なり、また時代によって異なることもあったのである。

### 3.5 物の価値と価格

#### 3.5.1. 交易品の価格

商品の価格とその価値は、現在と同じように、地域ごとに異なっていたと考えられる。なぜなら、それぞれの土地で必要とされる商品は異なっていたからである<sup>90</sup>。もちろん、需要と供給の関係から珍しいものや、人々から必要とされているにもかかわらず手に入れにくいものは価値が増し、価格も高くなると考えるのが一般的であり、価値と価格にはいうまでもなく相互関係がある。当時のことを例にとれば、ロバの相場は、アッシュールでは、1 頭銀 16~17 シェケルであったが、カニシュでは、1 頭銀 20~30 シェケルであった(Dercksen 2004: 260)。しかも、カニシュでは、ロバの装備品も売られたので、実際には、ロバ 1 頭の価格にその分銀 2~3 シェケル程度が加算されたかたちで売買されていたのである(Dercksen 2004: 260)。単純に考えれば、ロバはアッシリアよりもアナトリアの方がより価値あるものとみなされていたことになる。従って、地域ごとに異なる価格や価値を考慮し取引を行えば、大きな利益をあげることができ、正にアッシュールの対アナトリア交易は当時における取引の実例であったといえる。

アッシリア・コロニー時代は、物での支払いという所謂「物々交換」が盛んに行われていた一方で、貨幣の役割を果たしたものは、銀であった。また、実際に銀を支支払いに使わなくても、物の価値は銀に換算されて表された。銅、錫、金、貴石等が、銀に換算された価値を見ていくと、例えば、アッシュールでは、15 シェケルの重さの錫は、銀 1 シェケルの価値があった(Dercksen 2004: 18)。しかし、アナトリアでは、15 シェケルの重さの錫は最低でも銀 2.5 シェケル<sup>91</sup>で売れ、2 倍以上高く売れたことがわかる。また、アナトリア

<sup>90</sup> ただし、錫や銅、銀や金などは、当時どの場所でも必要とされていた。

<sup>91</sup> キュルテペ文書によると、アッシリア商人が時折アナトリアで用いた銅と錫と銀の

での銅の価格は 60 シェケルの重さの銅に対して銀 1 シェケルが標準相場であり、銀が銅の 60 倍の価値をもち、銅は錫よりも圧倒的に安かった<sup>92</sup>。アナトリアでは、織物は銀 15～30 シェケルの間の価格で売れたが、だいたい錫と同じようにアッシュールの価格の 2.5 倍の値で売れた。

前述したように、1 頭のロバはアナトリアで銀 20～30 シェケルで売れたが、アッシュールでの価格は銀 16～17 シェケル<sup>93</sup>で、アナトリアではアッシュールの約 1.5 倍の値がついたことがわかる。因みに、アッシュールでは、金の価格は 1 シェケルの重さの金に対して銀 8 シェケルであった (Dercksen 2004: 153)。アナトリアには金や銀を産出する鉱山があり、アナトリアにおける金の価格はアッシュールに比べそれほど高くはなく、銀自体の価値もアッシュールよりも低かったはずである (Barjamovic 2011: 13)<sup>94</sup>。また、ラピス・ラズリ(贅沢品)やカーネリアンなどの貴石も、アッシュールからアナトリアへの副次的な輸出品となっていたが、ラピス・ラズリの価格は、アッシュールではラピス・ラズリ 2 シェケル＝銀 1 シェケルで、アナトリアではその価格の 2～3 倍で売ることができた (Dercksen 2004: 19; see also Veenhof and Eidem 2008: 84)。カーネリアンは、アッシュールで計 30 ミナ 50 シェケルの重量(=15kg を超える重さ)で取引されたことがあり、それに対する価格は銀 5 ミナ 6 シェケル、つまりカーネリアン約 6 シェケル＝銀 1 シェケルでの売買であったことがわかる (Dercksen 2004: 25)。当然、アナトリアではそれ以上の価格での売買となったにちがいない。

以上のような価格も、時の経過とともに変動していたようである。このような価格の変動は各地で起こっており、毎年のように物価の高騰が起きていたようである (Dercksen 2004: 259-260)。

### 3.5.2. 青銅製品の生産量

カールム・カニシュ第 II 層から出土した粘土板文書の記録によると、30

---

標準価値比率、銅 60 : 錫 6 : 銀 1 をもとに計算した数値である (Dercksen 2004: 153)。

<sup>92</sup> 銅と錫の標準価値比率は 10 : 1 であった。

<sup>93</sup> Dercksen 2004; 152 を参照。

<sup>94</sup> このことから、アッシュールの商人が代価として銀や金を手に入れた理由が窺える。

年間にアッシリア商人によってアナトリアに輸入された錫の総量は約 60 トンに達し、年間約 2 トンの錫が持ち込まれていたことがわかっている (Barjamovic 2011: 11 with n.52 [-12] and n.[note] 55 on 12)。青銅製品すべてが、強度と硬度が最適な銅 90%、錫 10%の混合比率で製造されていたと仮定した場合、その錫を利用して青銅の鑄造が行われれば、総計 600 トン、年間約 20 トンの青銅製品の製造が可能となる。

ここで、現時点での文書から推定される錫の年平均輸入量からみて、年間約 20 トンの青銅製品の製造が可能となるという仮設にのっとり、当時の青銅の武器である短剣や槍先が年間どのくらい生産できたのかについて考察を試みる。この考察にあたり、武器の重量はアナトリア考古学研究所が発掘調査しているカマン・カレホユック遺跡のカーラム・カニシュ第 Ib 層と同時期の層から出土した短剣、槍先<sup>95</sup> の計測値を参考にする<sup>96</sup>。この層からは、7 点の青銅製短剣が見つかり、その内 5 点は完形品であり、ここでの考察に役立つ。それらの重量は、それぞれ、134.8g、108.4g、42.8g、161.4g、101.2g であり、平均重量は 109.72g(≒13 シェケル)である。また、同じ場所で発見された槍先 4 点も完形品であり、それぞれ 97.8g、154.6g、82.5g、201.6g で、平均重量は 134.125g(≒16 シェケル)であった。想定される年間の青銅製品製造量 20 トンを、これらの短剣と槍先のそれぞれの重量の平均値で割れば、短剣だけを考えると 181,818 本分、または槍先でだけの場合には 149,254 本分の製造が可能となる。

年間どれほど青銅製の短剣や槍先が鑄造されていたのかは実際にはわからないが、膨大な数の青銅製品を産み出す量の錫の取引が行われていたことは確かである。

### 3.5.3. 青銅製品の価格

次に、青銅製品の価格について考えてみるが、青銅製品の売買が行われた

<sup>95</sup> これらの青銅製品は、カマン・カレホユック北区 XII 区、第 IIIc 層の建物の Room148・150 において in situ で発見されたものである。その建物は、印影や土器からカーラム・カニシュ第 Ib 層と同時期であると考えられている (大村 1995: 10)。

<sup>96</sup> ここで提示する、カマン・カレホユック遺跡の青銅製武器の重量の計測は、筆者がその遺跡の発掘調査に参加したとき、調査隊の隊長である大村幸弘博士の許可を得て行ったものである。大村博士のご厚意に対してここに感謝の意を表したい。

記録が見つかっておらず、青銅製品の価格も当然わかっていない。そこで 1 つの試みとして、文書から知られる銅と錫の価格から青銅製品の価格を推測する。

ここでは、実際の取引の記録から得られる値を近似値でまとめたバイラモビッチの表を参考にする (Barjamovic 2011: table 1 on 14)。それによれば、精錬された銅の価格は、銅 1kg が銀 2 シェケル (銀 2 シェケルは  $8.3\text{g} \times 2 = 16.6\text{g}$  なので、その 60 倍は 996g となり、この値はアッシリア商人が時折アナトリアで用いた銅と銀の標準価値比率 60:1 に近い) である。つまり銅 1g は、銀 0.002 シェケルになる。一方、錫の価格は、錫 1kg が銀 28 シェケルで (銀 28 シェケルは  $8.3\text{g} \times 28 = 232.4\text{g}$  なので、その 6 倍は 1394.4g となり、錫 1000g の場合には錫と銀の価値比率は 4.3:1 であり、アッシリア商人が時折アナトリアで用いた錫と銀の標準価値比率 6:1 よりも高額での取引売買であった)、この場合、錫 1g が銀 0.028 シェケルに相当する。それらをもとに、青銅の錫の含有量を 10% (銅:錫=9:1) と仮定すると、下記の式が導き出される。

$$\text{銅(90\%)} X\text{g} \times 0.002 + \text{錫(10\%)} Y\text{g} \times 0.028 = \text{銀 } Z \text{ シェケル}$$

上記の式にカマン・カレホユックから出土した短剣と槍先の重さの平均値 (短剣約 110g、槍先約 134g) を当てはめると、短剣は、 $99\text{g} \times 0.002 + 11\text{g} \times 0.028 = \text{銀 } 0.506 \text{ シェケル} (\approx 91 \text{ シェ})$ 、槍先は、 $120.6\text{g} \times 0.002 + 13.4\text{g} \times 0.028 = \text{銀 } 0.6164 \text{ シェケル} (\approx 111 \text{ シェ})$  の価格であったという想定できる。つまり、短剣よりも槍先の方が高かったことになる。これらの値はあくまで、錫の入った青銅であった場合であり、もし出土した遺物が銅製品であった場合には、短剣は銀 0.22 シェケル ( $\approx 40 \text{ シェ}$ )、槍先は銀 0.268 シェケル ( $\approx 48 \text{ シェ}$ ) になる。つまり、短剣、槍先ともに青銅製品の価格が、銅製品の価格より 2.3 倍高かったことになる。また更に、青銅製品の大きさや種類や手間賃や儲けも価格に反映されていたであろう。



表 3.1 アナトリアでの物品の価格表

Class	Average of price	Conversion	100% copper daggers	10% tin daggers
One kilo of refined copper	c. 2 shekels of silver	c. 16.6g of silver	c. 9 daggers	c. 4 daggers
One kilo of tin	c. 28 shekels of silver	c. 232.4g of silver	c. 127 daggers	c. 56 daggers
One sheep	c. 2 shekels of silver	c. 16.6g of silver	c. 9 daggers	c. 4 daggers
One donkey	c. 20 shekels of silver	c. 166g of silver	c. 91 daggers	c. 40 daggers
One female slave	c. 20 shekels of silver	c. 166g of silver	c. 91 daggers	c. 40 daggers
One common <i>kutānum</i> -textile	c. 12 shekels of silver	c. 99.6g of silver	c. 54.5 daggers	c. 24 daggers
One fine <i>kutānum</i> -textile	c. 20 shekels of silver	c. 166g of silver	c. 91 daggers	c. 40 daggers
One <i>abarnium</i> -textile	c. 25 shekels of silver	c. 132.5g of silver	c. 113.6 daggers	c. 50 daggers
One thin ( <i>raqqutum</i> ) textile	c. 30 shekels of silver	c. 249g of silver	c. 136.3 daggers	c. 60 daggers
One kilo of ordinary wool	c. 1/3 shekels of silver	c. 2.8g of silver	c. 1.5 daggers	c. 0.7 daggers
One hundred loaves of bread	c. 1/3 shekels of silver	c. 2.8g of silver	c. 1.5 daggers	c. 0.7 daggers
The village of Tahišra at Kaneš	c. 300 shekels of silver	c. 2490g of silver	c. 1363.6 daggers	c. 600 daggers

(Barjamovic 2011: Table 1 on 14 を改変)

ここで使ったバイラモビッチの表からは、さまざまなことが読み取れる。錫 1kg の値段は、時には、精錬された良質な銅<sup>97</sup>1kg の 14 倍であったことがわかる。またロバは、羊の 10 倍の価格であり、アナトリアではロバにも高値がついたようである。羊は羊毛を紡いだり、食用にしたりして、メソポタミアだけでなくアナトリアでも一般的なものであったことがよくわかる。アナトリアは銅の産出地域であり、銅が安かったことは、羊 1 頭の価格が精錬された良質な銅 1kg と同じ価格であったことからわかる。そして、ロバ 1 頭と女奴隷 1 人、良質な織物 1 枚は、同じ値段であることが興味深い。更に興味深いのは、銀 300 シェケル(5 ミナ=2490g)で村が売りに出されていることである。錫ならば、この村を買うのに約 10kg 必要なことになる。

このようにキュルテペ文書から当時の人々の生活模様を知ることができる。当時の物の価格を単位(シェケル)で表し、それを銀の重さに換算したのが表 3.1 である。その結果を更に上記の式に当てはめると、純銅と青銅の短剣で換算すると何本に相当するのかを表したのが、上記の表である。この表からも青銅製品は銅製品よりも高価であった、つまり当時価値が高かったということが明らかになった。

<sup>97</sup> 銅にはさまざまな種類があることを、この章の本文の中で前述したが(see Dereckszen 1996: 33ff.)、それらは精錬された良質な銅と、精錬されていない質の悪い銅に大別できた。

## 第4章 青銅製品の型式分類

青銅製品の武器類の比較研究において基礎となるものは、ディシェイエス(Deshayes 1960)やエルカナル(Erkanal 1977)の研究である。また彼らは、研究を進める上での1つの基準となりうる青銅製品の短剣、槍先などの武器類の分類を行なっている。ミュッラー・カルペ(Müller-Karpe 1994)の研究も上述した武器類に焦点を当てているものの、武器の製作に使用された鋳型に注目している点は興味深い。

また対象地域は少し変わるが、北メソポタミア・パレスティナの武器の研究をフィリップ(Philip 1989)が行っており、これも分類基準を決める上で参考となる。更に、中近東全体に地域を広げた武器の研究をガーネス(Gernez 2007)が、中近東の金属製の道具に関する包括的な研究をブラックウェル(Blackwell 2011)が行っている。これらの研究は、幅広い地域から出土した資料を比較検討し、各器種の分布を考える上で非常に役に立つものである。

武器類以外の研究では、ピンに焦点を当てた、クライン(Klein 1992)のものがある。クラインは、ピンを包括的に研究した研究者である。また、ボアズキョイの青銅製品の報告書の中にも、ピン頭の形状によって詳細な分類が報告されている(Boehmer 1972)。

本稿では、対象となる交易路から出土した青銅製品に焦点を当て、出土した遺物について先行研究を参照に型式分類を行なった。その際、より詳細な分類が必要な場合は、筆者独自の分類型式を新たに作成した。なぜなら本稿における青銅製品は主にアナトリアから出土したものであり、そこで出土した遺物を中心とした分類型式が必要であると考えたからである。更に独自の視点として、各タイプを出土場所(建築層)による違いで示すことで、次章で考察する青銅製品の遺跡ごとの特徴についての手がかりとした。また、対象となる交易路の範囲以外からの出土遺物については、類似例を挙げるのみに留める。

### 4.1 短剣

短剣とは、先の尖った短い両刃を持つ武具もしくは利器と定義する。アッ

シリア・コロニー時代を含む前 2 千年紀のアナトリアでは、広く普及していたものであり、個人が所有していたと考えられる。物を切ったり、突き刺したりすることに使用したと考えられる。剣の柄の部分は、木製や革製であり、金属製の鋌によって止まっていた。そのため茎の部分に目釘穴が存在する。また柄の素材から、それらが残存しにくいものであったこともわかっている。本稿では、ディシェイエス(Deshayes 1960)やエルカナル(Erkanal 1977)、フィリップ(Philip 1989)、ガーネス(Gernez 2007)、ブラックウェル(Blackwell 2011)の研究を参照に、短剣を大きく 3 つのタイプに分ける。更にその中でもタイプ 1 は細分化し、1a・1b・1c に分けたため、合計で、5 つのタイプに分類する。

#### 4.1.1. タイプ 1a (図版 2)

このタイプは、平らな両刃、茎の部分に横一列に二箇所以上が目釘穴、そして鋌が 2 つ付属しているものである。横からの刃の断面図は、丸みを帯びた平らか、またはややひし形になるように中央部が盛り上がっている。またいくつかの例として、刃の形状に縦に沿って、1~2 本の稜線が見られるものも存在する。刃の形状は、先端から茎に向かってくぼみが見られる。茎と刃の部分に大きな隔たりはなく連続しており、茎の形状は丸みを帯びている。タイプ 1a の短剣は、中央アナトリアのカマン・カレホユックの火災を伴う破壊層から 3 点の出土が確認されている(Nos. 4, 5 and 7) (図版 2: 1-2)。それらのサイズは、主な長さは、約 133-221mm、横幅約 34mm から 605mm、厚さ約 4mm から 35mm である。この他にも、アリシャル・ホユックの建物跡から 3 点の出土が確認されている(Nos. 410-412)。これらは、長さ約 113-206mm、横幅約 27-42mm である。また、ボアズキョイの下町の建物跡からも破片のものも含めて 3 点の出土が確認されており、それらのサイズは、長さ約 92-109mm、横幅約 27-32mm、厚さ約 2-3.5mm である(Nos. 261, 263 and 264)。また、キュルテペでは、主丘から長さ約 92-108mm、横幅約 26-36mm の短剣の出土が確認されている(Nos. 131-133)。このように、中央アナトリアから出土したタイプ 1a の短剣を比べると、カマン・カレホユックとアリシャル・ホユックから出土したものがボアズキョイやキュルテペから出土したもの

よりも大きいことがわかっている。しかし出土層に違いがあることをここで注意しなければならない。そのため、出土層の観点から言えば、一概には同じ層から出土した同種の短剣とは言えない。本稿の対象となる交易路では、類似のタイプの出土は現在のところ確認されていないが、レバント地方の墓から出土しているのが確認されている (Gernez 2007: III Pls. 590.1, 2 and 12)。またこのタイプは、前 2 千年紀初頭において比較的広い地域で普及していたものであったようである。

#### 4.1.2. タイプ 1b (図版 3)

タイプ 1b は、タイプ 1a と形、大きさともに非常に似通っている。相違点は、茎の部分であり、形状が台形である。この台形部分に、三角形になるような配置で、3 つの目釘穴及び鋌が残存している。中央アナトリアでは、カマン・カレホユックの火災を伴う破壊層で 3 点の出土が確認されている。それらのサイズは、長さ約 176-205mm、横幅約 39-43mm、厚さ約 5-7mm である (Nos. 1, 3 and 6)(図版 3: 1-2)。また、アリシャル・ホユックの建物跡からは長さ約 160-192mm、横幅約 39-40mm、厚さ約 6mm、短剣 3 点の出土が確認されている (Nos. 409, 414 and 418)。ボアズキョイの建物跡からは長さ約 81.2mm、横幅約 24mm、厚さ約 2.2mm の短剣 1 点の出土が確認されている (No. 265)。これは他の遺跡から出土したものに比べると、はるかに小さいことがわかる。そして、キュルテペの墓からは 3 点の出土が確認されており、そのサイズは長さ約 133-220mm、横幅約 42-43mm である (Nos. 123 and 125-126)(図版 3: 3-5)。出土場所の相違に関わらず、このタイプはボアズキョイ出土のものを除いた全ての出土品の形状・大きさが非常に似通っていることがわかる。本稿の対象となる交易路では同様のタイプは確認されていないが、類似のタイプは、キプロスやレバント地方の墓からの出土も確認されている (Gernez 2007: III Pl. 599.3 and Pls. 602.1, 4, 8 and 10)。

#### 4.1.3. タイプ 1c (図版 4)

このタイプは細長い両刃で、刃の断面はひし形である。茎には横一列に 3 つ以上の目釘穴が残存し、一部鋌の残存も認められる。茎と刃の部分は連続

しており、大きな隔たりはみられない。中央アナトリアでは、カマン・カレホックの破壊層で長さ約 206mm、横幅約 56.5mm、厚さ約 8mm の短剣 1 点の出土が確認されている(No. 2)(図版 4: 1)。アリシャル・ホックの建物跡からも長さ約 80mm、横幅約 30mm のものが 1 点出土している(No. 415)。このタイプはボアズキョイからの出土は確認できていないが、キュルテペのカーラムの建物跡、墓、または主丘の宮殿趾からそれぞれ 1 点ずつの出土が確認されている。カーラムの墓から出土したものは、短剣の破片であり、長さ約 80mm、横幅約 27mm が残存している(No. 124)。カーラムの建物跡から出土したものは、長さ約 110mm、横幅約 17mm のものであった(No. 127)。宮殿趾出土の短剣は、長さ約 164mm、横幅約 17mm であった(No. 128)。キュルテペからの出土状況の詳細がわかっており、3 つの建築層からそれぞれ出土していることが確認できる点である。つまり、建築層にかかわらず、このタイプの短剣が使用されていた可能性が指摘できる。本稿の対象となる交易路では同様の遺物の出土は確認されていないが、類似のタイプは、南部レバントやキプロスでも出土が確認されている(Gernez 2007: III Pl. 605.8 and 9)。

#### 4.1.4. タイプ 2 (図版 4-7)

短剣タイプ 2 は、長くて細長い両刃、そして、茎の部分も細長く、二から三個の目釘穴があり、鋌が残存している場合もある。中央アナトリアのアリシャル・ホックの建物跡から出土した短剣は、長さ約 115mm、横幅約 20mm、厚さ約 2.5mm のもの 1 点の出土が確認されている(No. 408)(図版 4: 4)。同様に、ボアズキョイの火災層を伴う建物跡から長さ約 121.5mm、横幅約 28.4mm、厚さ約 3.2mm のもの 1 点の出土が確認されている(No. 262)。また、キュルテペ・カーラムの墓からは 2 点の出土が確認されており、そのサイズは、長さ約 89-240mm、横幅約 26-38mm である(Nos. 122 and 130) (図版 4: 3; 図版 6: 1)。キュルテペの王宮趾からは長さ約 416mm、横幅約 54mm のもの 1 点の出土が確認されている(No. 129)。

上記のことから、キュルテペから出土した遺物は他の中央アナトリアの遺跡から出土したものよりサイズが大きいことがわかる。ここでも、遺物が出土した建築層の相違にもかかわらず、同種の短剣の出土が確認された。また

本稿の対象となる交易路では、北シリアのテル・ビア(Tell Bi'a)の墓から 1 点(図版 5: 4)(Gernez 2007: III Pl. 556.4)、バグーズ(Baghoubz)の墓から 2 点の出土が確認されている(図版 5: 1, 5)(Gernez 2007: III Pl. 560.4)。その他の地域では、メソポタミア地域全般及びエジプトで類似する遺物の出土が確認されている(Gernez 2007: III Pl. 560.3 and 4; Philip 2006: 47 and Figs. 15.1-2 on 48)。

#### 4.1.5. タイプ 3 (図版 6)

このタイプは細長い両刃のみで構成されているものであり、茎部はないため、目釘穴や鋌などは存在しない。柄に刃を挟んでロープなどで括り付け短剣として使用したと思われるこのタイプは、中央アナトリアではアリシャル・ホユックのみ出土している特徴的なタイプである。この遺跡からは 2 点の遺物の出土が確認されており、その中の 1 点は建物跡からの出土であり大きさは長さ約 90-95mm、横幅約 21-26mm、厚さ約 2.5-3mm である(Nos. 413 and 416)(図版 6: 4)。もう 1 点は、短剣の破片(No. 417)であるが、墓から出土したことがわかっており、副葬品の一部であったようである(Schmidt 1932: 182)。本稿の対象となる交易路にある遺跡では、同様のタイプの出土は確認されていない。

#### 4.2 槍先

槍先とは、尖った先端を持つ両刃に細長い茎を持つものである。茎の部分の多くはソケット式になっている。ソケット部分には、木材などを差し込んで、柄として使用したと考えられる。実際に、ソケット部分からは木炭の欠片が見つかることもある(McMahon *et al.* 2009: Pl. 85)。また、茎の持ち手に近い部分には目釘穴が横から貫通するように開けられ、保存状態が良好な場合は鋌が残存する。槍先は、ディシェイエス(Deshayes 1960)やエルカナル(Erkanal 1977)、フィリップ(Philip 1989)、ガーネス(Gernez 2007)、ブラックウェル(Blackwell 2011)の研究を参照に大きく 3 つのタイプにわけ、更にタイプ 1 は細分化し、タイプ 1a とタイプ 1b に分類する。

#### 4.2.1. タイプ 1a (図版 7)

このタイプは、円筒状のソケットを持つ茎部に、目釘穴が横に 1 つあり、そこには鋌が 1 つ残存している。刃の形状は平たい両刃で先端は丸みを帯びている。刃の断面はややひし形の形状をしている。このタイプは、鋳型を使って鋳造されたのち、ハンマーで叩いて成型されたようである。中央アナトリアでは、カマン・カレホユックの火災を伴う破壊層で 1 点の出土が確認されており、その大きさは長さ約 243mm、横幅約 27mm、厚さ約 5-18mm である (No. 11)。またアリシャル・ホユックの建物跡からも 1 点の出土が確認されており、その大きさは長さ約 200mm、横幅約 16mm、厚さ約 2.5mm である (No. 420)。このタイプは、ボアズキョイでは現在まで確認されていないにも関わらず、キュルテペ・カールムの墓からは 6 点の出土が確認されている。それらのサイズの幅は長さ約 176-291mm、横幅約 18-32mm である (Nos. 139-142 and 144-145)(図版 7: 2-4)。中央アナトリアから出土した全ての出土例は、形状も大きさも似通っているといえる。そして分類の結果、前 2 千年紀初頭の中央アナトリアから出土した槍先のほとんどはソケット式の特徴をもっている。本稿の対象となる交易路では、北シリアのバグーズの墓から 1 点 (Gernez 2007: III Pls. 425.1-2 and 434.7)、マリ (Mari) の神殿から 1 点の出土が確認されている (Gernez 2007: III Pl. 431.3)。

類似するタイプはその他の地域でも出土が確認されている。このタイプは広範囲で確認されており、アラビア半島の南東部、エジプト、レバント地方でも出土が確認されている (Gernez 2007: III Pls. 431.2-3; Pl. 417.1; Pls. 433.2-3; Pl. 434.6; Philip 2006: 59-60 and Fig. 23 on 60)。

#### 4.2.2. タイプ 1b (図版 7)

このタイプは、タイプ 1a と同様ソケット式のものである。茎部が円筒状であり茎部から継続して円錐状の刃が残存している。刃の断面図は、やや丸みを帯びたひし形をしている。茎の柄に近い部分には、横から目釘穴を一箇所開けており、鋌が残存している場合もある。このタイプも鋳型で鋳造され、その後ハンマーのようなもので叩いて成型されたと思われる。中央アナトリアでは、カマン・カレホユックの火災を伴う破壊層で 3 点の出土が確認され

ている。そのサイズ幅は、長さ約 187-269mm、横幅約 35mm、厚さ約 19.5-22mm である (Nos. 10, 12 and 13)。また、アリシャル・ホユックの建物跡からは長さ約 103mm、横幅約 7mm のもの 1 点の出土が確認されている (No. 421)。そしてボアズキョイの建物跡からは、長さ約 141mm、横幅約 13mm のものが 1 点確認されている (No. 267)。中央アナトリアで多く見られるタイプで、非常に限られた形状であるといえるが、大きさは多少異なっている。特にカマン・カレホユック出土のものは他遺跡から出土したものよりも大きさが大きいことがわかる。本稿の対象となる交易路では、南東アナトリアのハサンジック (Hasancik) から 1 点の出土が確認されている (Gernez 2007: III Pls. 289.1 and 290.5)。また、北シリアのチャガル・バザールの墓から 3 点、建物跡からは 2 点出土している (McMahon *et al.* 2009: Pl. 85)。そのほとんどの出土状況は、壺の中から出土が確認された(同上)。

その他には、北部アナトリア、南東アナトリアでも出土が確認されているが、それらの出土層は明確になっていない (Gernez 2007: III Pls. 289-290)。

#### 4.2.3. タイプ 2 (図版 8)

このタイプは、平らな両刃と刃から連続した茎部は両端が捲れるようになっている。このタイプ 2 は、刃の形状は両刃で平らなことからタイプ 1a に似通っていることがわかる。そして茎部は、タイプ 1 では円筒状になっているが、このタイプ 2 では、円筒に成型される前段階の両側から柄を包み込むような形状になっている。このことから、タイプ 1 のソケット式ができる前の形状をしているものではないかと考えられる。中央アナトリアではカマン・カレホユック主丘の北部 (V 区) の破壊層で 1 点の出土が確認されている。この層もアッシリア・コロニー時代の層と同時期であるとされている。大きさは、長さ約 119mm、横幅約 33mm、厚さ約 4.5mm である (No. 14)。その他に、アリシャル・ホユックの建物跡からは 2 点の出土が確認されており、そのサイズは長さ約 70mm、横幅約 10mm である (Nos. 422-423)。ボアズキョイやキュルテペからの出土は確認されておらず、タイプ 2 の中央アナトリアでの出土傾向は、建物跡からのみの出土であるということである。北メソポタミアからは現在のところ出土が確認されていないタイプである。その他の出



土状況として、類似品がビブロスの堆積層から出土が確認されているが、他のものに比べて大きく、長さ約 440mm、横幅約 80mm である (Gernez 2007: III Pl. 418.1)。例え形状が同じであろうと、使用用途などが違った可能性も指摘できるため、注意する必要がある。

#### 4.2.4. タイプ 3 (図版 8)

細長く葉のような形状をした両刃で、刃の中央部に 2～4 の穴が空いている。茎部は細長く少し傾いている傾向にある。刃に空いている穴の部分にロープなどの紐を通し、柄の部分を持ち付けて使用したと考えられる。中央アナトリアでは、キュルテペ主丘の宮殿趾から 1 点の出土が確認されており、これは有名な「アニタの槍先」と呼ばれるものである。遺構からもこの槍先が出土した場所がアニタ王の宮殿であったとされている (No. 143) (図版 8: 3) (Özgüç 1999: 126, Pls. 107, 1a–c and Fig. E.15)。この遺物の大きさは、長さ約 291mm、横幅約 44mm である。そして、ボアズキョイの火災を伴う火災層から類似遺物が 1 点出土しており、その大きさは長さ約 235.5mm、横幅約 40.5mm、厚さ約 4.5mm である (No. 266)。また、ヤッス・ホユックの主丘建物跡でも同様のタイプの出土が 1 点確認されている (No. 736) (Japanese Institute of Anatolian Archaeology: Yassı Höyük 2012)。

その他に 2～3 点の類似遺物がアジェム・ホユックで確認されているが、これらの遺物は紀元前 2600 年頃～紀元前 2200 年頃に年代づけられる層からの出土であった (Gernez 2007: III Pls. 397.1 and 4)。そのためこのタイプは、紀元前 3 千年紀から継続して使用されているタイプであると考えられる。またこのタイプは、中央アナトリアで特徴的なタイプであり、その他の地域では現在のところ見つかっていない。

#### 4.3 斧

斧の用途は、多岐に及ぶが基本的にはものを切ったり叩いたりする道具として使用されていたと考えられる。しかし、火災層などから出土が確認された場合には、戦いの際に武器として使用されていたとも考えられるなど、状況によって変化する。斧の形状は、片刃で、柄となる木材や骨などを括り付

けて使用されていた。本稿では、ディシェイエス(Deshayes 1960)やエルカナル(Erkanal 1977)、フィリップ(Philip 1989)、ガーネス(Gernez 2007)、ブラックウェル(Blackwell 2011)の研究を参照に、斧を大きく 3 タイプに分類し、更に独自にタイプ 2 に関しては更にタイプ 2a とタイプ 2b に細かく分類する。

#### 4.3.1. タイプ 1 (図版 9)

このタイプは「有窓斧(the fenestrated axe)」と呼ばれるもので、三日月型の片刃の中央に 2 つの穴を持つタイプである(Philip 2006: 33)。茎部は刃の部分と一体化されており、円筒状に穴が空いている。その空洞に木材などの柄となるものを差し込んで使用したと考えられる。片端の茎部に目釘穴が 1 つ、貫通せずに空いており、ここに鋌を差し込んで、刃と柄を繋いだと考えられる。中央アナトリアでは、キュルテペ・カールムの建物跡から 1 点の出土が確認されているが、サイズや出土層位などの情報は不明である(No. 119)。また、同遺跡の王宮趾からは類似品が 4 点出土している。これらのサイズは、長さ約 52-108mm、横幅約 30-125mm、厚さ約 10-22mm である(Nos. 100 and 103-105)(図版 9: 1-4)。その中にはシリア方面からの搬入品であると指摘されているものも残存している(Özgüç 1959: 109ff)。また、アジェム・ホユックの王宮趾からも 1 点の出土が確認されており、その大きさは長さ約 117.5mm、横幅約 57.5mm である(No. 570)。キュルテペやアジェム・ホユックの王宮趾からの出土が多く見られることから、王宮で使用されていたか、もしくは王宮に仕える人によって持ち込まれた可能性が指摘できる。

本稿の対象となる交易路では、ユーフラテス川沿いのマリの墓から 1 点(Gernez 2007: III Pl. 149.2)、バグーズの墓から 2 点の出土が確認されている(図版 9: 5-6)(Gernez 2007: III Pls 149.8, and 150.5-6, 9, 11 and 13)。

その他の地域では、このタイプの斧は、前 2 千年紀のレバント地方、エジプトやユーフラテス川流域の地域など幅広い地域での出土が確認されている(Gernez 2007: III Pl. 134. 5, Pl. 142.5, Pl. 143.4, Pl. 144.7 and Pl. 149.2)。

#### 4.3.2. タイプ 2a (図版 10)

このタイプは、軸穴付きの平斧で、刃の形状が長方形の長辺の真ん中がく

びれている。タイプ 2a の場合、刃の長辺のくびれ部分が片刃になっており、短辺に茎部が付属した形をしている。キュルテペ・カールムの建物跡から 3 点の出土が確認されているが、その大きさは、長さ約 205mm、横幅約 78mm である (Nos. 114 and 116-117) (図版 10: 3)。また同遺跡のカールム区域の墓からは 5 点の出土が確認されている。それらのサイズ幅は、長さ約 103-138mm、横幅約 32-60mm、厚さ約 23mm である (Nos. 101-102, 106, 113 and 115) (図版 10: 1-2)。アジェム・ホユック主丘の建物跡からも 1 点の出土が確認されており、長さ約 168mm、横幅約 54mm である (No. 569) (図版 10: 6)。また、同遺跡の主丘の王宮趾から長さ約 128-134mm、横幅約 58-70mm の遺物 2 点の出土が確認されている (Nos. 567-568) (図版 10: 5)。

本稿の対象となる交易路では、北メソポタミアのアッシュールから 1 点 (図版 10: 4) (Gernez 2007: III Pl. 106.3)、ハラワ (Halawa) から 1 点 (Gernez 2007: III Pls. 105.3-4)、スレイメ (Suleimeh) から 1 点の出土が確認されている (Gernez 2007: III Pls. 105.2 and 106.2)。

その他の地域からは、南アナトリアのタルススの建物跡からの出土や南北メソポタミア地域の墓からの出土も確認されている (Gernez 2007: III Pls. 105.2 and 106.3)。

#### 4.3.3. タイプ 2b (図版 11)

このタイプは、「平斧 (flat axe)」<sup>98</sup>と呼ばれるもので、刃の部分を 2 つ持つものである (Philip 2006: 31-3)。一方は、長辺が薄く湾曲した刃を持ち、もう一方は、薄い長方形のまっすぐな刃である。茎部は 2 つの刃の接合部分になり、この部分に柄となる木材などをロープでくくり付けて使用したと思われる。

中央アナトリアでは、キュルテペ・カールムの墓から長さ約 169mm、横幅約 18.5mm の遺物 1 点の出土が確認されている。また、同遺跡のカールム区域の建物跡からは 6 点の出土が確認されている。それらのサイズ幅は、長さ

---

<sup>98</sup> このタイプは、ブラックウェル (Blackwell 2011: 148) によると「'trunnion' axe」もしくは「'lugged' axe」と呼ばれている。本研究ではより形状の表現に近い「平斧」を採用している。

約 95-155mm、横幅約 24-80mm である (Nos. 108-112 and 118)。ボアズキョイのカーラム建物跡からは、長さ約 194mm、横幅約 72.5-82mm、厚さ約 10mm の遺物 1 点の出土が確認されている (No. 269)。アジェム・ホユックの建物跡からも 1 点の出土が確認されているが、そのサイズについては詳細がわかっていない (No. 571)。またアジェム・ホユックの王宮趾からも 1 点の出土が確認されており、そのサイズは長さ約 203mm、横幅約 69mm である (No. 566)。また西アナトリアのベイセスルタンの建物跡からは 5 点の出土が、そのサイズ幅は、長さ約 110-181mm、横幅約 33.5-48.5mm である。そして、クスラの建物跡でも 1 点の出土が確認されている。トロイの建物跡からも 3 点の出土が確認されている。また南アナトリアでは、テル・アチャナ/アララフの建物跡からも 2 点の出土が確認されている。これらのことから、アナトリア全土で出土が確認されているタイプであると考えられる。本稿の対象となる交易路にある遺跡では、現在のところ出土は見当たらない。

#### 4.3.4. タイプ 3 (図版 11)

このタイプは、薄い三日月型の刃と刃の中央から伸びる細長い茎部で構成されている。茎部は先端が折れ曲がっている。茎部のひっかかりに木材などの柄となるものを取り付けて使用していたと考えられる。

中央アナトリアでは、キュルテペ・カーラムの墓より長さ約 150mm、横幅約 65mm の遺物 1 点の出土が確認されている (No. 107)(図版 11: 4)が、その他の遺跡からの出土は現在のところ確認されていない。本稿の対象となる交易路では同様のタイプの出土は確認されていない。その他の地域では、エジプト (Gernez 2007: III Pls. 130. 5-6) やレバント地方 (Philip 1989: 280-81) での出土が確認されているが、出土層は、前 2200-1800 年頃であり、該当するアッシリア・コロニー時代の層より若干古いものである点に注意する必要がある。

#### 4.4 ハンマー斧 (図版 11)

ハンマー斧とは、中央に茎部となる穴が空き、その左右に細長い三角柱の刃が存在するものである。刃が左右対称に付属している特徴がみられる。農

業などの道具として使用される以外に、時として武器として使用されることもあったと考えられる。

中央アナトリアでは、キュルテペ・カールムの墓から 1 点の出土が見られ、その大きさは長さ約 20mm、横幅約 170mm、厚さ約 20mm である(No. 121)(図版 11: 5)。このタイプは現在のところキュルテペ・カールム以外では出土が確認されていない。本稿の対象となる交易路では、現在のところ出土は確認されていない。その他の地域では、南部レバント地方で数点の出土が確認されているのみである(Gernez 2007: III Pl. 209.2)。

#### 4.5 鏃 (図版 12)

鏃とは、2 つの翼を持つ三角形の形をしたもので、翼の中央から茎部となる細長い棒状のものが伸びている。狩猟をする道具として使用されたようであるが、有事にはもちろん武器としても使用されていたと考えられる。出土した遺物の形状はほとんど似通っているため、本稿では、サブタイプには分けていない。

中央アナトリアでは、キュルテペ・カールムの墓から 1 点の遺物の出土が確認されているが、スケールが不明のため正確な大きさなどは分かっていない(No. 147)(図版 12: 2)。また、キュルテペ・カールムの建物からは 6 点の出土が確認されている(Nos. 146 and 148-152) (図版 12: 1)。サイズ幅は、長さ約 48-54mm、横幅約 18-24mm である。ボアズキョイの建物跡からは長さ約 67-69.5mm、横幅約 18.5-20mm の 2 点の出土が確認されている(Nos. 270-271) (図版 12: 4-5)。アリシャル・ホユックの建物跡でも長さ約 31mm、横幅約 18mm の 1 点の出土が確認されている(No. 430)が、サイズからもわかるように他遺跡から出土したものより小さいものである。中央アナトリアの出土例は全て建物跡から出土しているという特徴があることがわかった。本稿の対象となる交易路では、現在のところ出土は確認されていない。その他には、イランのスーサでも同等のタイプが 1 点出土していることが確認されている(Gernez 2007: III Pl. 477.1)。

#### 4.6 二又の武器

長いソケット式の柄を持ち、その先端が二又、もしくは三又に分かれている槍である。武器や何らかのシンボルとして、または農具としても使用されたと考えられる。本稿では、独自に二又の槍をタイプ 1、三又の槍をタイプ 2 として分類を行った。

##### 4.6.1. タイプ 1 (図版 12)

このタイプは、槍の先端が二又に分かれているものである。中央アナトリアでは、キュルテペ・カールムの建物跡からの出土が 1 点確認されている (No. 733)。その大きさは、長さ約 410mm、横幅約 100mm である。また、ヤッス・ホユック主丘の王宮趾でも同様のタイプの出土が確認されているが、サイズ等の詳細は公表されていない (No. 737) (Japanese Institute of Anatolian Archaeology: Yassı Höyük 2012)。本稿の対象となる交易路やその他の地域では、現在のところ出土は確認されていない。

##### 4.6.2. タイプ 2 (図版 13)

このタイプは、槍の先端が三又に分かれているものである。中央アナトリアのキュルテペ・カールムからは 2 点の出土が確認されており、更に出土地不明の遺物が 1 点確認されている (Nos. 153-155) (図版 13: 1-3)。それらのサイズ幅は、長さ約 290-702mm、横幅約 101-115mm である。本稿の対象となる交易路では、現在のところ出土は確認されていない。

その他の地域では、ビブロスにあるアビ・ケムー (Abi Chemou) の王墓での出土が確認されている (Gernez 2007: III Pls. 459.1-3)。王墓での出土状況から、この遺物が当時王族などの高貴な人々の権威の象徴として使用されていた可能性も指摘できる。

#### 4.7 ナイフ (図版 13)

ナイフは短くて細長い片刃を持ち、茎部がないものである。主にものを切る道具として使用されたと考えられる。本稿では、出土したナイフはほとんど類似した形を持つ為、サブタイプには分類していない。

中央アナトリアでは、キュルテペ・カールムの建物跡で 2 点の出土が確認されている。その大きさは、長さ約 205mm、横幅約 22mm、厚さ約 4mm である (Nos. 134-135) (図版 13: 6)。ボアズキョイの建物跡からは、6 点の出土が確認されており、そのサイズ幅は長さ約 59-165mm、横幅約 9-22mm、厚さ約 2-3.8mm で (Nos. 294-299)。アリシャル・ホユックの建物跡からは、長さ約 38mm、横幅約 6mm、厚さ約 1.3mm の遺物 1 点の出土が確認されている (No. 419)。また、西アナトリアのトロイの建物跡からは 23 点の遺物が確認されているが、多くのサイズや層序の詳細は不明である。その中で唯一分かっているもので、長さ約 150mm、横幅約 21mm である。このようにトロイでは該当する層からのナイフの出土が顕著であるといった特徴があげられる。本稿の対象となる交易路では、現在のところ出土は確認されていない。その他の地域では、レバント地方やキプロスの墓やエジプトでも出土が確認されている (Blackwell 2011: 602 and 612; Gernez 2007: III Pls. 482.2-3, 6 and 8)。

#### 4.8 鎌 (図版 14)

鎌とは、薄くて平らな三日月型の片刃とその片端に薄くて平らな短い茎部をもつものである。常時は農具として使用され、非常時には武器としても使用可能であったと考えられる。本稿では、出土した遺物のほとんどが類似した形状をしていたため、サブタイプには分けていない。

中央アナトリアでは、カマン・カレホユックの火災を伴う破壊層から 8 点の出土が確認されている (Nos. 15-22) (図版 14: 1-8)。それらの遺物のサイズ幅は、長さ約 110-135mm、横幅約 16-29mm、厚さ約 2-7mm である。また 8 点中 3 点は、主丘の裾野第 III 区の建物跡からの出土が確認されている。そして、その他の 5 点は、3 点と 2 点で重なって出土した。この出土状況から、鎌刃を重ねて収納していたと考えられる。カールム・カニシュの工房跡でも 1 点の出土が確認されているが、大きさについての記載はみられない (No. 138)。ボアズキョイの建物跡からも 3 点の出土が確認されている (Nos. 300-302)。それらのサイズは残存するもので、長さ約 122mm、横幅約 24mm である。また、アリシャル・ホユックの建物跡からは 2 点の出土が確認されており、その大きさは長さ約 126mm、横幅約 26mm である (Nos. 468-469)。中

中央アナトリアから出土した遺物のほとんどが、形やサイズが規格化されているように似通っていることが確認できた。これは、当時鎌が大量生産されていた可能性も考えられる。本稿の対象となる交易路では、現在のところ出土は確認されていない。その他の地域では、キプロスでの出土が確認されている (Blackwell 2011: 602)。

#### 4.9 錐 (図版 15)

錐とは、片方の先端が尖っている細長い道具である。皮や骨を加工する際に使用されたと考えられる。断面図は、四角形になっている。本稿では、出土した全ての錐の形状は似通っていたため、サブタイプには分けていない。

中央アナトリアでは、カマン・カレホユックの火災を伴う破壊層の建物跡からは、4点の出土が確認されている (Nos. 23-26) (図版 15: 1)。それらの遺物のサイズ幅は大きく2つに分けられる。1つは、長さ約 25-39mm、横幅約 4-6mm であり (Nos. 23 and 25-26)、もう1つは、長さ約 142mm、横幅約 15mm、厚さ約 8.5mm である (No. 24)。大きなサイズの方は、片面中央部に貫通していない穴が空いている。また、アリシャル・ホユックの建物跡からは36点の出土が確認されている (Nos. 431-66) (図版 15: 2-18)。それらのサイズ幅は、長さ約 27-113mm、横幅約 2-7mm である。そして同遺跡の墓からは、人骨 (Alishar No. b X31)と一緒に青銅製の錐1点の出土が確認されているが、サイズ等の詳細はわかっていない (No. 467)。ボアズキョイの建物跡からは、17点の出土が確認されており、それらのサイズ幅は、長さ約 59-125mm、横幅約 3.3-6.5mm である (Nos. 272-288)。南西アナトリアのベイセスルタンの建物跡からは中期青銅器時代の遺物4点の出土が確認されており、そのサイズ幅は、長さ約 44-123mm、横幅約 1.5-4mm である。クスラの建物跡からは4点の出土が確認されているが、それらの大きさはわかっていない。メルシンやタルススからも1点ずつの出土ではあるが、中期青銅器時代の遺物の出土が確認されている。また、西アナトリアのトロイでも同様に、7点の出土が確認されているがサイズ等の詳細はわかっていない。これらのことから、アナトリア全土からの出土が確認されており、アナトリアでは一般的に使用されていた道具であると考えられる。本稿の対象となる交易路では、リダル・



ホユックの墓からの出土が確認されている(Kaschau 1999: p.175, p.266 and Tafel VIII)。

その他の地域では、キプロスや北部レバント、エジプトの建物跡からもこのタイプの出土が確認されている(Blackwell 2011: 602 and 655; Philip 2006: 127 and Figs. 58.2-3 on 130)。

#### 4.10 鑿

鑿とは、薄く細長い長方形で、片刃のものである。刃の部分の両端はやや丸みを帯びている。木材などを加工するために用いられる道具である。出土した遺物のほとんどの形状が似通っていたため、サブタイプに分けていない。中央アナトリアでは、キュルテペ・カールムの建物跡から2点の出土が確認されており、そのサイズは、長さ約 60mm、横幅約 10mm である(Nos. 136-137)。ボアズキョイの建物跡からは5点の出土が確認されており、そのサイズ幅は、長さ約 56-102mm、横幅約 3.5-7mm である(Nos. 289-293)。アラジャ・ホユックの建物跡からもサイズ幅長さ約 33-118mm、横幅約 4.5-19mm の遺物5点の出土が確認されている(Nos. 572-576)。また、西アナトリアのベイセスルタンの建物跡からも中期青銅器時代のサイズ幅長さ約 47-149mm、横幅約 3-8mm の遺物7点の出土が確認されている。またクスラの建物跡からは大きさは不明だが、4点の出土が確認されている。メルシンの建物跡からもサイズ幅長さ約 88-143mm、横幅約 5-16mm の遺物2点の出土が確認されている。タルススの建物跡からもサイズは不明だが、1点の出土が確認されている。西アナトリアのトロイの建物跡からは、16点の出土が確認されており、そのサイズ幅は長さ約 100-375mm、横幅約 5-27mm である。出土例は、アナトリアの建物跡からの出土がほとんどであるという特徴がみられた。本稿の対象となる交易路では、現在のところ遺物の出土は確認されていない。その他の地域では、エジプトや北部レバント地方での出土も確認されている(Blackwell 2011: 656; Philip 2006: 123 and Fig. 56.1 on 124)。

#### 4.11 ピン

ピンとは、先の尖った針の部分に様々な形状をしたピン頭の部分が付属し

たものをいう。ピン頭の形状は、球体や角形の形状をしていることが多い。ピンの用途は、服を留めたり装飾品として使用されたり、時には、スタンプ印章や円筒印章の付属品として使用されていたと考えられている。本稿では、ベーマー(Boehmer 1972)の分類を参照に、ピンの分類をピン頭の形状の違いによって 10 つのサブタイプに分類をおこなった。ドイツの発掘調査報告書の中では、ピンと針の区別がつけられておらず、一括で取り扱われている点には注意する必要があるが、本稿では、ピンと針の 2 つを分けて分類を行なった。

#### 4.11.1. タイプ 1 (図版 16)

このタイプは、断面図が半円形のピン頭である。ベーマー(Boehmer)の分類によるとボアズキョイ IVd 層のタイプ e に相当すると考えられる(Boehmer 1972: Abb. 33)。

中央アナトリアでは、カマン・カレホユックの火災を伴う破壊層からは 3 点の出土が確認されており、それらのサイズ幅は長さ約 73-115.5mm、横幅約 6-12mm である(Nos. 29-31) (図版 16: 1-2)。アリシャル・ホユック主丘の建物跡からは 5 点の出土が確認されているが、大きさは長さのみが記載されており約 67-86mm である(Nos. 499-501 and 527-528)。ボアズキョイの建物跡からは長さ約 80-95mm、横幅約 6.2-7mm の遺物 2 点の出土が確認されている(Nos. 308 and 316)。本稿の対象となる交易路では、現在のところ出土が確認されていない。その他の地域では、レバント地方のビブロスの神殿跡から 2 点の出土が確認されている(Klein 1992: 98-9 and Taf. 14)。

#### 4.11.2. タイプ 2 (図版 16)

このタイプは、ピン頭が球体なものである。この形状は、ベーマーの分類によるとボアズキョイ IVd 層のタイプ a とタイプ d の 2 つに相当すると考えられる(Boehmer 1972: Abb. 33)。

中央アナトリアでは、カマン・カレホユックの火災を伴う破壊層からは 6 点の出土が確認されており、それらのサイズ幅は長さ約 37-101mm、横幅約 8-14mm である(Nos. 37-42) (図版 16: 3-5)。アリシャル・ホユックの建物跡

ではサイズ幅長さ約 53-92mm の遺物 9 点の出土が確認されている (Nos. 490-491, 493-498 and 539)。ボアズキョイの建物跡からはサイズ幅長さ約 63-102mm、横幅約 5.5-8.5mm の遺物 5 点の出土が確認されている (Nos. 303-305, 307 and 348)。このタイプは、初期青銅器時代によく出土がみられる遺物である。本稿の対象となる交易路では、現在のところ出土が確認されていない。

#### 4.11.3. タイプ 3 (図版 16)

このタイプは、ピン頭の断面が四角形もしくは多角形のものである。この形状は、ベーマーの分類によるとボアズキョイ IVd 層のタイプ 1 に相当すると考えられる (Boehmer 1972: Abb. 33)。中央アナトリアでは、カマン・カレホックの火災を伴う破壊層からは 2 点の出土が確認されており、それらの長さは、約 36-79mm、横幅約 0.5-0.7mm である (Nos. 35-36) (図版 16: 6)。アリシャル・ホックの建物跡からは長さ約 72mm の遺物 1 点の出土が確認されている (No. 510)。ボアズキョイの建物跡からはサイズ幅長さ約 41-100mm、横幅約 0.28-0.78mm の遺物 4 点の出土が確認されている (Nos. 344, 359 and 387-388)。また、地域は異なるが、ビブロスの神殿跡でも類似品が出土しているが、厳密に言えば、ビブロスから出土したもの (Klein 1992: 170) は後期青銅器時代 (約前 1200-1400 年前頃) に相当するものである (Boehmer 1972: Abb. 33)。本稿の対象となる交易路では、チャガル・バザールの建物跡から 1 点の出土が確認されている (McMahon *et al.* 2009: Pl. 84-7)。

#### 4.11.4. タイプ 4 (図版 16-18)

このタイプは、分割された球体のピン頭である。この形状は、ベーマーの分類によるとボアズキョイ IVd 層のタイプ k に相当すると考えられる (Boehmer 1972: Abb. 33)。ほとんどの出土例のピン頭は 6-9 分割されている。またピン頭の頭頂部は、場合によっては平らになっているものもみられる。この場合、ベーマーの分類によるとボアズキョイ IVd 層のタイプ g とタイプ i の 2 つのタイプに相当すると考えられる (Boehmer 1972: Abb. 33)。

中央アナトリアでは、カマン・カレホックの火災を伴う破壊層からは 3 点の出土が確認されており、それらのサイズ幅は長さ約 90-130mm、横幅約

12-16mm である (Nos. 32-34) (図版 16: 7-9)。サイズは不明だがキュルテペから 11 点 (図版 17: 1-11)、アリシャル・ホユックの建物跡からは長さ約 42-91mm の遺物 9 点の出土が確認されている (Nos. 492, 512, 522-526 and 537-538)。また同遺跡の墓からは、長さ約 85mm の遺物 1 点の出土が確認されている (No. 536)。ボアズキョイの建物跡からはサイズ幅長さ約 64.5-118mm、横幅約 0.62-1.8mm の遺物 28 点の出土が確認されている (Nos. 306, 319-340, 345 and 354-357)。ヤッス・ホユックの宮殿趾からもサイズは不明ながら 1 点の出土が確認されている (No. 738)。本稿の対象となる交易路では、リダル・ホユックの墓から 14 点の出土が確認されている (Kaschau 1999: 168-81)。また、チャガル・バザールの建物跡から 1 点の出土が確認されている (McMahon *et al.* 2009: Pl. 84-8)。その他の地域では、類似品がメソポタミア方面からも出土が確認されている (Klein 1992: 119)。

#### 4.11.5. タイプ 5 (図版 17)

このタイプは、針の上部からピン頭にかけて装飾が施されているもので「トグルピン (toggle pin)」と呼ばれるものである。この形状はピン頭に相当する部分がほとんど見られないため、ピン頭の有無に関わらず、ピンの上部に装飾が施されたものをこのタイプに分類する。また、針の中央部分には小穴が開けられているものが多く見られる。キュルテペ・カールムの墓からは 12 点の出土が確認されており、そのサイズ幅は長さ約 61-164mm である (Nos. 173-174, 177-183, 187-188 and 192) (図版 17: 12-23)。このピンのタイプは、現在のところ、中央アナトリアの中でもキュルテペ・カールムでのみ出土が確認されている特徴的な遺物であり、紀元前 2 千年紀前半にみられるものであると考えられている (Özgüç 1986: 32-3)。また、キュルテペ・カールムから出土した遺物の中でも特に、Nos. 187-188 の 2 点に関しては、類似品がシリア北部やレバント地方から出土していることからシリアから入ってきたタイプであると考えられている (Özgüç 1986: 72)。また、同時期のエジプトのテル・エル・ダバの建物跡や墓からも出土が確認されているが、それらは化学分析の結果、青銅ではなく銅製品であることもわかっている (Philip 2006: 95-9 and Figs. 45-46 on 96-7)。本稿の対象となる交易路では、リダル・ホユ

ックの墓から 1 点の出土が確認されている (Kaschau 1999: 178, 267 and Taf. X)。

また、タイプ 4 とタイプ 5 の複合型のタイプもキュルテペ・カールムの墓から 11 点の出土が確認されており、そのうち 6 点はカールム・カニシュ第 1b 層の墓の副葬品として出土したことが確認されている (Nos. 184–186, 189–191 and 193–197)。それらのサイズ幅は長さ約 48–177mm であり、中には針の中央に小穴を有するものも確認されている。また、No. 189 は、シリアからの搬入品であると考えられているが、このタイプの鋳型などの出土は確認されていない (Özgüç 1986: 72–3)。No. 191 は、ピン頭が 2 つに分かれた珍しいタイプであるが、西アナトリアのトロイやレバント地方のビブロスでの出土も確認されている。その他には、同時期のエジプトのテル・エル・ダバの墓からの出土も確認されているが、上記と同様に化学分析の結果から銅製品であることが確認されている (Philip 2006: 95 and Fig. 46. 4 on 97)。こちらのタイプも本稿の対象となる交易路では、現在のところ出土が確認されていない。

#### 4.11.6. タイプ 6 (図版 18)

このタイプはピン頭が円錐形のものであり、ボアズキョイ IVd 層出土のタイプ b のものと同様であると考えられる (Boehmer 1972: Abb. 33)。中央アナトリアでは、アリシャル・ホユックの建物跡からは 8 点の出土が確認されており、そのサイズは長さ約 57–97mm である (Nos. 502–509) (図版 18: 1–6)。ボアズキョイからは、15 点の出土が確認されており、そのサイズ幅は長さ約 52–105mm、横幅約 1–8mm である。本稿の対象となる交易路では、アッシュールからの出土が確認されている (Klein 1992: 104)。

#### 4.11.7. タイプ 7 (図版 18)

このタイプは、ピン頭が釘のように平らなものである。このタイプは、ボアズキョイ IVd 層のタイプ f に相当すると考えられている (Boehmer 1972: Abb. 33)。中央アナトリアでは、アリシャル・ホユックの主丘の建物跡からは 8 点の出土が確認されており、そのサイズ幅は長さ約 52–93mm である (Nos.

513–517 and 519–521) (図版 18: 7-13)。同遺跡の墓からも長さ約 105mm の遺物 1 点の出土も確認されている (No. 518)。また、ボアズキョイの建物跡からも 3 点の出土が確認されており、そのサイズ幅は長さ約 50-105mm、横幅は約 6-8mm である (Nos. 315, 317 and 343)。その他にも骨製品ではあるが、カールム・カニシュ第 II 層及び第 Ib 層の回廊からの出土が確認されている (Klein 1992: 167)。つまりピンに関しては、青銅製品と同様の形状のものが骨製品でも制作されていたということがわかっている。本稿の対象となる交易路では、チャガル・バザールの建物跡から 3 点の出土が確認されている (McMahon *et al.* 2009: Pls. 84-4 and 9, 85-9)。

#### 4.11.8. タイプ 8 (図版 19)

このタイプはしずく型のピン頭である。このタイプはボアズキョイ IVd 層のタイプ q に相当すると考えられている (Boehmer 1972: Abb. 33)。中央アナトリアでは、アリシャル・ホユックの建物跡からは長さ約 84mm の遺物 1 点の出土が確認されている (No. 511) (図版 19: 1)。ボアズキョイの建物跡からはサイズ幅長さ約 52-95mm、横幅約 6.5mm の遺物 2 点の出土が確認されている (Nos. 341–342)。本稿の対象となる交易路では、現在のところ出土が確認されていない。その他の地域では、レバント地方やシリア北部での出土も確認されている (Klein 1992: 70–1)。

#### 4.11.9. タイプ 9 (図版 19)

このタイプは、ピン頭がコイルのように巻き付いている形状のものである。ボアズキョイ IVd 層のタイプ o に相当するタイプであるとされる (Boehmer 1972: Abb. 33)。アリシャル・ホユックの建物跡から 4 点の出土が確認されておりそのサイズ幅は長さ約 54-89mm である (Nos. 529–531 and 542) (図版 19: 2)。ボアズキョイの建物跡からは、1 点の遺物の出土が確認されているが、頭部の半分が欠損している (No. 379)。本稿の対象となる交易路では、リダル・ホユックの墓から 6 点の出土が確認されている (Kaschau 1999: 177-8)。その他の地域では、南・南西アナトリアのメルシン (Mersin) やアララフ (Alalakh)、タルスス (Tarsus)、カルケミシュ (Carchemish) や、シリア・メソポ

タミア方面やエジプトからも幅広く出土が確認されている遺物である (Philip 2006: 102 and Fig. 46 on 97)。

#### 4.11.10. タイプ 10 (図版 19)

このタイプはピン頭に動物などの小立像が付属しているものである。タイプ 9 の進化型とみられるような動物に見立てた形状のものも存在する。遺物によっては、ピン頭の近くに小穴が空いている場合もみられる (Nos. 532 and 534-5) (図版 19: 3-5)。これらのタイプは中央アナトリアでは、ボアズキョイからは出土が確認されておらず、アリシャル・ホユックの建物跡から 4 点の出土が確認されているのみである (Nos. 532-5)。それらのサイズ幅は長さ約 7.7-10.4mm である。本稿の対象となる交易路では、現在のところ出土が確認されていない。その他の地域では、南部アナトリアやレバント地方などでの出土が確認されている (Klein 1992: 127-8)。

#### 4.12 針 (図版 19)

針とは、ピン頭に小穴が空いているものを指す。上記で説明した通り、ドイツの報告書などではピンと針の区別がつけられておらず、一括で取り扱われている。しかし本稿では、2 つを区別して分類している。この分類の注意点としては、遺物が破損しピン頭が欠損している場合、ピンか針かの区別がつかない点である。その際は、「ピン・針」と記載し、両方の可能性を残すことにしたが、ここでの分類では、確実に針とわかるものだけを抽出して取り上げている。全ての出土した針は形状が似通っていたため、サブタイプには分けていない。

中央アナトリアでは、カマン・カレホユックの火災を伴う破壊層からサイズ幅長さ約 76-103mm、横幅約 3-5mm の遺物 2 点の出土が確認されている (Nos. 37-8) (図版 19: 6)。アリシャル・ホユックの建物跡からは 12 点の出土が確認されており、それらの遺物はサイズ幅長さ約 4.8-9.8mm である (Nos. 476-87)。ボアズキョイの建物跡からもサイズ幅長さ約 48.5-122mm の遺物 34 点の出土が確認されている (Nos. 360-78, 380-86 and 389-96)。本稿の対象となる交易路では、南東アナトリアのウチュテペ・ホユック (Özfirat 2005: 54

and Pl. XCIV: 1 on 89)やリダル・ホユックの墓での出土が確認されている (Kaschau 1999: 168, 264 and Taf. I; 170, 265 and Taf. VI)。更に、シリア・イラク方面からの出土も少量ではあるが確認されている (Klein 1992: 30-1)。

#### 4.13 リング

リングとは、ワイヤーで形成された円形のものであり、基本的には装飾品として使用されていたと考えられている。本稿では、リングは大きさによって 2 タイプに分類した。

##### 4.13.1. タイプ 1 (図版 20)

10-30mm 程度の輪である。このタイプは、指輪やイヤリング、ネックレス、髪飾りなどに使用されたと考えられている。しかし、ネックレスのように連続したリングの状態で出土することは稀である。

中央アナトリアでは、カマン・カレホレックの破壊層からは合計 44 点の出土が確認されており、そのサイズ幅は長さ約 10.5-32mm、横幅約 13-32mm、厚さ約 2-4.8mm である (Nos. 43-86) (図版 20: 1-6)。また同遺跡の火災を伴う破壊層から 2 連に連なるリング (Nos. 54 and 56) や頭部の骨の側からリングが出土していることが確認されている。それらのリングは右耳と左耳のイヤリングであると考えられている (Nos. 78, 84 and 89)。しかし、その人骨の年齢や性別はわかっていないが、No. 89 は、幼児であることがわかっている。また、他の遺体からは指の骨と共に出土したリングも確認されている (No. 60)。アリシャル・ホユックの建物跡からは、サイズ幅長さ約 12-29mm、横幅約 12-29mm の遺物 8 点の出土が確認されている (Nos. 549-550 and 552-557)。同遺跡の墓からは、サイズ幅長さ約 13-21mm、横幅約 14-22mm の遺物 4 点の出土が確認されている (Nos. 547-548, 551 and 558)。これら墓から出土した遺物は、副葬品として出土したものである。No. 548 と No. 551 の遺物はそれぞれ出土状況からイヤリングとして使用されていたこともわかっている。また、ボアズキョイの建物跡からは、2 点の出土が確認されている (Nos. 402-403)。それらの遺物のサイズ幅は、長さ約 17.5-32mm、横幅約 2.5-3mm である。カールム・カニシュの墓からは 4 点の出土が確認されており、



そのサイズ幅は長さ約 14-23mm である(Nos. 198-201) (図版 20: 7-9)。その中の 2 点は、金のプレートで表面がコーティングされていた(Nos. 200-1)。本稿の対象となる交易路では、リダル・ホユックの墓から 29 点の出土が確認されている(Kaschau 1999: 168-181)。その他に、チャガル・バザールの建物跡から 2 点(McMahon *et al.* 2009, Pls. 84-11 and 85-5)、墓から副葬品の指輪として 1 点の出土が確認されている(McMahon *et al.* 2009: Pl. 85-8)。エジプトのテル・エル・ダバでも同様のタイプの出土が確認されている(Philip 2006: 114-6 and Fig. 52 on 115)。このタイプの出土に関しては、建物跡より墓からの出土が頻繁に確認されているという報告もみられる(Philip 2006: 116)。

#### 4.13.2. タイプ 2 (図版 20)

40-60mm 程度の輪であり、ブレスレットやアンクレットとして使用されていたと考えられている。

中央アナトリアでは、カールム・カニシュの墓からは 2 点の出土が確認されているが、墓の出土層位に関しては詳細がわかっていないが、サイズ幅は長さ約 58-64mm であるこの 2 点の遺物は、すべて銀色の金属薄片によって覆われていた(Nos. 202-204)(図版 20: 10)。また、同遺跡から出土した遺物で、両端に動物の装飾が付けられている遺物 1 点の出土も確認されている(No. 205)(図版 20: 11)(Özgüç 1986: 30-1)。このタイプのリングは、ボアズキョイからの出土も確認されているが、その出土層位がアッシリア・コロニー時代より新しいヒッタイト帝国時代の層からの出土であるという(Özgüç 1986: 77)。更に、ボアズキョイの建物跡からも 5 点の出土が確認されている、そのサイズ幅は長さ約 34.5-57.5mm、横幅約 2.5-6mm である(Nos. 397-401)。本稿の対象となる交易路では、現在のところ出土が確認されていない。

#### 4.14 スタンプ (図版 20)

スタンプは、個人の所有物であると考えられるが、どのような人物が所持していたのかについてはわかっていない。

中央アナトリアでは、カマン・カレホユックの火災を伴う破壊層から 2 点

の出土が確認されており、それらのサイズ幅は長さ約 23-26mm、横幅約 2-3mm である (Nos. 87-88)。No. 87 は、印面は中央部に鳥のような文様が描かれ、それを取り囲むように三日月型がサークル状になって並んでいる (大村 1997: 120-2) のものと、No. 88 は、印面に鳥の頭部がサークル状に並んでいるものがある (Çelik 2006: Figs. 4-8 on 280)。この鳥の頭部の印面については、中央アナトリアで一般的な絵柄であると考えられている (Özgüç 1968: Pls. XXXVII, 1a-b and 5)。カールム・カニシュ第 II 層からは、テラコッタ製のスタンプが出土している (No. 734) (Özgüç 1968: 43-4)。また、粘土製の印影も同層位から出土が確認されているが (No. 735)、印面などから古ヒッタイト時代のものであると同定されている (Özgüç 1968: 45)。また、アリシャル・ホユックの主丘の建物跡からも 2 点の出土が確認されている (Nos. 474-475)。No. 474 の遺物は、印面が四角形で取っ手が付いているが一部破損がみられる。印面の絵柄は 8 本の平行線が他の平行線と直角に交差している (Schmidt 1932: 148)。サイズは、長さ約 22mm、横幅約 14.5mm、高さ 22mm である。No. 475 は、部分的に破損している 6 つの葉で構成されており、取っ手の部分には穴があいている。その印面は、中央部に 2 つの同心円があり、その中央部から外側に向け 6 つの支線が延びている (Schmidt 1932: 149)。サイズは、長さ約 18mm、横幅約 18mm、高さ 17mm である。この文様は、カールム・カニシュ第 II 層の時出土したものであるが、メソポタミアの円筒印章の文様がアナトリアのスタンプ印章に踏襲されたタイプであると指摘されている (Collon 1990: 48) が、アナトリアの地域内においても文様の形態が異なっていたようである。本稿の対象となる交易路では、現在のところ出土が確認されていない。

#### 4.15 ピンセット

ピンセットとは、2 つの薄く細長い板を一端で接合したものである。小さなものを掴むために使用されていたと考えられる。

中央アナトリアでは、キュルテペからも 2 点の出土が確認されているが、それらは大きさや出土状況などの情報はわかっていない。カマン・カレホユックの火災を伴う破壊層からは 1 点の出土が確認されており、その大きさは

長さ約 62mm、横幅約 9.5mm、厚さ約 3mm である(No. 89)。ボアズキョイの建物跡からもサイズ長さ約 67.2mm、横幅約 5.2-8mm の遺物 1 点の出土が確認されている(No. 405)。これらカマン・カレホユックとボアズキョイで出土が確認された 2 点は、土器の中から出土した。これらの状況から、ピンセットが土器の中のものを取り出すために使用されたことは明らかであると考えられる。しかし、このような出土状況は大変稀であり、身だしなみを整えるための個人の道具として墓から出土することが多いという(Philip 2006: 109 and 161-2)。本稿の対象となる交易路では、チャガル・バザールの墓から 1 点の出土が確認されている(McMahon *et al.* 2009: Pls. 83-4)。

#### 4.16 容器 (図版 21)

容器とは青銅製の器のことであり、この場合、青銅製の器全般を容器と考えた。カールム・カニシュの墓からは、用途不明の容器数点(Nos. 156-62)、1 点のボウル(No. 164)、1 点の鍋(No. 168)、1 点のバケツ(No. 169)などが出土している(図版 21: 1-6)。全ての容器は墓から出土していることから、副葬品の一部であったことがわかっている。その他に、キュルテペの宮殿趾からは、1 点のボウル(No. 165)、1 点のカップ(No. 166)、1 点のゴブレット(No. 167)の出土も確認されている。中央アナトリアでは青銅製の容器の出土がキュルテペのみにしか見られないといった特徴もみられる。本稿の対象となる交易路では、現在のところ出土が確認されていない。

#### 4.17 糸巻き

糸巻き(リール)は、糸を巻き取る際の軸として使用されたと考えられる。カールム・カニシュからは、3 点のリールの出土が確認されている(Nos. 170-172)。それらのサイズ幅は、長さ約 88-108mm、横幅約 50-86mm である。中央アナトリアでは、現在のところカールム・カニシュ以外の遺跡で糸巻きの出土は確認されていない。キュルテペ出土の鋳型などから、アナトリアでアナトリアの工人によって作製された可能性が指摘されている(Özgüç 1986: 75-6)。No. 172 は、副葬品の一部であったことが明確にわかっている。本稿の対象となる交易路では、現在のところ出土が確認されていない。

#### 4.18 鋳型 (図版 22)

鋳型とは、青銅などの金属を加工する際に使用される型のことで、特に武器などの製造の際に使用されていたと考えられる。ほとんどの鋳型は、滑石(ステアタイト)などの石製で、いくつかは焼いた粘土製であった。石製の鋳型は再利用されていたと考えられるが、粘土製の鋳型は一度しか利用できなかったようである(Philip 2006: 192)。

鋳型には 2 つのタイプがあり、1 つは、石製や粘土製の鋳型に、木製の蓋を用いて使用したタイプ(open mould)と、二枚貝のように 2 つの石製や粘土製の鋳型を組み合わせ使用したタイプ(bivalve mould)の 2 つである(Massimino 2013: 89)。後者のタイプは斧などの複雑なものが鋳造されたと考えられるが、その他の遺物に関しては、どちらが使用されたと断定するのは難しい。

中央アナトリアでは、アリシャル・ホユックの建物跡から長さ約 64mm、横幅約 39mm の灰色がかった緑色の蛇紋石製で 3 面の鋳型面(2 本の棒、丸型など)があるもの 1 点の出土が確認されている(Schmidt 1932: 170)。ボアズキョイの建物跡からはサイズ幅、長さ約 51-78mm、横幅約 37-54mm、厚さ約 16-17mm の 2 点の出土が確認されている(Nos. 406-7)。No. 406 は、黒茶色の石灰岩で作られた小像の open mould の鋳型である。No. 407 は、2 本の棒の open mould の鋳型である(Boehmer 1972: 217)。南東アナトリアのヒルベメルドン・テペの工房跡では 9 点の遺物の出土が確認されている(Nos. 623-31)(図版 22: 1-4)。Nos. 624、628-629、631 は粘土製であり、そのサイズ幅は長さ約 95-320mm、横幅約 91-110mm、厚さ約 40-75mm である。No. 624 は、おそらく平斧の open mould の鋳型で、No. 628 は、棒、鎌、鑿、尖端の open mould の複合タイプの鋳型である。No. 629 は、具体的にどの鋳型かはわからないが、open mould の複合タイプの鋳型である。No. 631 は、刃先の open mould の複合タイプの鋳型である。Nos. 623、625-627、630 は、石製であり、サイズ幅は長さ約 100-240mm、横幅約 72-190mm、厚さ約 25-170mm である。No. 623 は、bivalve mould の軸穴付きの平斧の鋳型である。No. 625 は、砂岩製の open mould で、棒などの複合タイプの鋳型である。No. 626 は、砂岩製

の open mould で、鎌や道具などの複合タイプの鋳型である。No. 627 は、石灰岩製の open mould で、錐、棒、鎌、平斧などの複合タイプの鋳型である。No. 630 は、玄武岩製の open mould で、鎌や平斧の複合タイプの鋳型である (Massimino 2013: Pls. I-IX)。また、カールム・カネシュの工房や住居などの建物跡から 49 点の出土が確認されている (Nos. 212-60)。しかし、豊富な鋳型資料にも関わらず、青銅製品の鋳造に関わる原料についての情報が不足しているといった問題があげられる。これら鋳型のサイズはおよそ長さ 100mm を境に 2 つのタイプに分けることができる。大きい鋳型のサイズ幅は、長さ約 105-290mm、横幅約 44.5-175mm である (Nos. 214-5, 217, 223-7, 230-3, 236-9, 242, 244, 246-7 and 260)。小さい鋳型のサイズ幅は、長さ約 31-99mm、横幅約 17.5-96mm である (Nos. 213, 216, 218, 220-2, 228-9, 234-5, 240, 245, 248-56 and 258-9)。これらは、有窓斧、軸穴付きの平斧、平斧、鑿、刃、棒、装飾品などの鋳型である (Müller-Karpe 1994; Özgüç 1986)。本稿の対象となる交易路では、南アナトリアのリダル・ホユックの建物跡からは、6 点の鋳型の出土が確認されている。サイズ幅は、長さ約 86-249mm、横幅約 100-195mm であり、軸穴付きの平斧などの鋳型である。そのうち、建物跡から斧 Type 2 (shaft hole axe) の鋳型 1 点の出土が確認されている (Müller-Karpe 1994: Pl. 46.4 on 210; Blackwell 2011: 646)。この遺跡でも、原料の情報は不足していたが、延べ棒などの出土も確認されている (Müller-Karpe 1994: 197-8, 202 and 210)。

その他の地域では、タルススの建物跡からも、サイズ幅長さ約 81-236mm、横幅約 68-160mm の短剣や鑿の鋳型 5 点の出土が確認されている (Blackwell 2011: 649; Müller-Karpe 1994: 200 and 202)。アララハ(テル・アトチャナ)の神殿趾からも長さ約 33mm、横幅約 23.5mm の小さな軸穴付きの平斧 1 点の出土が確認されている (Müller-Karpe 1994: 218)。大きさからも分かる通り、この平斧は他の出土遺物と比べて極端に小さいことがわかる。おそらくこの鋳型は、日常的に使用されていたというよりも神殿に保管されていたものではないだろうと思われるが、残念ながら使用用途についてはわかっていない。また、エジプトのテル・エル・ダバからも同時期の層から石灰岩製の鋳型 1 点の出土が確認されている (Philip 2006: 184)。

## 第5章 交易に関連する遺跡とそこから出土した青銅製品

この章では、アッシリア・コロニー時代における交易ルートに関連する遺跡の概要及び該当する時期の層から出土した、青銅製品の出土状況と出土傾向について述べる。特に、1つの遺跡から多数出土した青銅製品については、長さや幅のわかるものに関してグラフ化し分析を行う。

### 5.1 各遺跡のアッシリア・コロニー時代の層

アッシリア・コロニー時代のカールム・カニシュ第II層と第Ib層に相当する各遺跡の層は、表5.1の通りである。それぞれの遺跡については、中央アナトリア、南東アナトリア、北シリア／北メソポタミアの地域ごとに次項以降で詳述する。

表 5.1 各遺跡の年代相対表

	中央アナトリア					
	キュルテペ	カマン・カレホック	ヤッス・ホック	アリシャール・ホック	ボアズキョイ	アジェム・ホック
前1813年～前1750年頃 (カールム・カニシュ第Ib層)	第Ib層	第IIIc層	遺丘第II層、下の町 発掘中	10T層	ブユッカレ第IVd層、 北西斜面の第8a層、 下の町の第4層	第3層/第4層
前1930年～前1824年頃 (カールム・カニシュ第II層)	第II層	未発掘	遺丘第II層、下の町 発掘中	不明	ブユッカレ第IVd層、 北西斜面の第8a層、 下の町の第4層	第3層/第4層

	南東アナトリア		
	リダル・ホック	ヒルベメルドゥン・テペ	ウチュ・テペ
前1813年～前1750年頃 (カールム・カニシュ第Ib層)	Schicht 8-10	第IIIb層	第11層
前1930年～前1824年頃 (カールム・カニシュ第II層)	Schicht 8-10	第IIIb層	第11層

	北シリア/北メソポタミア			
	テル・アルビッド	テル・パツリ	チャガル・バザール	アッシュュール
前1813年～前1750年頃 (カールム・カニシュ第Ib層)	Old Jezirah I-II	Area G, Strata 33, 34, A, B, C	Area G, Phase II/1	Old Assyria
前1930年～前1824年頃 (カールム・カニシュ第II層)	Old Jezirah III	Area G, Stratum 34 D	Area G, Phase II/2	Old Assyria

### 5.2 中央アナトリアの遺跡

#### 5.2.1. キュルテペ(Kültepe)

キュルテペは、アッシリア・コロニー時代の中継交易の中心地である。この遺跡は、アンカラから南に約 320km、カイセリから北に約 21km、クズル

ウルマックの外側に位置し、北メソポタミアのアッシュールから北西に約 1,000km 以上に位置する遺跡である(Özgüç 2003: 24)。1925 年に、ベドジフ・フロズニー(Bedřich Hrozný)によって発掘調査が行われ、1,000 枚以上の粘土板文書の出土が確認された。それらは、現在プラハやイスタンブールに保管されている。近年の調査では、1984 年～2005 年までタフシン・オズギュッチ(Tahsin Özgüç)により発掘調査が行われ、2006 年～現在までフィクリ・クラックオール(Fikri Kulakoglu)により継続し調査が行われている(Kulakoğlu 2011: 1013)。

キュルテペは、宮殿や行政区を持つ遺丘と、それを取り囲むように下の町が存在する。遺丘は、直径約 500m、高さ約 20m であり、下の町まで含めると約 50ha 程度の規模である(Sagona and Zimansky 2009: 176 and 227)。遺丘には 18 層の建築遺構があり、初期青銅器時代第 I 期からローマ時代までの層が確認されている(Kulakoğlu 2011: 1014)。キュルテペの遺丘から出土した有名な「アニタの槍先(Anitta's spearhead)」は、上から第 6 層目の建築遺構から出土した遺物である。上から第 7 層目の建築遺構からは、宮殿趾や行政区の出土が確認されており、「ママのアヌム・ヒブリの手紙(the letter of Anum-Hirbi of Mama)」もこの層の行政区から出土している(Orlin 1970: 214)。この第 7 層目は、カールム・カニシュ第 II 層と同時期であると考えられている(Orlin 1970: 215; Orthmann 1980: 380)。

この遺跡の古代名は、アッシリア・コロニー時代においては、カニシュ(Kaneš)、ヒッタイト時代にはネシャ(Neša)と呼ばれた。また、遺丘の北に広がる下の町には、アッシリア・コロニー時代のカールムが広がっており、カールム・カニシュ第 Ia～第 IV 層まで存在する。まず、第 Ia 層は古ヒッタイト時代に入っていたが、まだアッシリア商人が居住しており(Orlin 1970: 210 and 214; cf. Burney 2004: 164)、第 Ib 層が、カールムの最盛期であったと考えられている。最終建築層は火災によって破壊されているが、この建築層が、アッシリア・コロニー時代の最後の層であるとされる(Orlin 1970: Fig. 3 on 215)。また、火災による破壊後は、一時期放棄されたことがわかっている(第 Ic 層)。

第 II 層の始まりは、カールムがこの地に創設された時期である。第 III～

IV 層は、カールム区域の初期の建築層であり、これらの層から文字資料は発見されておらず、詳細は未だよくわかっていない。

表 5.2 キュルテペから出土した青銅製品

Context	Daggers	Knives	Spearheads	Axes	Arrowheads	Tridents	Moulds	Sickles
Settlements in Kärüm II	0	0	0	0	1	1	5	0
Settlements in Kärums II/Ib	1	0	0	7	5	0	9	0
Settlements in Kärüm Ib	0	2	0	3	0	0	7	0
Workshops in Kärüm II	0	0	0	0	0	0	17	1
Workshops in Kärums II/Ib	0	0	0	0	0	0	2	0
Workshops in Kärüm Ib	0	0	0	0	0	0	9	0
Tombs in Kärüm II	0	0	1	6	0	0	0	0
Tombs in Kärums II/Ib	4	0	2	0	0	0	0	0
Tombs in Kärüm Ib	5	0	3	5	1	2	0	0
Palaces	2	0	1	0	0	0	0	0

Context	Chisels	Vessel	Bowls	Spoon	Pins	Bracelet	Rings	Others
Settlements in Kärüm II	0	0	0	0	0	0	0	
Settlements in Kärums II/Ib	0	0	0	0	0	0	0	
Settlements in Kärüm Ib	2	0	0	0	0	0	0	
Workshops in Kärüm II	0	0	0	0	0	0	0	
Workshops in Kärums II/Ib	0	0	0	0	0	0	0	
Workshops in Kärüm Ib	0	0	0	0	0	0	0	
Tombs in Kärüm II	0	0	0	0	5	0	1	Pan
Tombs in Kärums II/Ib	0	7	0	0	2	0	1	Axe-Hammer, Breast cover, Belt buckles
Tombs in Kärüm Ib	0	0	1	3	18	2	2	Bucket
Palaces	0	0	1	0	0	0	0	Scepter, Cup, Goblet

表 5.2 の通り、カールム・カニシュ第 II 層の墓からは、斧タイプ 1～3、槍先タイプ 1a の遺物の出土が確認されている。またその他にも、フライパン、リングの出土も確認された。建物跡からは、鋏、鋳型が、そして、建物に併設された工房跡からは、複数の鋳型と鎌刃の出土が確認されている。

カールム・カニシュ第 Ib 層からは、墓から斧タイプ 1・2・4、短剣タイプ 1b・1c・2、槍先タイプ 1a、鋏、三叉槍、ボウル、バケツ、リール、ピン、リング、ブレスレットの出土が確認されている。建物跡からの出土は、斧タイプ 3、ナイフ、鑿がある。また、鋳型は、建物跡もしくは工房跡からの出土が確認されている。そして、宮殿からは、槍先タイプ 3、ボウル、カップ、ゴブレット、笏が出土した。

特筆すべき点は、墓から出土した斧(タイプ 1・2・4)と建物跡から出土した斧(タイプ 3)が全く異なる形状であることである。これは当時、複数の種類の斧の使用が認められるのは、斧のデザインに階級差があった可能性も考えられる。



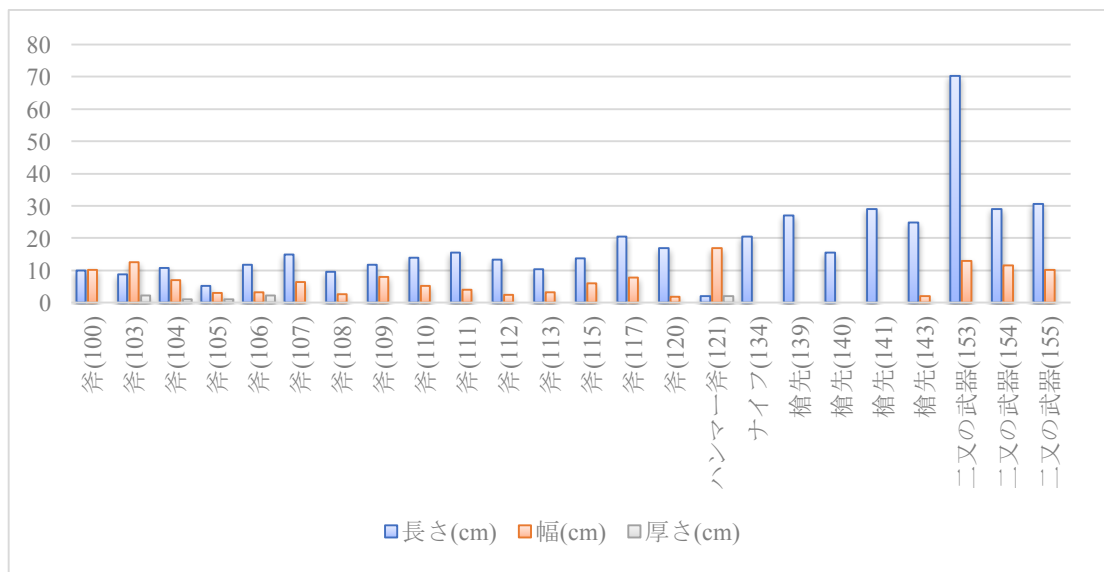


図 5.1 出土した斧、ナイフ、槍先、二又の武器

また、出土した斧、ナイフ、槍先、二又の武器の青銅製品の大きさを表したのが図 5.1 である。これによると、斧の大きさの平均は、長さ 10cm 程度であることがわかる。幅については、若干のばらつきがあるものの、概ね 10cm 未満となっている。また、槍先に関しては、幅の数値がわからないが、長さは、20cm 以上のものが多い。二又の武器については、長さ 30cm 以上と大型のものであることがわかった。

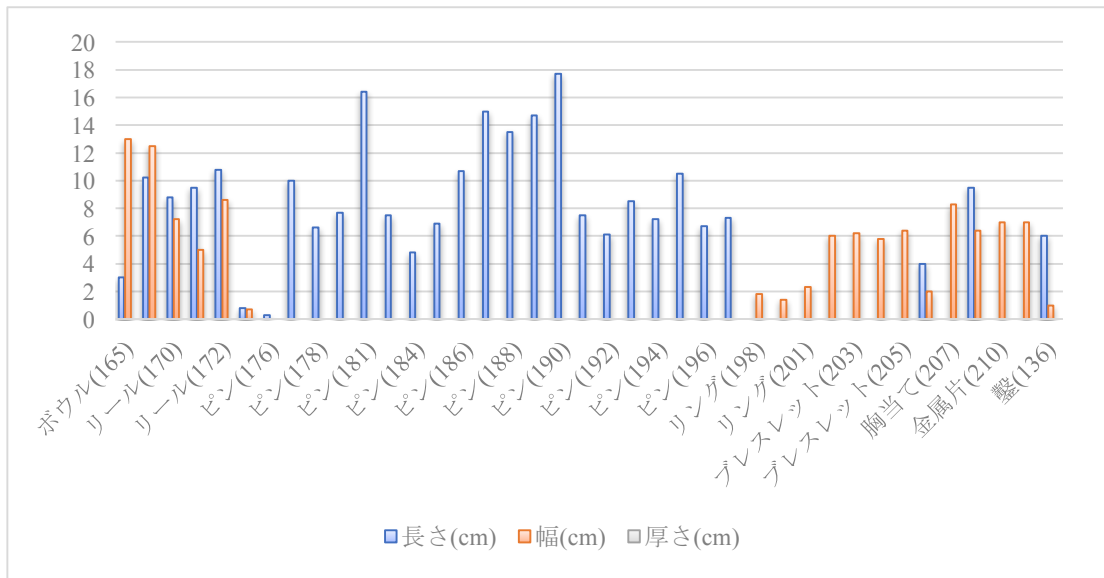


図 5.2 出土した日用品、装飾品

図 5.2 は、ボウル、リールなどの日用品とピン、リング、ブレスレットなどの装飾品についての大きさを表したものである。これによると、ピンの長さが、10cm 以上の長いものと、10cm 以下の短いものに分けることができる。また、リングは 2cm、ブレスレットは、6cm と大きさが明確にわけられた。

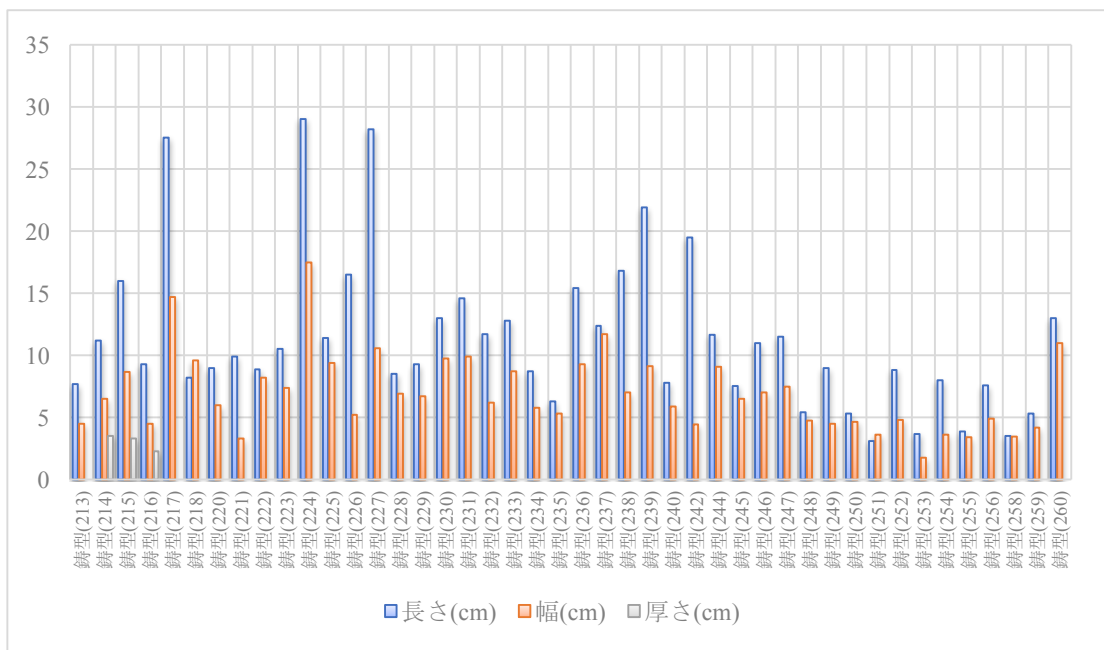


図 5.3 出土した鋳型

図 5.3 は鋳型の大きさを表したものである。キュルテペでは、青銅製品が多数出土しているが、長さが 10cm 以上のものと 10cm 以下のものに区分できる。しかし鋳型は、1 つのものを鋳造する場合と複数の青銅製品を同時に鋳造する場合で、大きさも異なる。そのため一概に大きさだけで比較するというよりは、鋳型の型についての分析が必要である。

#### 5.2.2. カマン・カレホユック (Kaman-Kalehöyük)

カマン・カレホユック遺跡は、アナトリア高原の中央部、首都アンカラからは南東約 100km の地点、アンカラからカイセリの旧街道沿いにあるカマンの町から東に約 3km のところに位置する(大村 1999: 4)。遺跡は、平面上では径約 280m のほぼ円形を呈しており、およそ 6.15 ヘクタールの広さを有し、周辺の平地からその頂上までの高さ(比高)は約 16m あり、円錐台の形状をもつ。アナトリア高原では、中程度の規模の遺跡であるといえる(同上)。

この遺跡の発掘調査は、アナトリア考古学研究所の所長である大村幸弘博士を中心に、1985 年に遺跡の地形測量と表面に散布している遺物の採集を主な目的とする予備調査から始まる。1986 年に本格的な発掘調査に着手された以来、現在まで調査を継続している。

アッシリア・コロニー時代は、遺丘の第 IIIc 層に相当する。第 IIIc 層は、カールム・カニシュ第 1b 層に相当する火災を伴う破壊層が確認されている(大村 2004: 151-3)。また、カールム・カニシュ第 II 層に相当する層の上層部も確認されつつあるが、未発掘のままである。

カマン・カレホユックでは、遺丘の発掘調査が進められている。地中探査調査によって、遺丘の裾野北部地域に多数の居留地が確認された。その居留地は、遺丘の東部に位置しており、その墳丘部から南側へ約 300m の広がりを見せる(Kumagai *et al.* 2006: 204-5, Fig. 1 on 203)。このことから、今後の発掘調査において下の町も発見される可能性があると考えられている。

カールム・カニシュ第 1b 層に相当する層から出土した遺物は、全て遺丘の建物跡の焼土層から出土している。出土遺物の種類は、短剣タイプ 1a・1b・1c、槍先 1a・1b、鎌刃、錐、針、ピン、リング、スタンプ、ピンセットである。

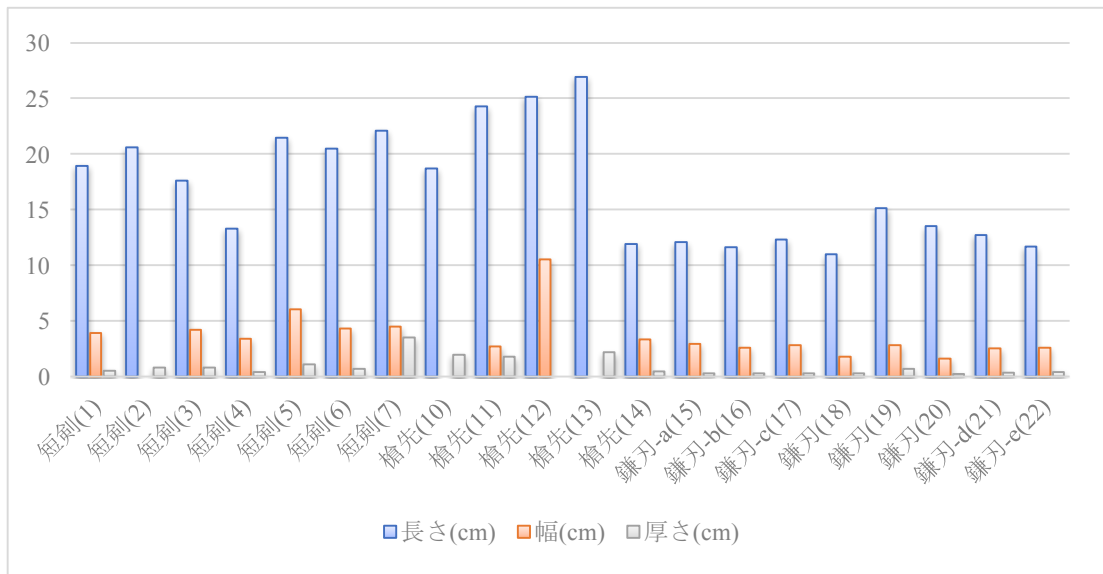


図 5.4 出土した短剣、槍先、鎌刃

図 5.4 は、出土した短剣、槍先、鎌刃の大きさを表したものである。特筆すべきは、鎌刃についてである。鎌刃 a、鎌刃 b、鎌刃 c は、重ねて保管されていたものである。また、鎌刃 d、鎌刃 e も同様に、重ねて保管されていた。これらの大きさを比べると、若干の誤差はあるものの、ほとんど同じ大きさであった。このことから、同じ鋳型で作られた可能性が非常に高いと想定される。

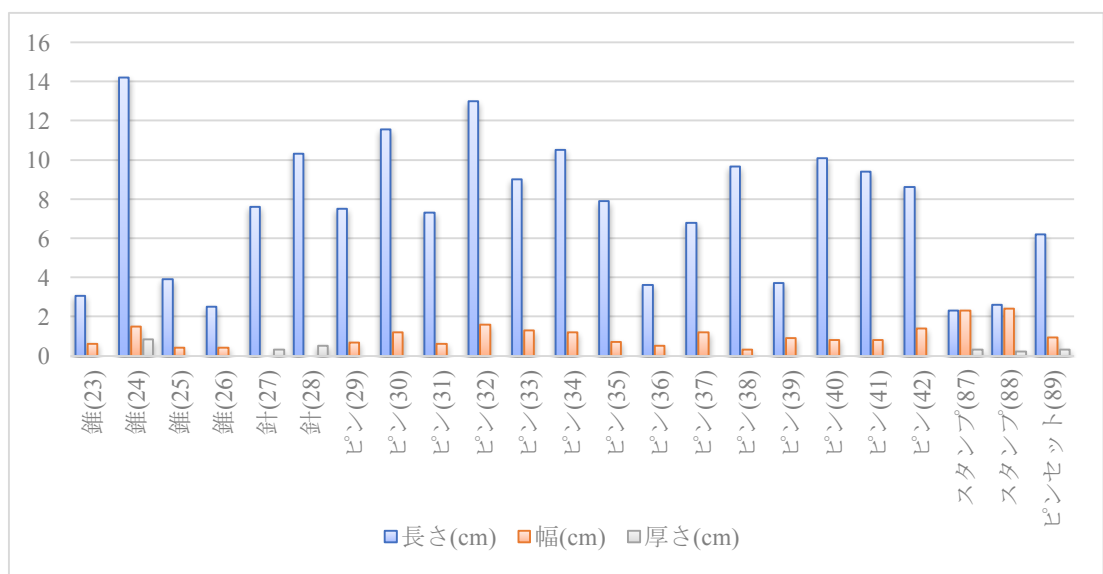


図 5.5 出土したピン、スタンプ等

図 5.5 は、出土したピン、針、錐、スタンプ、ピンセットの大きさを表したものである。この表によれば、ピンと針の大きさが類似している点と、スタンプの規格が似通っている点が挙げられる。スタンプの場合、同じ鋳型で鋳造し、印面のみ違う絵柄を彫った可能性が高い。

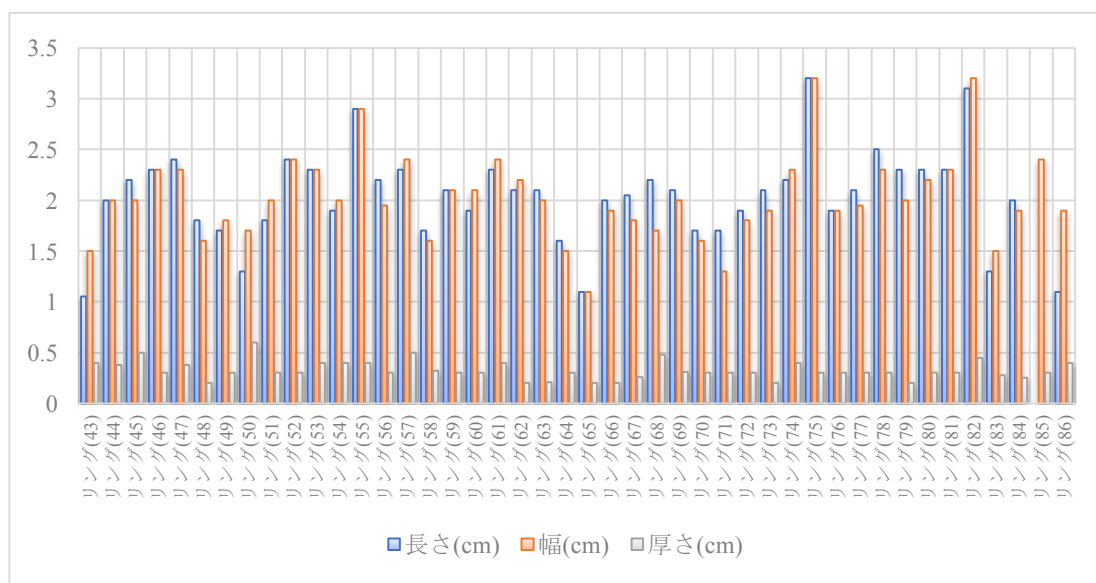


図 5.6 出土したリング

図 5.6 は、出土したリングの大きさを表した図である。これによれば、リングの大きさは、2cm 程度のものがほとんどで、厚さも均一であることがわかる。

### 5.2.3. ヤッス・ホユック (Yassihöyük)

アンカラから約 170km、カマン・カレホユックから東へ約 30km に位置する遺跡である。アナトリア考古学研究所研究員の太村正子博士により、2009 年から本格的な発掘調査が開始され、現在も発掘調査が進められている。遺丘は、約 500m×約 625m、高さ 13m であり、キュルテペやアジェム・ホユックと同規模の遺跡である。また遺丘は、エリア 1 (Area 1) とし、第 I 層鉄器時代、第 II 層中期青銅器時代、第 III 層前期石器時代の大火災を伴う王宮趾の 3 つの層にわけている (Japanese Institute of Anatolian Archaeology : Yassi Höyük 2012)。アッシリア・コロニー時代に該当する層は、遺丘ではまだほと

んど詳細が分かっていない(同上)が、地中探査の結果から遺丘の北西側に「下の町」の建築層も確認されている(同上)。

2018年の第10次発掘調査では、下の町の本格的な発掘調査が開始された(同上)。遺丘の北西部に位置する建物群は、3層からなり、第1層では覆土から鑿、ピン、槌頭片、測り皿の出土が確認されている(同上)。第2層、第3層の発掘は未だ発掘がほとんど進んでいないが、第3層には、焼けた煉瓦や炭化物の小片が混じった焼土が確認されている(同上)。しかし、それらの層がカールム・カニシュのどの層に属するのかは未だ明らかにされていない。

この遺跡の古代名は、バージャモビック(Gojko Barjamovic)により、カールムもしくはワバルトゥムの1つの町である「マリッタ(Malitta)」ではないかと指摘されている(Barjamovic 2011: Tab. 39 on 411)。また、クルシェヒル(Kırşehir)とカマンの町の間に位置すると考えられている(同上)。これら、遺跡の位置関係や、規模などから「マリッタ」であった可能性は否めないが、今後の調査によってより詳細が明らかになっていくだろう。

#### 5.2.4. アリシャル・ホユック(Alişar Hüyük)

アンカラから東に200km、ボアズキョイから南東に約85km、キュルテペから北に約73km、クズルウルマック川に囲まれた地域に位置する中央アナトリアの遺跡である(Joukowsky 1996: 169)。キュルテペからボアズキョイに向かう交易ルート上に位置していたと考えられている(Özgüç 2003: 24)。またこの遺跡の古代名は「アムクワ(Amkuwa)」と特定されており、ワバルトゥムの1つであった。更にヒッタイト帝国時代に、その地名が使用されていたことも明らかになっている。しかし、アッシリア・コロニー時代に使われていたかは定かではない(Joukowsky 1996: 170)。遺丘からは古アッシリア語で記載された粘土板文書が63点確認されている(Barjamovic 2011: 312-6)。

この遺跡は1927～1932年までの間、シカゴ大学東洋研究所のホン・ダー・オステン(Hans Henning von der Osten)やシュミット(Erich F. Schmidt)を中心として発掘調査が行われ遺丘部分とその隣のテラス部分の発掘調査が行われた(Joukowsky 1996: 170; Sagona and Zimansky 2009: 176)。その後1992年にアリシャル地域プロジェクト(The Alishar Regional Project)の一環としてゴ

ーニー(Ronald Gorny)によって発掘調査が再開された(Michel 2011: 316)。

この遺跡の年代幅は紀元前 3 千年紀から紀元後 18 世紀にまでおよび、建築層は 14 層ある(Orlin 1970: 216)。しかし、発掘調査当時、建築層が大まかに分けられた為、遺物の年代も大まかにしか把握できないといった問題点を抱えている(Joukowsky 1996: 170)。例えば、10T(Terrace)層<sup>99</sup>は、紀元前 2 千年紀の層であることは明確であるが、それがアッシリア・コロニー時代に属するのか、ヒッタイト帝国時代に属するものなのかは明確にわかっていない。つまり、出土遺物のだいたいの年代はわかったとしても、詳細は判断できないのである。この建築層の再考は、メラート(James Mellaart)によって試みられた。しかし、オリジナルの発掘調査報告書に不明瞭な点が多かったため困難を極め、少なくとも 10T 層の火災を伴う破壊層はカールム・カニシュ第 Ib 層と同時期であるという見解に留まった。

表 5.3 アリシャル・ホユックから出土した青銅製品

Context	Daggers	Knives	Spearheads	Socketed points	Arrowheads	Awls	Sickles	Stamps	Needles	Pins	Bracelets	Rings	
Settlements	10	1	4	4	1	38	2	2	12	50	3	8	Mould, Spatula, Rivets
Burials	1	0	0	0	0	1	0	0	0	3	0	4	

表 5.3 は、アリシャル・ホユックから出土した青銅製品である。出土した遺物の内、年代が確定できるものはカールム・カニシュ第 Ib 層のみである。出土遺物の中には、短剣タイプ 1a、タイプ 1b、タイプ 1c、タイプ 2 は、建物跡から出土し、タイプ 3 のみ墓から出土している。槍先は、タイプ 1a、タイプ 1b、タイプ 2 は建物跡から出土が確認されている。また、ピン頭の種類が豊富で、タイプ 5 以外の 9 種類の出土が確認されており、それらのほとんどは建物跡から出土している。例外として、タイプ 4 とタイプ 7 が墓から出土した。

<sup>99</sup> この 10T 層からは、アッシリア・コロニー時代に属する 1 枚の粘土板文書の出土も確認されている。

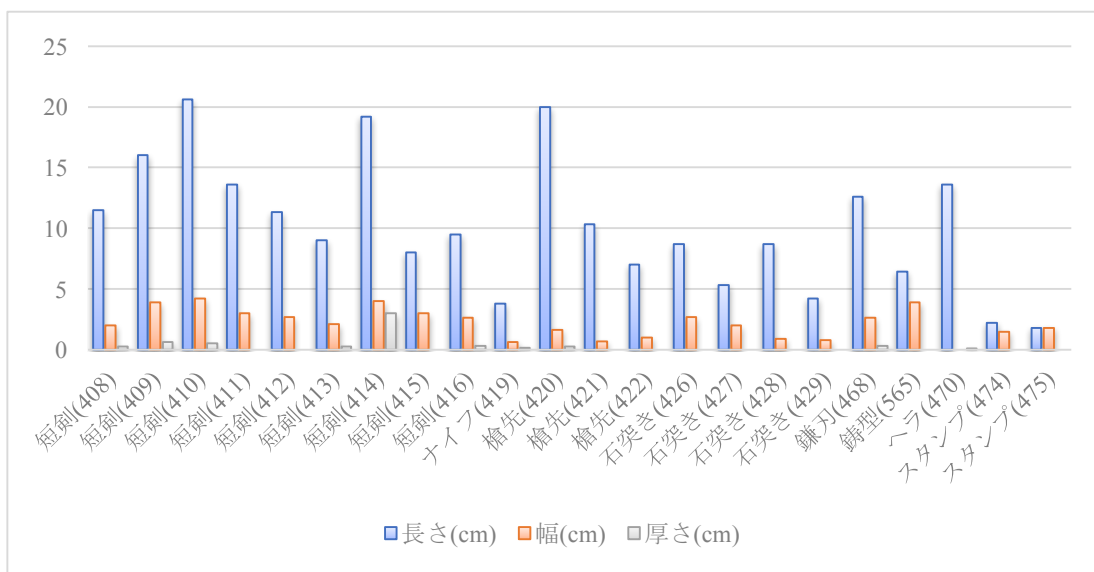


図 5.7 出土した短剣、槍先等

図 5.7 は、出土した短剣、ナイフ、槍先、石突き、鎌刃、鋳型、へラ、スタンプの大きさを表したものである。この表から、短剣の幅に類似点があることがわかる。また、スタンプの形状は、カマン・カレホユックの例と同様に、規格化されていたと考えられる。

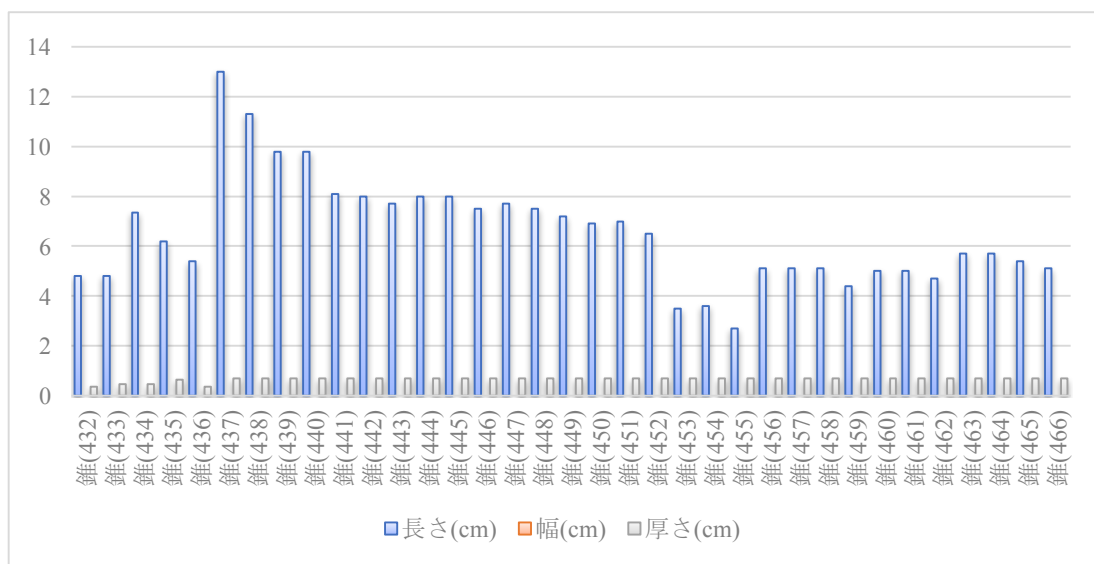


図 5.8 出土した錐

図 5.8 は、出土した錐の大きさを表したものである。長さは、5cm から 8cm



の間に集中しており、幅は、1 cm 程度で統一されていることがわかる。

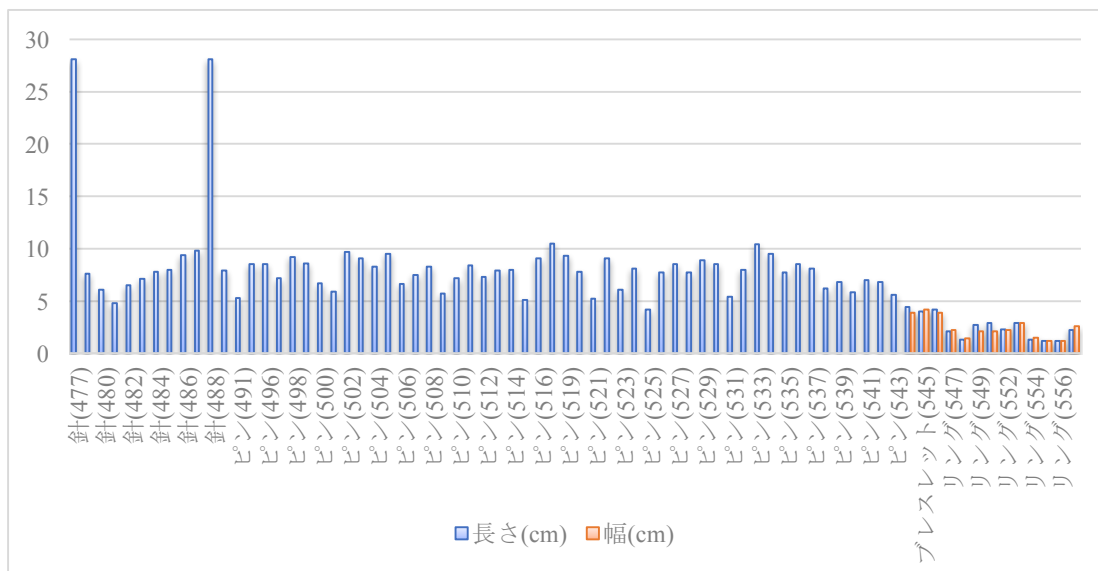


図 5.9 出土した針、ピン、リング、ブレスレット

図 5.9 は、出土した針、ピン、リング、ブレスレットを表したものである。針とピンは基本的には長さが 5cm から 10cm 程度に統一されているが、一部の針は、約 28cm と極端に長いものはある。これについては、布を留めたり、布を縫うような作業とは別の用途で使用されていた可能性もある。また、ブレスレットについては、出土例全てが規格化されたように類似していた。

#### 5.2.5. ボアズキョイ (Boğazköy)

アンカラの東約 150km、キュルテペの北約 124km に位置し、クズルウルマック川の内側にある遺跡である (Bittel 1983: 7; Özgüç 2003: 24)。この遺跡は、北に位置する「下の町」と南に位置する「上の町」、更に北東に位置するブユッカレ (Büyükkale) と呼ばれる王宮や行政区があったと考えられている。また「大城塞」は、その区画のみ城壁に囲まれていた。この遺跡は、広大な範囲を城壁によって囲まれていることが発掘調査から明らかにされている。この遺跡には、アッシリア・コロニー時代のカールムが存在したことが確認されている。当時の呼び名はハットウシュ (Hattuš) と呼ばれ、その後のヒッタイト時代にはハットウシャ (Hattuša) と呼ばれていた。

発掘調査は、1893 年～1894 年にアーネスト・チャンター(Ernest Chantre)が試験的にボアズキョイにトレンチを入れたことから始まった。その後、1906 年～1951 年までは、戦争や不景気から休止期間を挟みながらもドイツ隊により調査が進められた。

ヒューゴ・ヴィンクラー(Hugo Winckler)らによって第 1 回目の発掘調査が行われたのは 1906 年であり、その後 1907 年、1911 年～1913 年まで行われた。1931 年には、クルート・ビッテル(Kurt Bittel)によって調査が再開された。1978 年～1993 年までは、ピーター・ネーヴ(Peter Neve)により、その後 1994 年～2005 年までユルゲン・ゼーハー(Jürgen Seeher)により調査が進められた。2006 年～現在までは、アンドレアス・シアハナー(Andreas Schachner)により調査が行われている(Mielke 2011: 1032-4)。

アッシリア・コロニー時代の建築層は、ブユッカレ第 IVd 層(Büyükkale IVd)、北西斜面の第 8a 層、下の町の第 4 層が相当する(Bittel 1983: table on 242)。この中でもカールムは下の町に相当するため、研究対象となる層序は、下の町第 4 層である(Bittel 1983: 60)。この下の町第 4 層では、アッシリア・コロニー時代に相当する粘土板文書は遺跡内の至るところで出土が確認されている(Orlin 1970: 217-20)。例えば、ブユッカレ第 IVd 層からは 3 枚の粘土板文書が、下の町第 4 層からは 4 枚の粘土板文書<sup>100</sup>の出土が確認されている(Orlin 1970: 218)。また、発掘調査において下の町がカールム・カニシュ第 II 層まで存在していたが、カールム・カニシュ第 II 層から出土した粘土板文書内では、当時のボアズキョイに関する記載は未だ確認されていない(Orlin 1970: Fig. 4 on 219)。更にカールム区域は、下の町の第 4 層として一括で取り上げられることから、ボアズキョイの出土遺物は、カールム・カニシュ第 Ib 層と第 II 層に分けて考えることは難しい。

ボアズキョイのカールム・カニシュ第 Ib 層及び第 II 層に相当する層から出土した遺物は、短剣タイプ 1a、タイプ 1b、タイプ 2、槍先タイプ 1b、タイプ 3、鏃、錐、鑿、ナイフ、鎌刃、ピン、針、リング、ピンセット、鋳型である。

---

<sup>100</sup> 下の町から出土した 4 枚の粘土板文書は、カールム・カニシュ第 Ib 層に相当する層からの出土が確認されている(Bittel 1983: 64)。

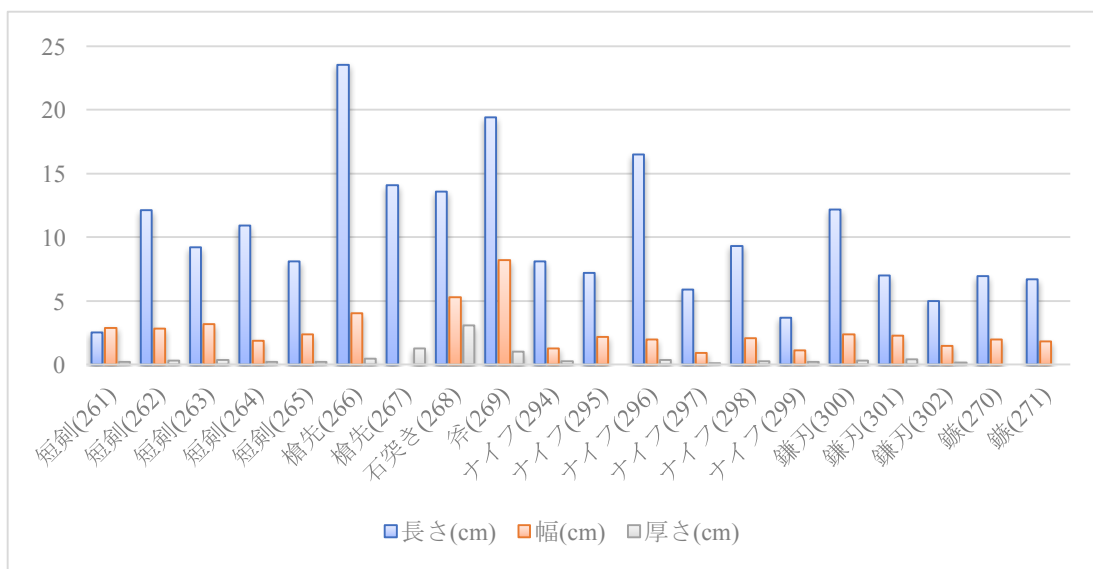


図 5.10 出土した短剣、槍先、ナイフ、鎌刃等

図 5.10 は、出土した短剣、槍先、石突き、斧、ナイフ、鎌刃、鍬の大きさを表した図である。短剣の幅は 3cm 程度であり、長さが 10cm 程度であることがわかる。また、鍬については、規格が同じため、同じ鋳型で鋳造されていたと考えられる。しかしナイフと鎌刃は、形状は類似するが、大きさが異なるため、違う鋳型で鋳造されていたと考えられる。

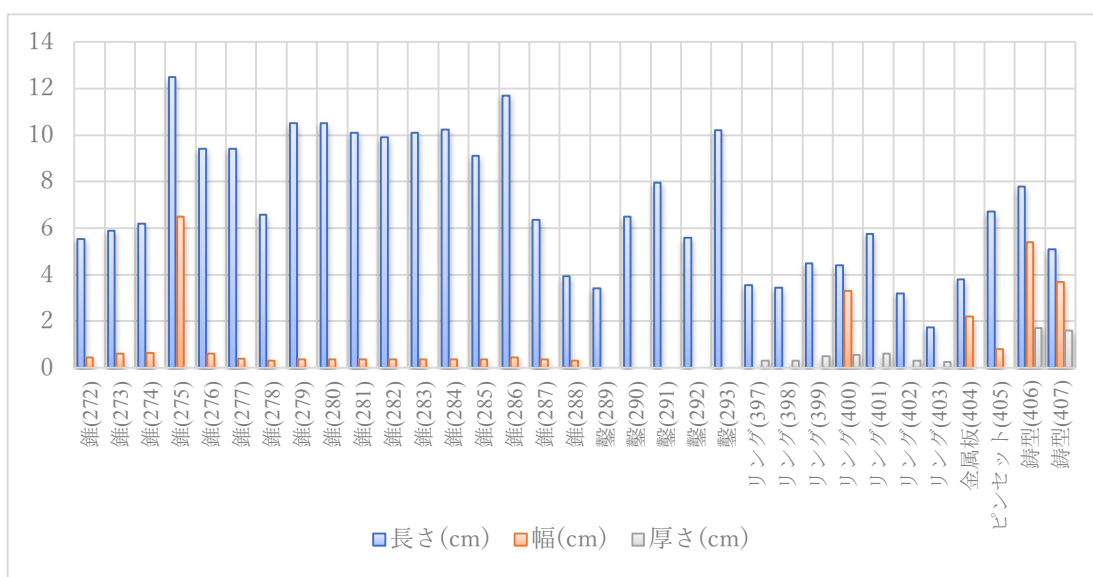


図 5.11 出土した鍬、リング等

図 5.11 は、出土した錐、鑿、リング、鋳型等の大きさを表したものである。特筆すべき点は、錐の長さは、5cm 程度のものと 10cm 程度のものに大きく分類されていることがわかる。

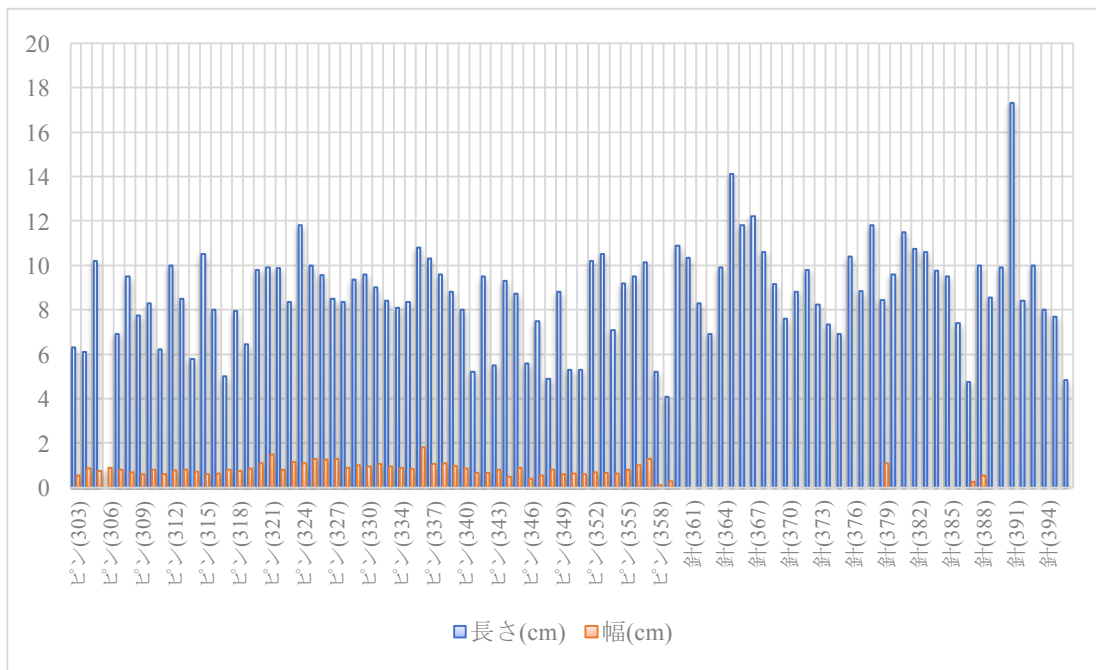


図 5.12 出土したピン、針

図 5.12 は、出土したピンと針の大きさを表したものである。図のように、ピンと針の規格は、概ね 10cm 程度のものが大多数であることがわかる。

#### 5.2.6. アジェム・ホユック (Acem Höyük)

中央アナトリアのトゥズ湖(Tuz Gölü)の南、アクサライ(Aksaray)の町から北西に約 18km に位置しており、約 45.5ha の遺丘とその周囲を囲むように遺跡が存在している。発掘調査は 1962～1988 年までアンカラ大学のニメット・オズギュッチ(Nimet Özgüç)が行い、その後 1989 年から現在までアリ・オズタン(Aliye Öztan)が継続して発掘調査に携わっている(Michel 2011: 316)。

遺丘は、12 層から構成されており、その中の第 3 層と第 4 層がアッシリア・コロニー時代を含む中期青銅器時代の層に相当するとされている。遺丘

の南東に位置するサルカヤ(Sarıkaya)<sup>101</sup>と北西に位置するハティプラー(Hatipler)という2つの宮殿趾は、カールム・カニシュ第1b層と同時期である(Michel 2011: 316)。この2つの宮殿趾は火災を伴う破壊を受けている(同上)。また、文字資料などの出土は確認されていないが、封泥と印影が上記の宮殿から発見されたことにより年代が決定付けられた。その他にも宮殿趾から青銅製品などの出土が確認されている(Michel 2011: 316)。古代名は、キュルテペからの距離からプルシャンダ(Purušhanda)もしくは、ウラマ(Ulama)であると考えられている(Blasweiler 2014: 21)。

アジェム・ホユックの層序については、宮殿趾から出土した遺物は、カールム・カニシュ第1b層に相当する層から出土したことは明らかである。出土例としては、宮殿から斧タイプ1、タイプ2aの出土が確認されている。

### 5.3 南東アナトリアの遺跡

#### 5.3.1. リダル・ホユック(Lidar Höyük)

リダル・ホユックは、南東アナトリアのサンウルファ(Sanlıurfa)県リダル村の南西23kmに位置する(The Archaeological Settlements of Turkey - TAY Project: Lidar Höyük 2011)。現在は、アタチュルクダムの底に沈んでいる為、遺跡を目にすることはできない(同上)。遺丘の規模は、200x240mで裾野から25mの高さであり、遺丘の北東と南西には広範囲にわたりテラスが広がっている(同上)。遺丘は台形で、上部には100x110mの平坦部が広がっている(同上)。

この遺跡は1977年に発見され、1979年からダムに浸水した1987年までドイツの考古学研究所とハイデルベルグ大学が共同で発掘に携わった(同上)。初期青銅器時代の層は、北西と南西の階段状の溝によって明らかにされた(同上)。

調査では、新石器時代、ハラフ期、前期・中期青銅器時代、鉄器時代、ヘレニズム時代、中世までの層が明らかになっている(同上)。特に、前期青銅器時代の層が豊富で、14の建築層が11m程堆積している(同上)。

---

<sup>101</sup> 年輪年代法の結果から前1777年もしくは前1774年頃の建築物であるという結果がでている。

出土遺物の内、鋳型は建物跡から出土したが、それ以外のリング、ピン、錐、針などは、全て墓から出土している。

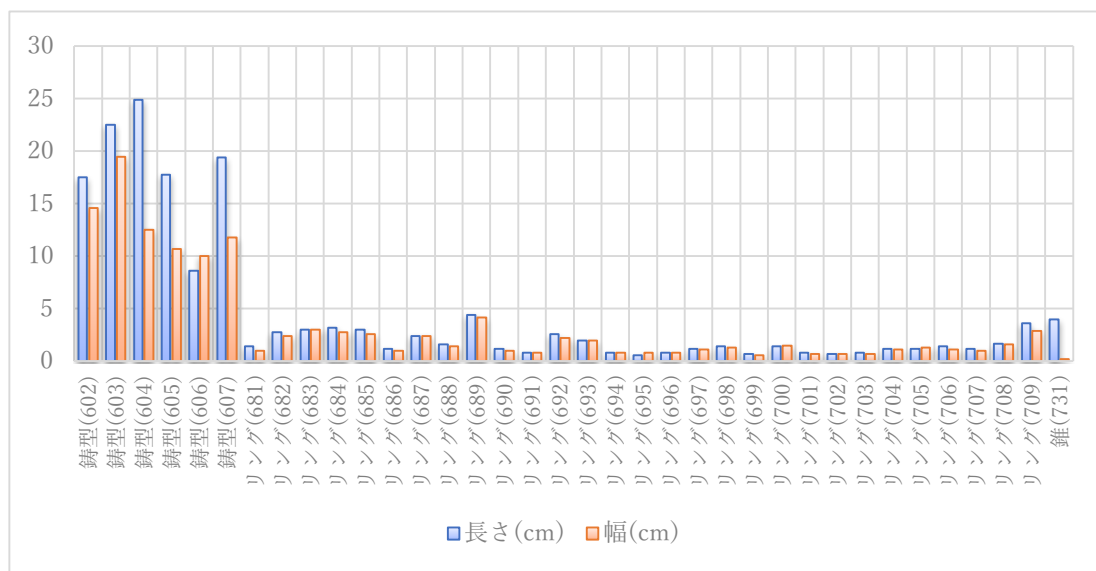


図 5.13 出土した鋳型、リング等

図 5.13 は、出土した鋳型、リング、錐の大きさを表した図である。この図からもリングの大きさが概ね 2cm 程に統一されており、規格化されていたことと想定される。

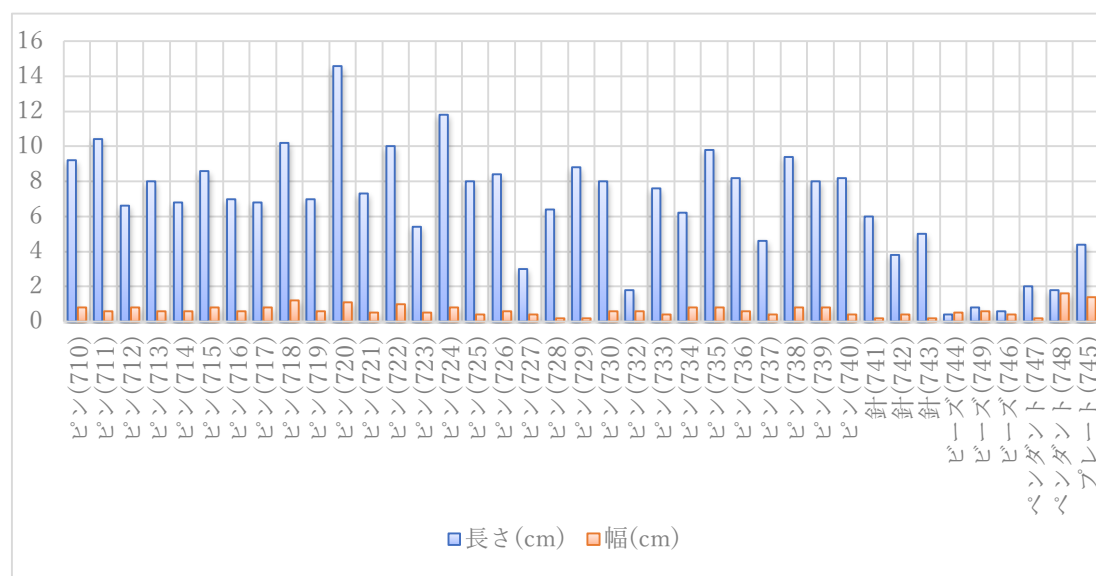


図 5.14 出土したピン、針等

図 5.14 は、出土したピン、針、プレート、ペンダント、ビーズの大きさを表したものである。特にピンの長さが 7cm 程度、幅 1cm 程度に統一されているのが特徴である。

### 5.3.2. ヒルベメルドゥン・テペ(Hirbemerdon Tepe)

ヒルベメルドゥン・テペは、ディヤルバクルの南東約 100km、ティグリス川の右岸に位置する(Laneri 2016: 11)。遺跡は、住居及び大きな複合建築の出土した遺丘(High Mound)とそれを取り囲むようにある外の町(Outer Town)で構成される(Laneri 2016: 14 and 41-2)。また遺丘の北側は涸れ谷によって遮られている(Laneri 2016: 11)。

この遺跡は、1989 年に G.アルガゼ(Algaze)の調査で発見された。その後は N.ラネリ(Laneri)のチームによって 2002 年に再訪され、2003 年に発掘が始まる。Hirbemerdon Tepe Archaeological Project は 10 年間続き、2012 年に終了した。

調査で新石器時代からセルジューク時代までの遺物が確認された。最も重要な層は、前 3 世紀後半から前 2 世紀半ばにかけてで、遺丘全体で赤色磨研土器が多く出土している。これまでに以下の 7 つの層が確認されており、層によっては英語の小文字で細分化されている。建築層は以下の通りである。

第 I 層：銅石併用時代(前 4 千年紀前半)、第 IIa 層：EBA I(前 3100 年～前 2750 年)と EBA II(前 2750 年～前 2500 年頃)、第 IIIa 層：EBA III / IV(前 2500 年～前 2000 年頃)、第 IIIb 層：MBA I(前 1950 年～前 1750 年頃)、第 IIIc 層：LBA(前 1550 年～前 1350 年頃)、第 IVa 層：初期 IA(前 1150 年～前 900 年頃)、第 IVb 層：IA(新アッシリア、前 900 年～前 610 年頃)、第 V 層：IA 後期(前 610 年～前 610 年頃)、第 VI 層：中世(11～13 世紀頃)、第 VII 層：オスマン時代(18～19 世紀)。

出土遺物の鋳型は、遺丘のメインストリート No. 47 と No. 37 の近くの埋土から出土したことが確認されている。これらの埋土の年代は、共伴遺物から前 2 千年紀に相当する第 IIIb 層から出土したことがわかっているのみである(Laneri 2016:72)。

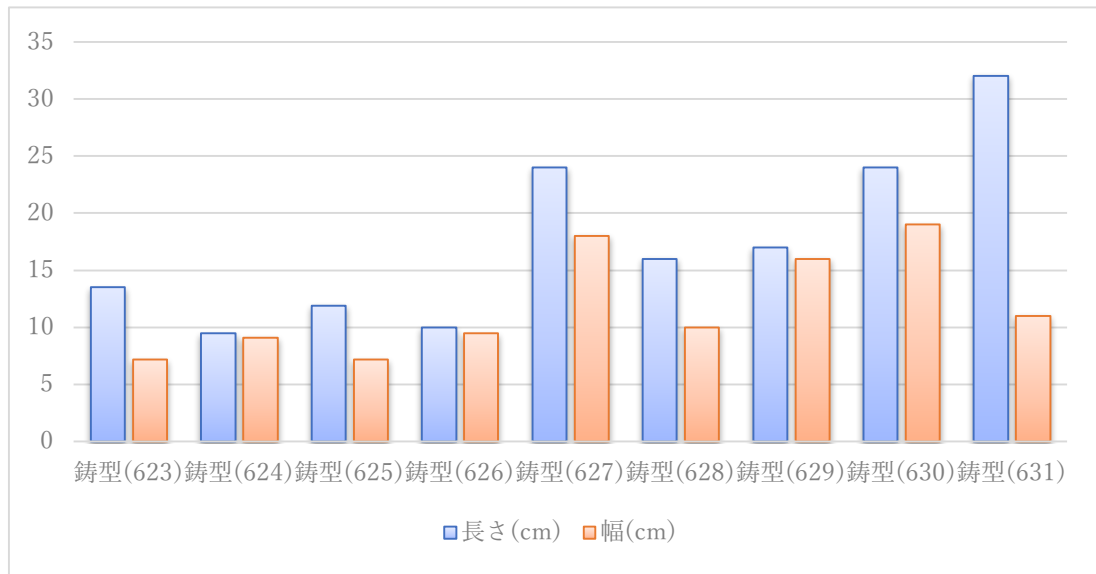


図 5.15 出土した鋳型

図 5.15 は、出土した鋳型の大きさを表した図である。この図によれば、鋳型の大きさは画一化されていないことがわかる。またそもそも鋳型は、青銅製品を鋳造する道具であることから、鋳型そのものを統一する必要はなく、その鋳型で何を鋳造したかがより重要になってくる。

### 5.3.3. ウチュテペ・ホユック (Üçtepe Höyük)

この遺跡は、チグリス川上流域右岸、ディヤルバクル(Diyarbakır)の南東 40km、ビスミル(Bismil)の南西 10km、ウチュテペ村(Üçtepe village)の西に位置する。発掘調査は、1865 年ディヤルバクルの英国領事館の J. G. テイラー(John George Taylor)により進められた。その後、1907 年アメリカ人のアッシリア学の学者である A. T. オルムステッド(Albert T. Olmstead)により調査が継続され、1998 年に調査が終了した(Özfırat 2005: 45)。

遺跡の規模は、遺丘で、頂上部分は直径 200m、裾野部分を含めると、直径 400m、高さ 44m である。建築層は、ローマ帝国時代から初期青銅器時代の後半までの 13 層が確認されている。ただし、この遺跡は処女層まで発掘調査が完了しておらず、処女層は、初期の金石併用時代にまで時代が遡ると考えられている(Özfırat 2005: 46)。中期青銅器時代の建築層は、第 11 層にあ



たると考えられ、そこには 7×17.5m の建築遺構が確認されている。これは、南北に走る一本の長い廊下で、遺丘の南西部分に広がる巨大な建築遺構の一部であると考えられている。廊下の基礎部分は、玄武岩で出来ており、一部は石敷きの床面が残存している<sup>102</sup>。壁は薄く、日干し煉瓦で造られている。オズフィラット(Aynur Özfiat)は、アッシリア・コロニー時代の中央アナトリアの宮殿趾と類似のものである可能性を指摘する(Özfiat 2005)。この巨大な建築遺構の廊下の西壁を利用して、2つの部屋が残存している。北の空間は、2×0.75m の廊下のような細長い部屋であり、上の階へ行くための空間であったと考えられている。しかし、上階だと考えられる層は、ピットにより破壊されており、詳細は不明である。部屋の出入り口は廊下の床面から一段高くなっており、南端には柱の軸穴が残存している。このような、薄い日干し煉瓦の壁を伴う細く長い空間は、アッシリア・コロニー時代のキュルテペの南のテラス宮殿(South Terrace Palace)<sup>103</sup>やマリのジムリ・リム(Zimri lim)の宮殿などが類似の建築遺構を持つと考えられている(Özfiat 2005: 50)。

出土遺物は、主に廊下の床面や巨大な建築遺構の床面から出土している。中期青銅器時代のウチュテペ・ホユックの土器の特徴は 1)Red Brown Wash Ware 2)Dark Rimmed Orange Ware 3)Khabur Painted Ware 4)その他(Özfiat 2005: 50)の 4 種類に分類されている。この中でも、1)Red Brown Wash Ware の出土により、この層が中期青銅器時代の建築遺構であると推定される(Özfiat 2005: 55)。また土器片は、北シリア及び北メソポタミアから出土した土器片に類似している傾向がみられる(Özfiat 2005: 54)<sup>104</sup>。その他の出土遺物としては、この層からはテラコッタ製品が多く出土しており、馬蹄型テラコッタ製品 1 点、テラコッタ製動物小立像 2 点、テラコッタ製スタンプ印章 4 点、テラコッタ製織り機の重り 1 点の出土が確認されている(Özfiat 2005: 53-4)。更に、四角柱の延べ棒 2 点、骨製品 3 点(トグルピン、針、円筒のリング)、青銅製の針 1 点(断面は丸く、頭部に小さな穴が空いている)、鉛製の小立像 1 点、石製品(玄武岩)のすり鉢 5 点、石製の乳棒 4 点、石製のボ

<sup>102</sup> また、この建築層からは焼土層も出土している。

<sup>103</sup> ワルシャマ宮殿 (Warshama Palace) の一部である。

<sup>104</sup> ここで注目すべき点は、ハブール土器が出土したにも関わらず、ハブール土器文化圏には属さないことである(Özfiat 2005: 54)。

ウル 1 点、石製のランプ 1 点の出土が確認されている(Özfirat 2005: 54)。青銅製の針は、巨大な建築遺構の回廊部分からの出土であった(Özfirat 2005: Resim 10 on 20)。

発掘者であるオズファラット(Özfirat 2005: 55)は、ウチュテペ・ホユックがアッシリア商人による交易ルート上にあったにも関わらず、この時期、中央アナトリアとの交流が盛んであったわけではないと指摘している点は不可解な点である。

## 5.4 北シリアと北メソポタミアの遺跡

### 5.4.1. テル・アルビッド(Tell Arbid)

テル・アルビッドは、ハブール盆地の中心部シリア北東部に位置する。総面積は、38ha 以上で、高さは 30m であり、城塞、遺丘、下の町の他に少なくとも 4 つの小さい丘が存在する(Polish-Syrian Archaeological Expedition to Tell Arbid 2017)。1930 年代に Max Mallowan によって発掘調査が進められ、その後 Bertille Lyonnet によって更なる調査が進められた(同上)。1996 年にポーランドとシリアの調査隊が共同で調査にあたり、2008 年には、Rafał Koliński によって調査が継続された(同上)。

アッシリア・コロニー時代に相当する層は、Old Jezirah I-II(前 2000 年頃～前 1800 年頃)が、カールム・カニシュ第 II 層にあたり、Old Jezirah III(前 1800 年頃～前 1500 年頃)がカールム・カニシュ第 Ib 層に相当する。特にカールム・カニシュ第 II 層に相当する層から出土した遺物は、短剣タイプ 2 と斧タイプ 2a が墓からの出土が確認されている(Koliński 2012: Fig. 8 on 548)。

### 5.4.2. テル・バリ(Tell Barri)

テル・バリは、シリア北東部のアルハサカ県に位置し、ハブール川の支流沿いに位置する。遺丘の規模は、37ha、高さ 32m である。1980 年に、フィレンツェ大学のイタリア考古学者チームのパオロ・エミリオ・ペコレッラ(Paolo Emilio Pecorella)とミルホ・サルビニ(Mirjo Salvini)を中心に発掘が開始された。2006 年以降は、ラファエラ・ピエロボン・ベノワ(Raffaella Pierobon-Benoit)が率いるナポリフェデリコ 2 世大学のチームによって発掘が行われ

た。

2000 年の調査では、Area G の Squares A-B 1-6 から (Pecorella 2003: 139-40)、また 2001 年の調査では、Area G Squares A-D 2-4 から前 2 千年紀初頭の遺構が確認されている (Pecorella and Benoit 2004: 165-6)。その中でも特に、Area G Squares C-D 1-6 の Strata 33, 34, A, B, C は、カールム・カニシュ第 Ib 層に相当する層で、更に Area G Squares C-D 1-6 の Stratum 34 D は、カールム・カニシュ第 II 層に相当する層であると考えられている (Pecorella 2003: 140)。カールム・カニシュ第 II 層に相当する層からは、槍先や鏃の出土が確認されている (同上)。

#### 5.4.3. チャガル・バザール (Chagar Bazar)

チャガル・バザールは、シリアの北東部、アダム市の南に位置する。ハブール川や他の支流から流れ込む水によって、肥沃な平野に存在する。北はトラス山脈に、南西は Jebel Abd al-Aziz に、南東は Jebel Sinjar に囲まれている。

この遺跡の発掘は、1934 年にハブール地域北部で M. マロワン (Mallowan) によって最初に発掘された。1999 年以降は、ケンブリッジ大学の調査隊によりチャガル・バザールの発掘が再開された。

マロワンの発掘では、北の丘、中央に前 2 世紀初頭の家屋の広がりが確認された (Area TD, Area BD, Area AB) (McMahon et al. 2009: 26)。また Area TD の部屋からは、粘土板文書、青銅製の道具と武器を伴った比較的豊富な墓などの出土が確認されている (同上)。しかし、マロワンの発掘調査は、発掘方法論なども含め現在より詳細ではなかった為、マロワンの時代の層序と、現在の層序の相対的に表したものが表 5.4 である。

表 5.4 チャガル・バザール Area BD, Area G and Area A の相対表

<i>Mallowan's Area BD</i>	<i>BSAI Area G</i>	<i>BSAI Area A</i>
Latest	Upper material in Phase I? Surface materials?	Latest features in I?
Late	Phase I	I
Intermediate	Phase II/2 and II/1	II
Early Intermediate	Phase III-IV?	III
Early	Phase IV?	

(McMahon *et al.* 2009: Tab. 3.1 on 67)

マロワンの時には、「Early」の時期が、前 2 千年紀初頭だと仮定していたが、現在では、「Intermediate」がその時代に相当すると考えられている (McMahon *et al.* 2009: 66-7)。このことから、Area G でカールム・カニシュ第 Ib 層に相当するのは Phase II/1 で、カールム・カニシュ第 II 層に相当するのは Phase II/2 と考えられる。

Area G のカールム・カニシュ第 Ib 層に相当する層 Phase II/1 からは、建物跡から槍先タイプ 1b、ピンタイプ 3、タイプ 4、タイプ 7 が出土し、墓からも槍先タイプ 1b とリングの出土が確認されている。また、カールム・カニシュ第 II 層に相当する層 Phase II/2 からは、槍先タイプ 1b、ピンタイプ 7、プレートの出土が確認された。更に Area A からは、墓から槍先タイプ 1b、建物跡からピンタイプ 7 とリングの出土が確認されているが、これらをカールム・カニシュ第 Ib 層と第 II 層に分類するのは困難である。

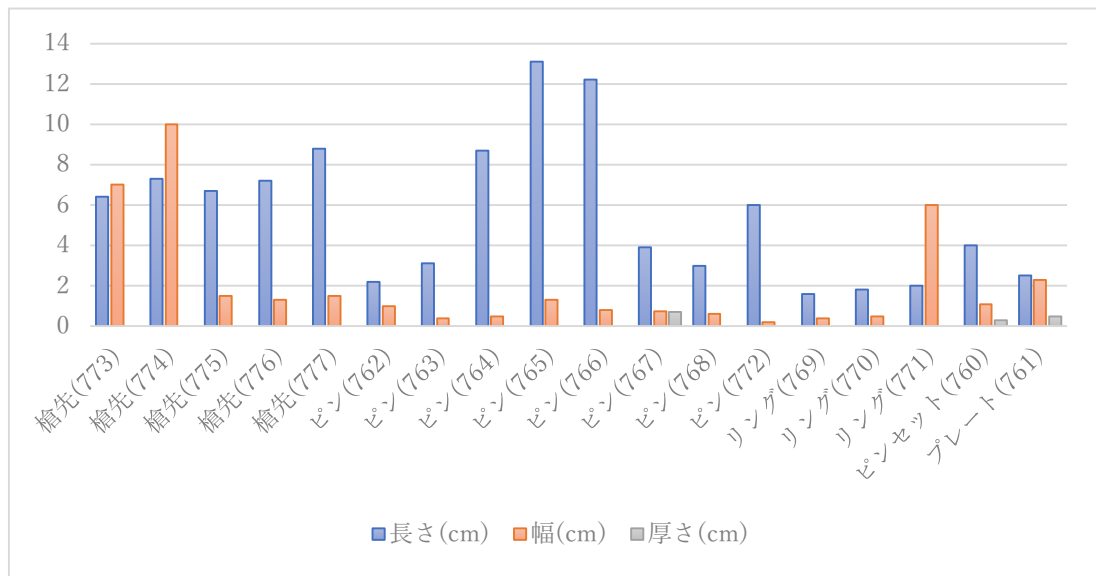


図 5.16 出土した槍先、ピン、リング等

図 5.16 は、出土した槍先、ピン、リング、ピンセット、プレートである。特筆すべき点は、槍先の長さが 6cm から 8cm で統一されているが、幅が 2cm 程度のものと 5cm 以上のものとが存在することである。また、ピンについても極端に長い 10cm 以上のものが確認されている。これは、アナトリアのピンと大きく異なる点である。

#### 5.4.4. アッシュール(Aššur)

アッシュールは、現在のイラク北部、バグダッドの北東約 240km の町カルアトシエルカートに位置する。古アッシリアの遺跡は、最も古いイシュタル神殿と宮殿の一部の基礎が見つかったのみである。その他遺構は新しい建築層によって破壊されている。アッシュールは第 2 章で述べた通り、その他の遺跡で発見された粘土板文書の記述よりその実態が確認できる。その中でも特にキュルテペから出土した文書には、アッシリア商人との詳細な記述が確認できる。しかし、アッシュールのカールム・カニシュ第 1b 層と第 II 層に相当する層は、まだその層の全貌を明らかにする発掘が行われていない為、出土遺物もほとんど見られないが、唯一斧タイプ 2a が墓から出土している。

## 第6章 考察

この章では、カールム・カニシュ第 II 層、カールム・カニシュ第 Ib 層と同時期から出土した遺物の傾向を明らかにするため、それぞれの層ごとに出土遺物の比較を行う。また、これまでの章で論じられてきた、文書資料と考古資料の相違点について考察を試みる。

### 6.1 カールム・カニシュ第 II 層と同時期の遺物

カールム・カニシュ第 II 層に相当する時期は、前述した通り、前 1930 年頃～前 1824 年頃である。また、この層に該当する層の内、交易路沿に該当する遺跡からの出土は、表 6.1.の通りである。注意すべき点として、チャガル・バザールとテル・バツリから出土した遺物の内、破損などで種類が明確でないものは表内に入れていない。

表 6.1 からカールム・カニシュ第 II 層と同時期出土の遺物の特徴は次の通りである。

- 1) どの建築層からも短剣の出土が見られない。例外として、テル・アルビッドの墓からタイプ 2 が 3 点出土している。
- 2) 槍先はカールム・カニシュの墓からタイプ 1a、チャガル・バザールの宮殿跡からタイプ 1b が出土している。
- 3) カールム・カニシュの墓から多種類の斧が出土している。
- 4) カールム・カニシュの工房跡から鎌が出土している。
- 5) カールム・カニシュの工房跡から鋳型が多数出土している。
- 6) カールム・カニシュの墓から出土したピンは、種類がタイプ 4 のみ出土している。

カールム・カニシュ第 II 層に相当する層から出土する遺物の種類は、多くはないが、カールムの墓から多数の斧が出土していることや、ピンの形状が、タイプ 4 に偏っていることなどを考えると、埋葬者をアッシリア商人とした場合、アッシリアで斧が一般的に使用されていたこと、ピンの形状もアッシリア風のものであったこと、などが考えられる。そして、該当する時期

に工房跡から鎌や鋳型が出土していることから、カールム・カニシュで金属加工が行われていたのは間違いない。

表 6.1 カールム・カニシュ第 II 層と同時期にあたる層から出土した遺物

種類	Type	カールム・カニシュ			チャガル・バザール		テル・アルビッド
		建物跡	工房跡	墓	遺丘の建物跡	遺丘の宮殿跡	遺丘の墓
短剣	1a						
	1b						
	1c						
	2						3
	3						
槍先	1a			1			
	1b					1	
	2						
	3						
斧	1			2			
	2a			3			1
	2b			1			
	3						
鋏		1					
二又の武器		1					
ナイフ							
鎌			1				
錐							
鑿							
ボウル							
カップ							
ゴブレット							
フライパン				1			
バケツ							
リール							
石突							
ヘラ							
鋳型		5	17				
ピンセット							
ピン	1						
	2						
	3						
	4			5			
	5						
	6						
	7					1	
	8						
	9						
	10						
針							
小さいリング				1			
プレスレット/アングレット							
スタンプ							
笏							

## 6.2 カールム・カニシュ第 Ib 層と同時期の遺物

カールム・カニシュ第 Ib 層に相当するのは、前 1813 年頃～前 1750 年頃である。表 6.2 は、各遺跡のカールム・カニシュ第 Ib 層と同定される層から

出土した遺物を出土場所ごとに種類別に比較した表である。

まず、遺丘の建物跡から出土した遺物についてみていく。対象遺跡は、中央アナトリアのアジェム・ホユック、ボアズキョイ、カマン・カレホユック、南東アナトリアのリダル・ホユック、ヒルベメルドゥン・テペ、北メソポタミアのチャガル・バザールである。各遺物の出土数の詳細は、表 6.2 を参照のこと。

表 6.2 からカールム・カニシュ第 1b 層出土の遺物の特徴は次の通りである。

- 1) 短剣の出土が見られない。
- 2) 斧はタイプ 2a のみアジェム・ホユックから出土している。
- 3) 鎌は、ボアズキョイとカマン・カレホユックから出土している。
- 4) 鋳型が、ヒルベメルドゥン・テペとリダル・ホユックから出土している。
- 5) ピンタイプ 4 とタイプ 7 がボアズキョイとチャガル・バザールで出土している。

遺丘の建物跡からは、短剣、槍先などの武器に使用したと考えられる遺物の出土が極端に少ない。鎌は、中央アナトリアのボアズキョイとカマン・カレホユックからの出土が確認されていることから、カールム・カニシュ第 II 層の時期から継続して中央アナトリアで使用されていたものであると考えられる。また、南東アナトリアのヒルベメルドゥン・テペとリダル・ホユックから鋳型が出土していることから、これらの遺跡で金属加工が行われていた可能性が高い。また、中央アナトリアのボアズキョイと北メソポタミアのチャガル・バザールで共通するピンのタイプのみが出土したことは、両遺跡が同時期に交流があった可能性を指摘できる。



表 6.2 カールム・カニシュ第 Ib 層と同時期にあたる遺丘・建物跡から出土した遺物

種類	Type	遺丘の建物跡					
		アジェム・ホユック	ボアズキョイ	カマン・カレホユック	リダル・ホユック	ヒルベメルドウン・テペ	チャガル・バザール
短剣	1a						
	1b						
	1c						
	2						
	3						
槍先	1a						
	1b						2
	2			1			
	3						
斧	1						
	2a	1					
	2b						
	3						
鋏							
二又の武器							
ナイフ			1				
鎌			1	3			
錐							
鑿			1				
ボウル							
カップ							
ゴブレット							
フライパン							
バケツ							
リール							
石突							
ヘラ							
鋳型					6	9	
ピンセット			1				
ピン	1		2				
	2						
	3						1
	4		2				1
	5						
	6						
	7		1				3
	8						
	9						
	10						
針			3				
小さいリング							2
プレスレット/アンクレット							
スタンプ							
笏							

次に、遺丘の破壊層から出土した遺物についてみていく。対象遺跡は、中央アナトリアのカマン・カレホユックのみである。各遺物の出土数の詳細は、表 6.3 を参照のこと。

表 6.3 からカールム・カニシュ第 Ib 層の時期にあたる層から出土した遺物の特徴は次の通りである。

- 1) 短剣、槍先の出土が多い。
- 2) 斧の出土がない。
- 3) 鎌・錐の出土が多い。
- 4) ピンセットが壺の中から出土した。
- 5) ピンは、タイプ 1～タイプ 4 のみ出土している。
- 6) 小さいリングが多数出土している。
- 7) スタンプが出土している。

遺丘の破壊層から出土する遺物は他の遺跡からの出土が明確でなく、比較検討することは難しい。しかし、多数の人骨とともに短剣や槍先が出土したという事実は、その時その場で戦いが行われていた証拠にならない(大村 2004: 151-153)。更に、その際に人骨とともに小さいリングが出土したのは、それがイヤリングや指輪といったようなアクセサリーとして使用されていたものである(同上)。また、ピンセットが壺の中で見つかったのは、壺の中の物を摘むために使用されたものであるし、複数の鎌が折り重なって出土したのは、その部屋に鎌が保管されていたことにほかならない。

表 6.3 カールム・カニシュ第 1b 層と同時期にあたる遺丘の破壊層から出土した遺物

種類	Type	遺丘の破壊層
		カマン・カレホユック
短剣	1a	3
	1b	3
	1c	1
	2	
	3	
槍先	1a	1
	1b	3
	2	
	3	
斧	1	
	2a	
	2b	
	3	
鋏		
二又の武器		
ナイフ		
鎌		5
錐		4
鑿		
ボウル		
カップ		
ゴブレット		
フライパン		
バケツ		
リール		
石突		
ヘラ		
鋳型		
ピンセット		1
ピン	1	3
	2	6
	3	2
	4	3
	5	
	6	
	7	
	8	
	9	
	10	
針		2
小さいリング		44
ブレスレット／アンクレット		
スタンプ		2
笏		

更に、遺丘の宮殿趾から出土した遺物についてみていく。対象遺跡は、中央アナトリアのキュルテペ、アジェム・ホユックである。各遺物の出土数の詳細は、表 6.4 を参照のこと。

表 6.4 からカールム・カニシュ第 Ib 層の時期にあたる層から出土した遺物の特徴は次の通りである。

- 1) 短剣、槍先の出土が見られない。
- 2) アジェム・ホユックから斧が出土している。
- 3) キュルテペからボウル・カップ・ゴブレットが出土している。
- 4) ピン、リングの出土が見られない。
- 5) キュルテペから筭が出土している。

遺丘の宮殿趾からは、短剣、槍先などの武器類の出土が確認されていない。また人骨なども確認されていないことから、おそらく、争いなどが宮殿内で起きたということとはなかったと考えられる。更に、ボウル、カップ、ゴブレットなどの出土は少数ながら確認されていることから、これらの青銅製品が宮殿内で使用されていたと考えられるとともに、ピンやリングが確認されていないのは、そこが放棄されたということが考えられる。

表 6.4 カールム・カニシュ第 1b 層と同時期にあたる遺丘の宮殿趾から出土した遺物

種類	Type	遺丘の宮殿趾	
		キュルテペ	アジエム・ホユック
短剣	1a		
	1b		
	1c		
	2		
	3		
槍先	1a		
	1b		
	2		
	3	1	
斧	1		1
	2a		2
	2b		
	3		
鋏			
二又の武器			
ナイフ			
鎌			
錐			
鑿			
ボウル		1	
カップ		1	
ゴブレット		1	
フライパン			
バケツ			
リール			
石突			
ヘラ			
鋳型			
ビンセット			
ビン	1		
	2		
	3		
	4		
	5		
	6		
	7		
	8		
	9		
	10		
針			
小さいリング			
ブレスレット/アンクレット			
スタンプ			
笏		1	

続いて、遺丘の墓から出土した遺物についてみていく。対象遺跡は、中央アナトリアのアジェム・ホユック、南東アナトリアのリダル・ホユック、北メソポタミアのチャガル・バザール、アッシュール、ウチュ・テペである。各遺物の出土数の詳細は、表 6.5 を参照のこと。

表 6.5 からカールム・カニシュ第 1b 層の時期にあたる層から出土した遺物の特徴は次の通りである。

- 1) 槍先は、チャガル・バザールから出土している。
- 2) 斧は、タイプ 2 がアッシュールから出土している。
- 3) チャガル・バザールから壺に入ったピンセットが出土している。
- 4) ピンは、リダル・ホユックからタイプ 4 とタイプ 9 が多数出土している。
- 5) リダル・ホユックから多数の小さいリングが出土している。

チャガル・バザールのピンセットの出土状況は、同時期のボアズキョイからのピンセットの出土状況と同じである(ただしボアズキョイの出土場所は、遺丘の建物跡)。これは、当時のピンセットの用途が現在と同じく、壺などの入れ物から物を摘むためのものであったということである。更に、リダル・ホユックの墓からは、ピンと小さいリングが多数出土しているが、これらは出土状況から墓の埋葬者の副葬品であったと考えられる。

表 6.5 カールム・カニシュ第 1b 層と同時期にあたる遺丘の墓から出土した  
遺物

種類	Type	遺丘の墓				
		アジェム・ ホユック	リダル・ ホユック	チャガル・ バザール	アッシュール	ウチュ・テベ
短剣	1a					
	1b					
	1c					
	2					
	3					
槍先	1a					
	1b			3		
	2					
	3					
斧	1					
	2a				1	
	2b					
	3	1				
鐵						
二又の武器						
ナイフ						
鎌						
錐			1			
鑿						
ボウル						
カップ						
ゴブレット						
フライパン						
バケツ						
リール						
石突						
ヘラ						
鋳型						
ピンセット				1		
ピン	1					
	2					
	3					
	4		14			
	5		1			
	6					
	7					
	8					
	9		6			
	10					
針			3			1
小さいリング			29	1		
ブレスレット／アンクレット						
スタンプ						
笏						

更に、カールム/ワバルトゥム区域から出土した遺物について考察を行う。まず、カールム/ワバルトゥム区域の建物跡から出土した遺物についてみていく。対象遺跡は、中央アナトリアのアリシャル・ホユックのワバルトゥム、キュルテペとボアズキョイのカールムである。各遺物の出土数の詳細は、表 6.6 を参照のこと。

表 6.6 からカールム・カニシュ第 1b 層の時期にあたる層から出土した遺物の特徴は次の通りである。

- 1) アリシャル・ホユックのワバルトゥムとボアズキョイのカールムから共通して、短剣、槍先、鏃、鎌、錐、石突、ピンタイプ 1～タイプ 4 とタイプ 6～タイプ 9、針、小さいリング、ブレスレット/アンクレットが出土している。
- 2) キュルテペとボアズキョイのカールムから共通して、斧タイプ 2b と鑿が出土している。
- 3) アリシャル・ホユックのワバルトゥム、キュルテペとボアズキョイのカールムから共通して、ナイフと鋳型が出土している。

このように、アリシャル・ホユックのワバルトゥムとボアズキョイのカールムからの出土遺物は、遺物の種類の傾向が類似していることが明らかであり、同一の文化圏であった可能性が高い。また、3つの遺跡から共通して鋳型が出土しており、その証拠として、キュルテペのカールムには工房跡が見つかるとともに、そこから多数の鋳型の出土が確認されている。このことから、カールム/ワバルトゥムでは、金属加工が行われていた。



表 6.6 カールム・カニシュ第 1b 層と同時期にあたるカールム/ワバルトゥムの建物跡と工房跡から出土した遺物

種類	Type	カールム/ワバルトゥムの建物跡			カールムの工房跡
		アリシャル・ホユック	キュルテペ	ボアズキョイ	キュルテペ
短剣	1a	3		3	
	1b	3		1	
	1c	1			
	2	1		1	
	3	2			
槍先	1a	1			
	1b	1		1	
	2	2			
	3			1	
斧	1				
	2a				
	2b		3	1	
	3				
鋏		1		2	
二又の武器					
ナイフ		1	2	5	
鎌		2		2	
錐		38		17	
鑿			2	4	
ボウル					
カップ					
ゴブレット					
フライパン					
バケツ					
リール					
石突		4		1	
ヘラ		1			
鋳型		1	7	2	9
ビンセット					
ビン	1	5		2	
	2	9		5	
	3	1		4	
	4	9		26	
	5				
	6	8		15	
	7	8		2	
	8	1		2	
	9	4		1	
	10	4			
針		12		31	
小さいリング		8		2	
ブレスレット/アンクレット		3		5	
スタンプ		2			
笏					

最後に、カールム/ワバルトゥム区域の墓から出土した遺物についてみていく。対象遺跡は、中央アナトリアのアリシャル・ホユックのワバルトゥム、キュルテペのカールムである。各遺物の出土数の詳細は、表 6.7 を参照のこと。

表 6.7 からカールム・カニシュ第 Ib 層の時期にあたる層から出土した遺物の特徴は次の通りである。

- 1) アリシャル・ホユックのワバルトゥム、キュルテペのカールムに共通する出土遺物は、ピンタイプ 4 と小さいリングのみである。
- 2) キュルテペのカールムから、ピンタイプ 4 とタイプ 5 が多数出土している。それらの中には、金・銀での表面コーティングや貴石が組み込まれているものもみられる。
- 3) キュルテペのカールムから短剣、槍先、斧の多種類のタイプが出土している。

これらのことから、アリシャル・ホユックのワバルトゥムとキュルテペのカールムからは特徴的なピンが出土していることがわかる。また、キュルテペからは、ピンの装飾が華美なものや短剣、槍先、斧などの種類も豊富なことから、当時交易の中心地として、多くの人、物が行き交い国際色豊かであったと考えられる。

上述の通り、カールム・カニシュ第 Ib 層に相当する層を、出土場所ごとに分けて考察した。全ての出土場所から均一に出土しているわけではないが、出土場所による青銅製品の特徴がそれぞれの状況から見て取れることがわかった。

表 6.7 カールム・カニシュ第 1b 層と同時期にあたるカールム/ワバルトゥムの墓から出土した遺物

種類	Type	カールム/ワバルトゥムの墓	
		アリシャル・ホユック	キュルテペ
短剣	1a		
	1b		3
	1c		1
	2		1
	3	1	
槍先	1a		3
	1b		
	2		
	3		
斧	1		2
	2a		2
	2b		
	3		1
鋳			1
二又の武器			2
ナイフ			
鎌			
錐		1	
鑿			
ボウル			1
カップ			
ゴブレット			
フライパン			
バケツ			1
リール			3
石突			
ヘラ			
鋳型			
ピンセット			
ピン	1		
	2		
	3		
	4	1	6
	5		10
	6		
	7	1	
	8		
	9		
	10		
針			
小さいリング		4	2
プレスレット/アンクレット			2
スタンプ			
笏			

### 6.3 文献史料と考古資料からの考察

カールム・カニシュ第 II 層と第 Ib 層の交易が行われていた時代背景については、第 1 章で触れた。本頁では更に、その歴史学的な背景と考古資料との関連性について考察を試みる。ここでは特に、カールム・カニシュ第 Ib 層の終焉時期に焦点を当てる。

まず、この時期には、中央アナトリアのキュルテペを始め、ボアズキョイ、アリシャル・ホユックでも出土状況から大火災による破壊があったと考えられるが、それらの遺跡で、相次いで何が起ったのだろうか。

それを推論するには、第 1 章でも言及した通り、オーリン(L.L. Orlin 1970)による説を採用するのが現時点においては最も妥当であると思われる。オーリンは、カニシュ＝ネシャという仮定のもとに、「アニタ碑文」から知られる、クシャラの王ピトハナとその子アニタを、カールム・カニシュ第 Ib 層の時期の後半の支配者にもってきている(Orlin 1970: 245)。「アニタ碑文」の内容が信憑性のあるものならば、アニタは、カニシュをネシャと呼ぶ首都とし、ボアズキョイを含む広大な領土からなる「アニタ王国」を中央アナトリアに築いた人物であるということになる。更に、ピトハナとアニタが立ち去った後、クシャラは、地方的な勢力によって支配され続けていたが、後にヒッタイト王国を築く人たちの先祖が新しい王朝を築き、アニタ王国と対峙するようになる(Orlin 1970: 246)。そして、このクシャラの新王朝が、ネシャを攻め、その都市は、カールム区域を含め、甚大なる大火災による破壊を被ることになったと結論づけることができる(同上)。もしオーリンの仮説が正しいとすれば、クシャラの新王朝は、その手を緩めず、ネシャに次いでアムクワ(アリシャル・ホユック)、そして、北上してハトゥシュ(ボアズキョイ)を攻め、大火災により破壊をもたらしたと考えられる。他の都市や町も、この出来事に巻き込まれ、この時に他の都市や町にあったカールムやワバルトゥムも歴史上から姿を消したのではないだろうか。

つまり、第 1 章で詳述した、アッシリア・コロニー時代の編年表は、考古資料を扱う上での年代の目安となり、更に、青銅製品そのものの文化編年からというよりは、火災を伴う破壊層から出土した考古資料の出土状況から、文献史料の編年を裏付ける証左となったのである。

#### 6.4 おわりに

本稿ではアッシリア・コロニー時代という中央アナトリアとアッシュールとの間で、交易が盛んに行われていた時代の交易路沿いから出土した青銅製品の比較から、各都市や町の関連性を明らかにすることを目的として研究を行った。その結果、中央アナトリアのキュルテペでは、アッシリア商人の交易ネットワークを通じ、前 2 千年紀初頭に北メソポタミア地域と強く結びついていたことが文献史料に加えて、考古資料からも示唆することができた。

また、本稿独自の試みとして、カールム・カニシュ第 II 層と第 Ib 層にそれぞれの遺跡の出土層位を分け、更に出土場所による詳細な比較考察を行った。カールム・カニシュの年代について、筆者は第 II 層を前 1930 年頃～前 1824 年頃、また第 Ib 層を前 1813 年頃～前 1750 年頃と設定した。カールム・カニシュを第 II 層と第 Ib 層に分けての青銅製品の比較分析は、先行研究では今まで行われておらず、本稿ではその点に注目し分析を行った。その結果、2 つの層序から出土した遺物には、顕著な違いが見られなかった。続いて、資料が豊富に出土しているカールム・カニシュ第 Ib 層から出土した遺物を出土場所によって比較した結果、どのような人々が使用していたのか、当時の生活の一部に、より踏み込む研究となった。更に、青銅製品の価格を考察した結果、青銅製品と銅製品の価格を比べると 2.3 倍青銅製品の方が高いことが明らかになった（第 3 章参照）。このように、青銅製品をカールム・カニシュ第 II 層と第 Ib 層に分けて行った分析や青銅製品の価格を検討する研究は、これまでになかった新たな視点である。

本稿で明確になった点は、次の通りである。

- 1) 青銅製品そのものが交易品として取り扱われていたわけではない。例外として、青銅製の容器等が交易品の種類として文献史料に記載されていることはあっても、それ以外の製品としての青銅製品は扱われていなかった。このことから、交易では、錫や銅の取引はあったが、青銅としての取引が行われていなかった可能性が高い。その為、キュルテペから出土した青銅製品は、アッシリア商人から錫を購入し、更にアナトリア商人からは銅を購入し、それを原料に、カールムの工房で青銅製品が製造

され、その青銅製品は、キュルテペ近郊で消費されていた可能性が指摘できる。

- 2) アッシリア商人による錫交易やアナトリアの商人による銅交易など、当時の交易ネットワークが機能していた。また、キュルテペで使用されていた銅は、アッシリア商人による搬入品ではなく、アナトリア内部の交易により黒海沿岸地域のものが使用されていた可能性が高い。
- 3) 出土した青銅製品が類似していたため、交易路にある都市や町では同じ形の青銅製品が使用されていた。またそれにより、鑄造の形も他の地域と共有されていた可能性も指摘できる。

以上のことから、青銅製品の原料である銅や錫は、交易品として取り扱われて、工房のある場所へ運ばれた。そして鑄造された青銅製品は、交易ネットワークを移動することではなく、現地で消費されたと結論付けられる。

一方で、本稿で明確にならなかった点は次の通りである。

- 1) 青銅製品が交易ネットワーク上の遺跡で普及していたことは明らかになったが、その普及が技術的な普及なのか、モノ(鑄型)による普及なのか判断できないこと。
- 2) 青銅製品の特性上、再鑄造が可能なため青銅製品の出土状況が地域によって均一ではないこと。

改めて本稿は、キュルテペを中心にアッシリア商人の交易、特に青銅製品の原料となる銅と錫に焦点を当てた研究である。本研究成果を軸に、今後更に各都市や町との交易についての研究を進めていくことで、より一層アッシリア・コロニー時代の交易の全体像について理解を深めることができるだろう。また、当時の交易ネットワークは、キュルテペとアッシュールに留まらず、この区間以外にも東はイラン・アフガニスタン、西はヨーロッパ、南はエジプト、北は黒海沿岸と各地に広がっていたと考えるのが妥当である。同時期に各地で青銅製品が作られ、また使用されていたことから、交易ネットワークが広がっていたことが分かる。実際、青銅製品は交易ルート以外で

も多数出土しており、その種類も類似するものが多く見られる（第 4 章参照）。一方、技術もしくは技術者が各地に点在していたのか、それともモノ（鑄型）による普及なのかは明らかになっていない。あくまでも推論ではあるが、アッシリア商人に代わる人々によってイラン・アフガニスタン方面や黒海沿岸・ヨーロッパ方面へ、更に、アナトリアの南には地中海があるため、地中海交易によってヨーロッパまで鑄型や技術の伝搬がされていたのではないだろうか。または、モノ（鑄型）ではなく、各地域の技術者同士で技術交流が行われ、それが広がった可能性も十分考えられる。これらの推論を証左していくとともに、上記で挙げた残された課題を解決していくことで、まずは、アッシリア・コロニー時代の交易の全体像を把握することができるであろう。更に、その後、ヒッタイトが台頭し、ヒッタイトにより鉄が実用化されるまでの経緯と、実用化された後どのように広がっていったのか、それは技術またはモノ（鑄型）による普及なのか、そしてそれは青銅製品と同じような交易路を辿って伝搬されたのかについても、今後明らかになっていくのではないだろうか。今後の研究課題である。

図版・表

別紙参照。



## 参考文献

### 【 欧 文 】

- Ascalone, E. and Peyronel, L. (2006) ‘Early Bronze IV A at Tell Mardikh-Ebla’, in Alberti, M., Ascalone E. and Peyronel, L. (eds.) *Weight in Context: Bronze Age Weighing Systems of Eastern Mediterranean: Chronology, Typology, Material and Archaeological Contexts*. Proceedings of the International Colloquium, Roma 22nd–24th November 2004. Roma: Istituto Italiano di Numismatica, pp. 49–57.
- Balkan, K. (1955) *Observations on the Chronological Problems of the Kārum Kaniš*. Türk Tarih Kurumu Yayınların dan VII. Seri-No. 28, Türk Tarih Kurumu Basımevi, Ankara.
- Balkan, K. (1957) *Letter of King Anum-Hirbi of Mama to King Warshama of Kanish*. Türk Tarih Kurumu Yayınlarından VII. Seri-No. 31a, Türk Tarih Kurumu Basımevi, Ankara.
- Baqir, T. (1949) ‘Date-Formulae and Date-Lists’, *Sumer* Vol. V No. 1, pp.34-86.
- Barjamovic, G. (2011) *A Historical Geography of Anatolia in the Old Assyrian Colony Period*. The Carsten Niebuhr Institute of Ancient Near Eastern Studies. Copenhagen: University of Copenhagen, Museum Tusculanum Press.
- Barjamovic, G., Hertel, T. and Laesen, M. T. (2012) *Ups and downs at Kanesh: chronology, history and society in the Old Assyrian Period*. Leiden: Nederlands Instituut voor het Nabije Oosten.
- Bienkowski, P. and Millard, A. (eds.) (2000) *Dictionary of the ancient Near East*. London: Published for the Trustees of the British Museum by British Museum Press.
- Bittel, K. (1983) *Hattuscha, Hauptstadt der Hethiter: Geschichte und Kultur einer altorientalischen Grossmacht*. Köln: DuMont Buchverlag. Translated by Omura, S. and Yoshida, D. Reprint, Tokyo: Yamamoto Publications, 1991.
- Blackwell, N. G. (2011) *Middle and Late Bronze Age Metal Tools from the Aegean, Eastern Mediterranean, and Anatolia: Implications for Culture/Regional*

- Interaction and Craftsmanship*. PhD thesis. Bryn Mawr College.
- Blasweiler, J. (2014) *Acem Höyük (2): Buruṣhattum–Puruṣhanda !?*, *Arnhem (nl)*. pp. 1-31.
- Boehmer, R. M. (1972) *Die Kleinfunde von Boğazköy: aus den Grabungskampagnen 1931–1939 und 1952–1969*. Boğazköy-Hattuša 7; Wissenschaftliche Veröffentlichung der Deutschen Orient-Gesellschaft 87. Berlin: Gebr. Mann Verlag.
- Boehmer, R. M. (1979) *Die Kleinfunde aus der Unterstadt von Bogazköy Grabungskampagnen 1970–1978*. Boğazköy-Hattuša, 10. Berlin: Gebr. Mann Verlag.
- Buchanan, B. (1969) 'The End of the Assyrian Colonies in Anatolia: The Evidence of the Seals', *Journal of the American Oriental Society* Vol. 89, pp. 758-762.
- Burney, C. A. (2004) *Historical Dictionary of the Hittites. Historical Dictionaries of Ancient Civilizations and Historical Eras 14*. Lanham, MD: Scarecrow Press.
- Collon, D. (1990) *Near Eastern Seals: Interpreting the Past*. California and London: University of California Press and British Museum Publications.
- Çelik, S. (2006) 'Use of a Vibro-graver Tool for Mechanical Cleaning of Copper Alloy Stamp Seals', *Anatolian Archaeological Studies* XV, pp. 277–81.
- Dercksen, J. G. (1996) *The Old Assyrian Copper Trade in Anatolia*. Istanbul: Nederlands Historisch-Archaeologisch Instituut.
- Dercksen, J. G. (2004) *Old Assyrian Institutions*. MOS Studies 4. Leiden: Nederlands Instituut voor het Nabije Oosten.
- Deshayes, J. (1960) *Les outils de bronze, de l'Indus au Danube (IVe au IIe millénaire)*, 2 vols. Paris: Librairie orientaliste Geuthner.
- Du Mesnil du Buisson, R. (1948) *Baghouz, l'ancienne Cursôtê: le tell archaïque et la nécropole de l'Age de Bronze*. Leiden: E.J. Brill.
- Erkanal, H. (1977) *Die Äxte und Beile des 2. Jahrtausends in Zentralanatolien*. München: Beck.
- Gernez, G. (2007) *L'armement en métal au Proche et Moyen-Orient Des origins à 1750 av. J.-C., Vols I–III*. PhD thesis. Université de Paris 1 Panthéon-

Sorbonne.

- Goetze, A. (1953) 'An Old Babylonian Itinerary', *Journal of Cuneiform Studies* Vol. 7, pp. 51-72.
- Güterbock, H. G. (1997) *Perspectives on Hittite civilization: selected writings of Hans Gustav Güterbock*, in Hoffner, H. A. Jr. and Diamond, I. L. (eds.). Chicago: Oriental Institute of the University of Chicago.
- Herrmann, G. (1968) 'Lapis Lazuli: The Early Phases of Its Trade', *Iraq* Vol. XXX Part I, pp. 21-57.
- Japanese Institute of Anatolian Archaeology (2009) *Provided for site information and bronze finds data at Kaman-Kalehöyük from Japanese Institute of Anatolian Archaeology at Kaman*. Turkey and Tokyo, Japan.
- Joukowsky, M. S. (1996) *Early Turkey: An Introduction to the Archaeology of Anatolia from Prehistory through the Lydian Period*. Dubuque, IA: Kendall/Hunt.
- Kaschau, G. (1999) *Lidar Höyük: die Keramik der Mittleren Bronzezeit*. Mainz am Rhein: Philipp von Zabern.
- Klein, H. (1992) *Untersuchung zur Typologie bronzezeitlicher Nadeln in Mesopotamien und Syrien*. Saarbrücken: Saarbrücker Druckerei und Verlag.
- Klengel, H. (1979) *Handel und Händler im alten Orient*. Böhlau: Leipzig Koehler & Amelang. Translated by Egami, N. and Gomi, T. Reprint, Tokyo: Yamakawa Publications, 1983.
- Koliński, R. (2012) 'Adam Mickiewicz University excavations in Sector P at Tell Arbid (spring 2009)'. *Polish Archaeology in the Mediterranean* 21. Polish Centre of Mediterranean Archaeology, University of Warsaw (PCMA UW), Wydawnictwa Uniwersytetu Warszawskiego (WUW), pp. 537-557.
- Kontani, R., Sudo, H. Yamaguchi, Y. Hayakawa, Y. H. and Odaka, T. (2014) 'An Archaeological Survey in the Vicinity of Kültepe, Kayseri Province, Turkey.' in Atici, L., Barjamovic, J., Fairbairn, A. and Kulakoglu, F. (eds.). *Current Research at Kültepe - Kanesh: An Interdisciplinary and Integrative Approach to Trade Networks, Internationalism, and Identity*. Journal of Cuneiform

- Studies Supplemental. Lockwood Pr, pp. 95-106.
- Kool, J. (2012) *The Old Assyrian Trade Network from an Archaeological Perspective*. MA Dissertation. University of Leiden.
- Koşay, H. Z. and Akok, M. (1966) *Alaca Hoyuk Kazisi 1940-1948'deki Calismalara ve Kesifllere Ait İlk Rapor/ Ausgrabungen von Alaca Hoyuk Vorbericht uber die Forschungen und Entdeckungen von 1940-1948*. Ankara: Turk Tarih Kurumu.
- Koşay, H. Z. and Akok, M. (1973) *Alaca Höyük excavations, 1963-1967*. Ankara: Türk Tarih Kurumu Basımevi.
- Kulakoğlu, F. (2011) 'Kultepe-Kaneş: A Second Millennium B.C.E. Trading Center on the Central Plateau', in Steadman, S. R. and McMahon, G. (eds.), *Ancient Anatolia*. Oxford: Oxford University Press, pp. 1012–30.
- Kumagai, K., Fukuda, K. and Nakai, I. (2006) 'A Brief Report on a Magnetic Survey of the Area Surrounding Kaman-Kalehöyük in 2005', *Anatolian Archaeological Studies* XV, pp. 203–6.
- Laessøe, J. (1959) 'Akkadian Annakum: "Tin" or "Lead"?'', *Acta Orientalia* Vol. XXIV, pp. 83-94.
- Laneri, N. (2016) *Hirbemerdon Tepe Archaeological Project 2003-2013 Final Report: Chronology and Material Culture*. Bologna: BraDypUS.net.
- Landsberger, B. (1954) 'Asyrische Königsliste und 'dunkles Zeitalter'', *Journal of Cuneiform Studies* Vol. 8, pp. 31-73.
- Larsen, M. T. (1976) *The Old Assyrian City-State and Its Colonies*, *Copenhagen Studies in Assyriology*, Mesopotamia 4. Copenhagen: Akademik Forlag.
- Larsen, M. T. (2015) *Ancient Kanesh: A merchant colony in Bronze Age Anatolia*. New York: Cambridge University Press.
- Leemans, W. F. (1960) *Foreign Trade in the Old Babylonian Period as Revealed by Texts from Southern Mesopotamia*, *Studia et Documenta ad iura Orientis antiquae pertinentia* 6. Leiden: Brill.
- Luckenbill, D.D. (1989a) *Ancient Records of Assyria and Babylonia*, Vol. I. Historical Records of Assyria: From the Earliest Times to Sargon, History &

- Mysteries of Man Ltd., London.
- Luckenbill, D.D. (1989b) *Ancient Records of Assyria and Babylonia*, Vol. II. Historical Records of Assyria: From Sargon to the End, History & Mysteries of Man Ltd., London.
- Massimino, M. (2013) *Metalworking in Anatolia during the Early Second Millennium B.C.: The Case of Hirbemerdon Tepe*. MA dissertation. Università degli Studi di Catania.
- McMahon, A., Colantoni, C., Frane, J. and Soltysiak A. (2009) *Once There was a Place: Settlement Archaeology at Chagar Bazar 1999-2002*. British Institute for the Study of Iraq.
- Mellaart, J. (1957) 'Anatolian Chronology in the Early and Middle Bronze Age', *Anatolian studies* VII, pp. 55–88.
- Michel, C. (2003) *Old Assyrian bibliography of cuneiform texts, bullae, seals and the results of the excavations at Assur, Kültepe/Kanis, Acemhöyük, Alisar and Bogazköy*. Leiden: Nederlands Instituut voor het Nabije Oosten.
- Michel, C. (2011) 'The Kārum Period on the Plateau', in Steadman, S. R. and McMahon, G. (eds.), *The Oxford Handbook of Ancient Anatolia: (10,000-323 BCE)*. Oxford: Oxford University Press, pp. 313–36.
- Mielke, D. P. (2011) 'Key Sites of the Hittite Empire', in Steadman, S. R. and McMahon, G. (eds.), *The Oxford Handbook of Ancient Anatolia: (10,000-323 BCE)*. Oxford: Oxford University Press, pp. 1031–54.
- Monroe, C. M. (2007) 'Money and Trade', in Snell, D. C. (ed.), *A Companion to the Ancient Near East*. Malden, MA: Blackwell, 171–84.
- Muhly, J. D. (1993) 'Early Bronze Age Tin and the Taurus', *American Journal of Archaeology* 97 (2), pp. 239–53.
- Muhly, J. D. (2011) 'Metal and Metallurgy', in Steadman, S. R. and McMahon, G. (eds.), *The Oxford Handbook of Ancient Anatolia: (10,000-323 BCE)*. Oxford: Oxford University Press, pp. 858–76.
- Müller-Karpe, A. (1994) *Altanatolisches Metallhandwerk*. Neumünster: Wachholtz.

- Oates, D. (1968) *Studies in the Ancient History of Northern Iraq*, The British Academy, London.
- Oguchi, H. (1998) 'Notes on Khabur Ware from Sites Outside Its Main Distribution Zone.' *AL-RĀFIDĀN* Vo. XIX. Tokyo: The Institute for Cultural Studies of Ancient Iraq, pp. 119-33.
- Oguchi, H. (1999) 'Trade Routes in the Old Assyrian Period'. *AL-RĀFIDĀN* Vol. 20, Tokyo: The Institute for Cultural Studies of Ancient Iraq, pp. 85-106.
- Oguchi, H. (2000) 'The "Late" Khabur Ware Problem once again.' *AL-RĀFIDĀN* Vo. XXI. Tokyo: The Institute for Cultural Studies of Ancient Iraq, pp. 103-26.
- Omura, S. (2002) 'Preliminary Report on the 16th Excavation at Kaman-Kalehöyük (2001)', *Anatolian Archaeological Studies* XI, pp. 1-43.
- Orlin, L. L. (1970) *Assyrian Colonies in Cappadocia. Studies in Ancient History I*. Mouton: The Hague and Paris.
- Orthmann, W. (1980) 'Kaniš', in Ebeling, E. von and Meissner, B. (eds), *Reallexikon der Assyriologie und vorderasiatischen Archäologie*. Berlin and New York: Walter de Gruyter, pp. 369-89.
- Özfirat, A. (2005) *Üçtepe II: Tunç Çağları* (Kazı ve yüzey araştırması ışığında). Istanbul: Ege Yayınları and Zero productions [distributor].
- Özgüç, N. (1968) *Seals and Seal Impressions of Level Ib from Karum Kanish*. Türk Tarih Kurumu Yayınlarından, V. Seri, Sa. 25. Ankara: Türk Tarih Kurumu Basımevi.
- Özgüç, T. (1959) *Kultepe-Kaniş: New Researches at the Center of the Assyrian Trade Colonies*. Türk Tarih Kurumu Yayınlarından, V. Seri 5, Sa. 19. Ankara: Türk Tarih Kurumu Basımevi.
- Özgüç, N. (1968) 'New Light on the Dating of the Levels of the Karum of Kanish and of Acemhöyük near Aksaray', *American Journal of Archaeology* Vol. 72, pp. 318-20.
- Özgüç, T. (1986) *Kultepe-Kaniş II: New Researches at the Trading Center of the Ancient Near East*. Ankara: Türk Tarih Kurumu Basımevi.

- Özgüç, T. (1999) *Kültepe-Kaniš/Neša sarayları ve mabetleri = The palaces and temples of Kültepe-Kaniš/Neša*. Ankara: Türk Tarih Kurumu Basımevi.
- Özgüç, T. (2003) *Kültepe Kaniš-Neša: The Earliest International Trade Center and the Oldest Capital City of the Hittites*. Tokyo: The Middle Eastern Culture Center.
- Parzinger, H. (2002) 'Das Zinn in der Bronzezeit Eurasiens', in Yalçın, Ü. (ed.), *Anatolian Metal II. Der Anschnitt, Beiheft 15*. Bochum: Deutsches Bergbau-Museum, pp. 159–77.
- Pecorella, P. E. (2003) *Tell Barri/Kahat: la campagna del 2000: relazione preliminare*. Firenze: Firenze University Press.
- Philip, G. (1989) *Metal Weapons of the Early and Middle Bronze Ages in Syria-Palestine*. Parts i-ii, BAR International Series 526 (i) (ii). Oxford: BAR.
- Philip, G. (2006) *Tell el-Dab'a XV: metalwork and metalworking evidence of the late Middle Kingdom and the second intermediate period*. Wien: Verlag der Österreichischen Akademie der Wissenschaften.
- Postgate, J. N. (1992) *Early Mesopotamia Society and Economy at the Dawn of History*. London and New York: Routledge.
- Powell, M. A. (1971) *Sumerian Numeration and Metrology*. Minnesota: University of Minnesota.
- Sagona, A. and Zimansky, P. (2009) *Ancient Turkey*. London: Routledge.
- Schmidt, E. F. (1932) *The Alishar Hüyük Season of 1928 and 1929, Part I*. Chicago, IL: The University of Chicago Press.
- Stech, T. and Pigott, V. C. (1986) 'The Metals Trade in Southwest Asia in the Third Millennium B.C.', *Iraq XLVIII*, pp. 39–64.
- Veenhof, K. R. (1972) *Aspects of Old Assyrian Trade and Its Terminology*. Studia et Documenta. Ad Iura Orientis Antiqui Pertinentia X. Leiden: Brill.
- Veenhof, K. R. (1985) 'Eponyms of the "Later Old Assyrian Period" and Mari Chronology', *Mari: Annales de Recherches Interdisciplinaires* 4, pp. 191–218.
- Veenhof, K. R. (1995) 'Kanesh: an Assyrian colony in Anatolia', in Sasson, J. (ed.), *Civilizations of the Ancient Near East Vol. II*. New York: Scribner, pp.

859–71.

- Veenhof, K. R. and Eidem, J. (2008) *Mesopotamia: The Old Assyrian Period*. Orbis Biblicus et Orientalis 160/5, Annäherungen 5. Fribourg: Academic Press; Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht.
- Walker, C. B. F. (1980) 'Some Assyrians at Sippar in the Old Babylonia Period', *Anatolian Studies* XXX, pp. 15–22.
- Walker, C. B. F. (1995) 'Mesopotamian Chronology', in D. Collon(ed.), *Ancient Near Eastern Art*, British Museum, pp. 230–8.
- Weisgerber, G. and Cierny, J. (2002) 'Tin for Ancient Anatolia?', in Yalçın, Ü. (ed.), *Anatolian Metal II*. Der Anschnitt, Beiheft 15. Bochum: Deutsches Bergbau-Museum, pp. 179–86.
- Wilkinson, T. C. (2014) *Tying the Threads of Eurasia: Trans-regional Routes and Material Flows in Transcaucasia, eastern Anatolia and western Central Asia, c. 3000-1500BC*. Leiden: Sidestone Press.
- Wilkinson, T.J. (1990) *Settlement and land use at Kurban Höyük and other sites in the lower Karababa Basin*. Chicago: Oriental Institute of the University of Chicago.
- Willies, L. (1993) 'Early Bronze Age Tin Working at Kestel', in Yener, K. A. and Vandiver, P. B. (1993) 'Reply to Muhly, J. D., "Early Bronze Age Tin and the Taurus"', *American Journal of Archaeology* 97 (2), pp. 255–64 and pp. 262–4.
- Yalçın, Ü. (2003) 'Metallurgie in Anatolien', in Stöllner, T., Körlin, G., Steffens, G. and Cierny, J. (eds.), *Man and Mining: Studies in Honour of Gerd Weisgerber on the Occasion of His 65th Birthday*. Bochum: Deutsches Bergbau-Museum, pp. 527–36.
- Yenel, K. A., Kulakoğlu, F., Yazgan, E., Kontani, R., Hayakawa, Y. S., Lehner, J. W., Dardeniz, G., Öztürk, G., Johnson, M., Kaptan, E. and Hacı, A. (2015) 'New tin mines and production sites near Kültepe in Turkey: a third-millennium BC highland production model'. *Antiquity* 89 (345), pp. 596–612.
- Yener, K. A. (2000) *The Domestication of Metals: The Rise of Complex Metal Industries in Anatolia*. Culture and History of the Ancient Near East 4. Leiden,



Boston and Köln: Brill.

Yener, K. A., Geçkinli, E. and Özbal, H. (1996) 'A Brief Survey of Anatolian Metallurgy prior to 500 BC', in Demirci, Ş., Özer, A. M. and Summers, G. D. (eds.), *Archaeometry 1994: Proceedings of the 29th International Symposium on Archaeometry*. Ankara: Tübitak, pp. 375–91.

Yener, K. A. and Özbal, H. (1987) 'Tin in the Turkish Taurus Mountains: the Bolkardağ Mining District', *Antiquity* 61 (232), pp. 220–26.

Yoshida, D. (2002) 'Ein altassyrischer Text aus Kaman-Kalehöyük', *Anatolian Archaeological Studies* XI, pp. 133–37.

Zaccagnini, C. (2001) 'A Note on Old Assyrian Weight Stones and Weight System', in Gaziani, S., Casaburi, M. C. and Cagni, L. L. (eds), *Studi sul Vicino Oriente Antico*. Napels: Instituto Universitario Orientale, pp. 1203–13.

#### 【WEB】

*Japanese Institute of Anatolian Archaeology: Yassı Höyük* (2012) Available at: [http://www.jiaa-kaman.org/jp/excavation\\_yh\\_4.html](http://www.jiaa-kaman.org/jp/excavation_yh_4.html) (accessed 12 March 2019).

*Polish-Syrian Archaeological Expedition to Tell Arbid* (2017) Available at: <http://www.tellarbid.uw.edu.pl> (accessed 12 March 2019).

*The Archaeological Settlements of Turkey-TAY Project: Lidar Höyük* (2011) Available at: [http://tayproject.org/TAYmaster.fm\\$Retrieve?YerlesmeNo=1904&html=masterengdetail.html&layout=web](http://tayproject.org/TAYmaster.fm$Retrieve?YerlesmeNo=1904&html=masterengdetail.html&layout=web) (accessed 12 March 2019).

#### 【邦文】

大村幸弘(1995)「第9次カマン・カレホユック発掘調査(1994年)」『アナトリア考古学研究』 Vol.IV 1-48 頁.

大村幸弘(1996)「第10次カマン・カレホユック発掘調査(1995年)」『アナトリア考古学研究』 Vol.V 1-69 頁.

大村幸弘(2004)『アナトリア発掘記 カマン・カレホユック遺跡の二十年』日本放送出版協会.

大村正子(1997)「カマン・カレホユック出土アッシリア商業植民地時代の印

- 章」『アナトリア考古学研究』 Vol.VI 115-133 頁.
- 小口裕通(2000)「ハンムラビを凌ぐ王シャムシ・アダド 1 世とその王国の興亡」松本健・NHK スペシャル「四大文明」プロジェクト編著『四大文明 [メソポタミア]』 NHK 出版 所収 188-204 頁.
- 小口裕通(2001)「古アッシリア時代の錫交易と土器の分布」『西アジア考古学』 第 2 号 39-56 頁.
- 川崎康司 (1998)「古アッシリア期のアナトリア交易における密輸操作とティミルキア(Timilkia)」『オリエント』 Vo.41(1), 1-15 頁.
- 川崎康司(2000)「古バビロニア期交易における国際市場としてのエシュヌナ王国の役割」『オリエント』 Vo. 43(2), 15-29 頁.
- 紺谷亮一(1999)「ヒッタイト帝国成立の背景」『歴史人類』第 27 号 148(95)-118(125)頁.
- 佐々木稔(2002)「I 古代アジアの鉄と銅」佐々木稔編著『鉄と銅の生産の歴史—古代から近世初頭にいたる』 雄山閣 3-24 頁.
- フィネガン、ジャック (三笠宮崇仁 訳)(1983)『考古学から見た古代オリエント史』 (Jack Finegan, *Archaeological History of Ancient Middle East*, Westview Press, Inc. [1979]の邦訳) 岩波書店.

## 謝 辞

本博士学位請求論文は、筆者が国士舘大学大学院、グローバルアジア研究科グローバルアジア研究専攻、博士後期課程に在籍中の研究成果をまとめたものである。同研究科教授である小口裕通先生には、同大学院修士課程から指導教員として本研究の実施の機会を与えて戴き、その遂行にあたって終始ご指導を戴いた。ここに深く感謝の意を表する。また、ノートルダム清心女子大学教授である紺谷亮一先生には、副査としてご助言を頂くとともに、長年にわたる現場でのご経験から本研究に対してご助言を戴いた。ここに深謝の意を表する。また、国士舘大学大学院グローバルアジア研究科教授である小口和美先生にも、副査として細部にわたりご指導を戴いた。ここに深謝の意を表する。

また、本研究に際し、ダラム大学のグラハム・フィリップ教授、ロビン・スケート教授にも多くの示唆を与えて戴いた。ここに深謝の意を表する。

本研究の第4章では、研究資料である青銅製品の資料を、(公財)中近東文化センター附属アナトリア考古学研究所長である大村幸弘博士にご提供戴いた。ここに深謝の意を表する。

同研究科の修士課程・博士後期課程に在籍中には、本研究のみならず、講義などを含め多くの先生方にご指導戴いた。ここに感謝の意を表する。また、本論文執筆にあたりご協力いただいた研究科の皆様にも、ここに感謝の意を表する。

最後に、研究生活を支え見守ってくれた両親と家族に謝意を表する。

常木麻衣